相棒と共に翔る

ゴールド@モーさん好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは織斑一夏という男の登場により巻き添えを食らってしまった男。

野上（のがみ）ゴールド（ごーるど）の物語である。

処女作なため至らない事が多々あるかもしれませんがご了承ください。

目次

第0話 …… 1
設定【少しのネタバレあり】 …… 4
1話 …… 6
2話 …… 8
3話 …… 11
4話 …… 14
5話 …… 17
6話 …… 24
7話 …… 29
8話 …… 34
9話 …… 38
10話 …… 43
11話 …… 49
12話 …… 56
13話 …… 60
14話 …… 64
15話 …… 67
16話 …… 70
17話 …… 73
18話 …… 76
19話 …… 78
20話 …… 86
21話 …… 89
22話 …… 93

23話 ―― 96
24話 ―― 99
25話 ―― 103
26話 ―― 107
27話 ―― 110
28話 ―― 113
29話 ―― 116
30話 ―― 119
31話 ―― 121
32話 ―― 125
33話 ―― 130
34話 ―― 134
35話 ―― 136
36話 野上VS織斑 ―― 140
37話 同居人に対する気苦労 ―― 146
38話 雷の舞と嵐の舞 ―― 152

第０話

《世界で唯一ＩＳを操れる男！　織斑一夏！》

俺は朝食を取りながらテレビでニュースを観ているのだが……つまらないな。

最近はこればっかだ。いやねしょうがないよ、しょうがないけどここまで露骨にこの男ばかり映すのもどうかと思うよ。

織斑一夏　　女性だけが操れるとされていたＩＳ正式名称を、【インフィニット・ストラトス】というパワードスーツを操縦出来るただ１人の男。

この男の登場は瞬く間に世界中に広がり、今は各国が地域別主に学生を狙って第二第三の織斑一夏がいないかと適正テストを行っている。

そして今日、とうとう俺の地域の適正テストの日だ。

適正テストは学校でやるらしいけど、受験終わった俺らにはいい迷惑だぜ。

なんでついこないだ卒業式終わらした所に行かなきゃいけないのかね。

まったく本当に迷惑な話だよ。

そう思いながら俺はもう着ないと思っていた制服に再び袖を通して登校した。

この登校によって俺の人生が大幅に狂うことになることも知らずに。

俺は学校に到着し、入学式や卒業式等で見られるような看板の指示に従い移動している。どうやら適正テストは体育館でクラス別にするらしい。

まぁ学年別でやるとはいえ校内の男子生徒全員を調べるのだ。なら広いところでやるのが道理か。

そんな事を考えていたら体育館についていた。
中では、
「俺もし適正あったらどうしよう。あの学校女だけなんだろ？　ハーレムやん」
「ぼっかお前みたいな奴適正があるわけねぇだろ」
「いやいやもしかしたらあるかもしれないじゃん」
と言った会話があちらこちらでされている。ＩＳは確かにカッコよく空を自由に飛び回れたら気持ちがいいだろうとは思う。思うが正直未だに２人目が発表されていないのだから期待はしない方がいいだろう。
っとそろそろ始るし俺も自分のクラスの列にならんどこう。

そろそろ俺の番か
「ふむ、こいつもダメか……次の方こちらに来てください」
「ハイ、わかりました」
「ではこの機械に手を入れてじっとしててください」
そうして俺は血圧計のような機械に手を突っ込んだら係員の女性がパソコンに何かを打ち込んでいる。
さっきも言ったように期待はしない方がいいな。まぁ織斑一夏って奴がイレギュラー過ぎたんだろう。
そう思っていたら機械の方からピコンと音が鳴り女性が一瞬困惑したかと思えばすぐさまどこかへ連絡を行っている。
どうしたんだ？　機械が故障でも起こしたのか？　と思っていたら
「君名前教えてくれる？　記録に書きたいから」
「え？　わかりました野上ゴールドと言います」
「野上ゴールドっとありがとう、今すぐ私と一緒に応接間まで来てくれる？　話があるから」
「？　わかりました」
どういう事だ？　話？　俺に？　何の？
そう思いながら俺はその女性について行った。

思えばこの時点で薄々気づいてたのかもしれない。だけどその現実があまりに現実離れしていたから気づかないようにしていたのかもしれない。

そうして俺は応接間である女性と話をすることになった。

今じゃ誰もが知っている、あの女性に。

設定【少しのネタバレあり】

野上ゴールド

家族等は孤児のためおらず、中学の学生寮に住んでいた。

容姿は身長は１６７とそこそこでかく、顔も整っており目の色が名前と同じ金色である。

趣味はゲームと読書、そして昼寝と惰眠。

友達は少ないがコミュ障と言う訳ではなく、ただ単に1人が落ち着くから。

料理や洗濯と言った家事は一人暮らしの為か1通り出来る。

口癖は「めんどい」や「だるい」である。

日本人なのになぜ名前がゴールドなのかというと、昔暮らしていた孤児院に自分が捨てられていた際に一緒にゴールドというメモ書きが置いてありそのまま使われた。野上というのは孤児院に送られた子供達に付けられる苗字の1つから選ばれた。

織斑一夏の出現により国が地域別に行った、ＩＳ適正テストに引っかかりＩＳ学園に行くことになった。

元々高校は工業科の所を選んでいた為、数学等の理数系には強いがそれでも最初は下の中ぐらいで補習などでカバーしてもらってる。

性格は基本的にはめんどくさがり屋だが、やらなきゃなと思ったり、諦めがついた時等は本気で取り組む。

その性格あってか学校が始まるまでは勉強に集中していたため、なんとか授業にくいついていってけてる。

一夏に対しては，こいつのせいで来たようなもんなのに何なのこいつ？，，と、参考書捨てた発言で距離を置きます。

ＩＳ学園には強制的に来させられたので上層部や政府にはいい印象はしてないが、教師陣には関係ないし真摯に向き合ってくれるので好印象である。

特に山田先生には勉強の補修を組んでもらう等と、色々とお世話になった（予定）ので他よりも好印象です。

戦闘スタイルは中距離で距離を保ちつつの銃撃戦です。
他にもスモークグレネードやスタングレネード等を使い敵を惑わせて攻撃するなど、意表を突く戦法を使う。
一夏などに「そんなに武器あるとか狡くね?!後特殊弾本当にやめて?!」と言われてもどこ吹く風「敵の戦法に踊らされるほうが悪い、そもそもお前は強い奴持ってるから良いだろ」とやめるつもりは毛頭ない。
他にも敵の意表を突く為に色んなことを考えている。
真っ向から勝負するつもりも毛頭ないらしい。
もし真っ向から勝負する時が来たらそれは万策尽き、最後の悪あがきという事になるだろう。それかそれすらも策のうちなのかもしれない。

山田真耶（２３）
この作品のヒロインとして構想中
年齢に関しては２４の千冬に対して先輩と言っていたので一個下くらいかな？　と思い設定。

ちなみにハーレムにはしない予定です。一夏の方もハーレムにはしません。
ですのでハーレムを期待している方は申し訳ありません。
というかちゃんと理由付け等がしっかりしているならともかく、それができてないハーレム物ってなんか嫌じゃありません？　まぁ俺の文章力ではちゃんとしたヒロインも書けるかどうかですが。

1話

ただいま俺、野上ゴールドはかの戦乙女（ブリュンヒルデ）織斑千冬と共に引越し及び4月の日程についての話を聞いていた。

何故かって？　ＩＳ学園に行くからだよ。

……なんでこうなったんだろ。俺は受験が終わってやっとグダグダできると思ってたのにこれから引越し？　ＩＳに関しての勉強？　めんどくさ。

でもやらねぇといけねぇよな。モルモットは避けてぇし。

俺には後ろ盾どころか親もいない。つまり誰も守ってくれない。

ＩＳ学園はアラスカ条約によって守られているとはいえ卒業するなりで学園から離れてしまえばただのカモ、さらって解剖コースだろう。親もいないから事故死と偽っても騒ぎ立てるやつもいない。

なら死ぬ気で訓練してどこの国でもいいから正式に契約してもらうしかないよな。

たしかＩＳ学園にはたくさんのイベントがあったはずだからそこで活躍する。

その為には訓練なのだがどうしたら……

そう考えてたら織斑さんが

「おい野上、話を聞いていたか？」

「あ、聞いてますよ俺はきのことタケノコどっちがいいかってことですよね。俺は断然タケノコ派ですね」

「違う、お前専用の春期講習についてだ」

「え？」

織斑さん曰く、男性はＩＳについての知識が少ない為に少しでも授業についていけるようにとの配慮。

……という建前で本質は後ろ盾のない俺を学園で速やかに保護するためらしい。

そして講習の際にＩＳでの実施訓練もされるが、搭乗するＩＳは訓練機の1台を専用機として渡されるらしい。カスタムもしていいとの事。

こっちとしては願ったり叶ったりだ。
そうして話が進み帰って引越しの準備しなきゃなと考えていたら
「何帰ろうとしているのだ野上」
「え？　まだ話すことあるのですか？」
「いや、ないぞ？」
ん？　どういう事だ？
「なら帰らしてくださいよ。引越し準備とかもあるので早く帰らなきゃ」
「あぁそういうことか、なら大丈夫だ安心しろ。既に数名、お前の借りてる寮の部屋に向かわしといた。準備ならそいつらに任せてお前はこのままＩＳ学園に直行だ」
とこの人は言うのだ。そうかそうか俺はめんどくさい引越し準備しなくていいのか。ハハハハハ……直行？
「え？　直行？　今すぐ？」
「さぁ行くぞ！　実は私もこの業務が終わったら直ぐに帰る予定だったのだがお前の事を上に報告したら連れて来いと言われたんだ。ＩＳ学園の専用機だから数が一人増えても大丈夫だ空きはある」
「ちょっとま……まってくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
俺がそういうも関係無しに腕を引っ張られ車に乗せられた。
俺はいっそ諦めてＩＳでの戦い方を考えよう。
そう思い移動中はずっと戦闘スタイルを考えようとしていたら
「そうだ野上、後で渡すが移動中は時間がもったいないから参考書読んでろ」
「あ、わかりました」
後に俺は参考書の厚さに絶句した。

2話

俺は今、IS学園専用の飛行機に乗りながらある人と一緒に勉強をしている。そのある人とは戦乙女織斑千冬（ブリュンヒルデ）　　ではなく

「……といった風になるからこの公式は成り立っています。ここまで分からないことはありますか？」

「いえ、大丈夫です」

「分かりましたそれでは……」

俺が4月から入る予定の1―1の副担任、山田真耶先生だ。山田先生はIS初心者の俺でも分かるぐらいには説明が上手く心強い。

いくら工業の高校行こうとしていたとしてもここまで簡単に理解は出来なかっただろう。分かりやすいんだけど……これ最初の授業間に合うかなぁ。

明らかに俺がやってるのは基礎中の基礎。初心者の俺が山田先生が教えてくれるだけで分かるのがその証拠。始業式までまだ少しあるとしても勉強に加えて実践訓練もあるわけで……今は勉強に集中しよう。とりあえずは目先のことについてしっかりしなきゃだなうん。

そんな事を思ってたら、

「今日の勉強は一旦ここまでにします、いきなり詰め込みすぎても大変ですから」

「分かりました、今日はありがとうございました。今後も頼りにさせてもらいます」

「ええ存分に頼ってください。なんだって先生なのですから」

と、胸を張って自慢気な感じで言う先生。

教えて貰ってる時もちょいちょい思ってたがこういう時々に出る仕草可愛いな、子供ぽくて。先生には失礼だけど。

「後数時間で学園がある人工島に着きますけど、疲れていませんか？もし疲れているのでしたら、今のうちに寝てらしたらどうですか？」

「はい、では少し復習したらそうさせてもらいます」

ふむ、あと数時間か、そしてあと数日したら女だらけの学園に男の俺が1人ぽつんと。……諦めよう、うん。人間諦めが肝心とも言うし変えられないのなら諦めて前に進もう。

今日から私、山田真耶は一足先にある生徒に勉強を教える事になった。

それはＩＳ適正がある男としては2人目となる野上ゴールド君です。彼は先輩の弟織斑一夏君の発現により国が行った「地区別ＩＳ適正診断」に引っかかってしまったのです。受験も終わってた彼には物凄く申し訳がありませんが、国の意向に従わなければならないので引越しという名の強制連行に出てしまいました。

これだけの事をされたのですから少しぐらいは不貞腐れてもいいと思うんですが彼に私が自分の副担任で春期講習も私が請け負う事を話したら

「そうなのですか。分かりました、ＩＳについては完全に初心者で分からない事だらけ。沢山面倒をかけてしまうかも知れませんが今日からよろしくお願いします」

と礼儀正しく私に挨拶してくれました。根が良いのか又は、自分の置かれている状況をちゃんと把握しているのか。聞くところによると彼は孤児らしく小学、中学も奨学金を貰いながら学校付属の学生寮に住んでいたらしい。奨学金で足りない所は孤児院が負担してくれたとも。

必然的に1人でも生きられるように思考もそっち方面に成長するだろう。だからこんな理不尽な事に晒されても不貞腐れたりせずに出来る事をちゃんと出来るのだろう。

だけど、それは少し寂しいとも思った。1人でも生きられる。確かに彼の出生ならこの考えになるだろうけど本来あの年代ならまだ親の愛を受けられるのだ。それを一切受けずに1人で生きる。友達などは小中と居ただろうがその中でどれだけ心を許せる存在が居ただ

ろうか。きっと少ないだろう、もしかしたら居ない可能性もある。そんなのはすごく酷ではないだろうか？

なら私達はいや、私だけでも彼の心の拠り所になれるようにしよう。なんたって先生は生徒を導く存在なのだから。彼もその１人なのだから。

そう私は誓った。

3話

――――――みくん　　がみくん　　野上くん！

「?!　は、はい！」

「やっと起きましたね野上君。もう空港につきましたよ、さぁ降りる準備をしてください」

「わ、わかりました」

　思いのほかぐっすり寝てしまったな。まぁ今日だけで色々とわちゃわちゃしてたし疲れが溜まってるんだろ。外も暗くなり始めたし速く晩御飯食べて今日はもう寝よう。

　そう思いながら山田先生の指示に従いながら部屋の確認をしてると、あることに気がついた。なんで山田先生荷物置いてるの？

「あの山田先生。何をしてるんですか？」

「え？　荷物の整理ですが、それがどうしました？」

「いやだってここ俺の部屋のはずですよね？　なのになんで山田先生が荷物の整理を、と思いまして」

「あぁそうでした伝え忘れてましたね」

　伝え忘れてた？　なんの事だ？

「この学園でただ2人の男子生徒内の1人である為、色々とアクシデントが起きないとは言いきれません。ですのでそういう事が起きた時に迅速に対処する為、私が同じ部屋に住み着く事になったのです」

　なるほどなるほど、このご時世学園に男がいるだけで嫌と騒ぐ輩もいるかもしれない。そういう時の為に山田先生が近くに居てくれると。よし、これで面倒事を回避できる確率が増えたぞ。でも……

「えーっと一緒に住むとはどのくらいの期間でしょうか」

「そうですね、,, 周りの反応をみてこちらで判断する。,, としか言われてないのでお答え出来ないのです。ごめんなさいね」

「いえ、こちらこそ何から何までそちらに任せっきりで申し訳ないです」

「何を言ってるんですか。まだ野上君は子供なんですからこういう事

は大人に任せればいいんですよ」
　本当にこの先生はいい人だな。でも周り反応をみて判断する……か。1学期前半は荒れるからそこはもう諦めるとして、2学期には流石に落ち着いて別の部屋に移動かな？　いや1学期の不満が爆発して2学期で来るってことも考えられるから、最悪1年か？　それは山田先生に悪いし無い事を祈るしかないな。
「っともうこんな時間ですね、野上君案内ついでに食堂に晩御飯食べに行きませんか？」
「そうですねでも本当に凄いですよねここの食堂。学園に所属している人なら無料で食事ができるなんて」
「はいそうなんですよ。少しでも生徒の負担を減らしてＩＳに専念できるように、各国が支援してくれてるんですよ」
「こちらとしては有難い限りですね。食費って結構かかりますし」
　そんなことを話しながら俺と山田先生は1階にある食堂に向かった。
　料理は多種多様で俺はドリアとハンバーグプレートを、山田先生はオムライスを食べることにした。
　美味そうだなーよし、それでは―
「いただきます」
　うん美味いな。すっげー上手い。
「美味しいですね、こんな料理が毎日タダで食えるなんて夢のようです」
「そうなんですよね。ですが美味しすぎるからって食べすぎてはダメですよ？　あとがっつきすぎてもダメです。よく噛んで下さいね」
「分かってますよ先生、でもその言い方ですと先生と言うよりお母さんみたいですね」
「ちょ、野上君先生はまだそんなに歳をとってませんよ！　もう失礼ですね。いいですか、女性に対して年齢やそれに類似するような事を無闇に言わないように！」
　うーん確かに先生の年齢に対してお母さんは少し失礼だったか。ですが先生言わしてください、童顔と身長のせいで全然怒られてる気

がしません。と言うより可愛い方です。
そんなこんなで俺と先生は食事を終えて部屋に戻り、かわりばんこで風呂に入って明日からの事について少し説明を受けてそのまま寝た。
飛行機でも寝たが座りながらだったから少し疲れてるので関係ない。てかそもそも今日だけて濃密な1日だったんだからそりゃ疲れるよ。
そう思いながら俺はふかふかなベッドに身を委ねながら意識を落とした。

４話

初日の夜に最初の４日間はＩＳの座学に集中、それからはＩＳの実践練習を含めた講習内容になると聞かされた。そして今日は講習５日目、つまり今後の相棒になるＩＳを決める事になる。この４日間俺は考えて機体とカスタムのコンセプトを既に決めてまとめてある。

そう説明したら、

「え？　もう決めてたのですか?!　うーんでも一応直接見てみませんか？　百聞は一見にしかず、とも言いますし」

と言われた。たしかにこれから世話になるであろう機体を直接見ないで決めるのもあれだな、と思い山田先生と一緒にＩＳがある格納庫へ向かってる。

「そう言えばまだどっちの機体にするか聞いていませんでしたけど、どちらにする予定だったのですか？　やっぱり日本の打鉄（うちがね）でしょうか？」

「いえ、俺はラファールの方にしようと思っています」

ＩＳ学園に配備されている機体は２種類ある。

まず純国産のＩＳ、打鉄。日本の第２世代で防御に重点を置いたバランス型。攻撃ではなく防御重視と言うのに日本らしさを感じる。

そして俺が選んだＩＳ、ラファール・リヴァイブ。フランスのディノアという会社が開発した第２世代最後の機体である。最後の第２世代ということもあってか第３世代に劣らない性能である。シェア率も第３位とさる事ながら特筆する事は操縦の簡易性により人を選ばない所と、多様な武器でその人の得意な戦術が用意にできるという事。

シェア率が最後の第２世代に対して３位というのだからそれだけ使いやすいのだ。それに加えて多種多様の武器でその人その人に合わせられる。これを選ばない理由が俺には見つけられなかった。故に俺はてっきりラファールをオススメされると思ったが……

「ラファールですか。たしかにあの機体は操作の簡易性に加えて多様な武器で人を選ばないのが売りで初心者向きとされているのですが

……ラファールですか」
「どうしたんですか先生？　そんなに渋って。ラファールの何か問題でも？」
「いえ、ラファールは確かに簡易処理によって操作は初心者向きなのです。私が危惧しているのは武器の方なんです」
「武器？　それこそラファールの売りの気がするのですが……」
「そうですね、確かに売りのひとつなのですが、初めてＩＳに乗る方々はその多種多様の武器を十分に発揮できずに終わっちゃう人が多数なんですよ」
　山田先生曰く確かに操作性は初心者向きだが、配備されている武器が多種多様すぎて十分にその力を発揮出来ず装備を絞ったり、戦闘中にどれを使えば良いのか一瞬迷ってしまいそのうちにやられてしまうなんて事があるらしい。
　確かにそういう事が有るのなら心配してくれるのも分かる。
　そんな事を話している内に俺らは格納庫に着いた。そこにはズラーっとＩＳが整列されている。
　山田先生は再度実物を見せながら特徴を教えてくれた。
「――さてと、これで最後の説明は終わりましたけど決まりましたか？」
「はい、やっぱり俺はラファールを選びたいと思います」
「その理由を聞いてもいいですか？」
「はいそれは――――――――
　俺はラファールを選んだ理由、俺が考えた戦術とカスタム仕様を教えられたら驚かれた。確かに結構装備を標準装備から変えるがそんなに驚かれるだろうか？　そんな事を考えながら俺は初期化（フィッティング）と最適化（パーソナライズ）を行い、１次移行（ファーストシフト）する為にラファールに乗っている。１次移行が終われば いよいよ実践訓練である。１時間ほどして１次移行終わった。
「はい、お疲れ様です。これでこのラファールは晴れて野上君の専用機となりました。どうですか？　記念にこの機体に名前でも付けたりとか」

「名前ですか？」
「そうです。これから苦楽を共にする、言わば相棒のようなものです。ですから自分で名前を付けてそれを呼ぶ。それだけでも試合前等の時に少しですが気が落ち着きますよ？」
　ふむ、そういうものなのか。いや山田先生の事を疑ってる訳じゃないが、名前か……
「モルド・テンペスタ」
『モルド・テンペスタ』っとカッコイイ名前ですね。それに一緒に戦ってくれそうな名前ですねね」
　山田先生はそう言ってウィンドウを操作して登録をやっていた。そして完了したのか俺の目の前には、《モルド・テンペスタ：野上ゴールド専用機》という表示の下にＹＥＳ　ｏｒ　ＮＯと出ていた。俺は迷いなくＹＥＳを押した。そして無意識に俺はこう呟いていた。
「コレからよろしくな相棒」
「さてとそれではこれから実践訓練の為に演習場に向かいますので、ＩＳを待機状態にして下さい」
　えーっと確かＩＳの待機状態にするには、ＩＳに向かって身に着けるものでイメージしやすい物のイメージをぶつけるとか参考書のは書いてあったけど、これって要するにとにかく強くイメージしろってことだよな？
　だったら――
　強くイメージして少ししたらＩＳが光出して消えて行き、右手中指に赤い線がある簡素な指輪が出来ていた。
「無事、待機状態に出来ましたね。それでは行きますよ」
「はい、今日から実践訓練の方もお願いします」
「フフフ、そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ。なんたって先生なんですから。生徒の為ならなんだってやりますよ」
　うーんいつも思うが山田先生の先生なんですから発言は可愛いなぁ。
　この時まさかＩＳの訓練があんなにも辛いだなんてこの時は思いもしなかった。

5話

（甘くみてた……）

そう思いながら俺、野上ゴールドはアリーナの地べたに息を荒らげながら寝っ転がっている。

遡ること1、2時間ほど前

俺は山田先生に案内されながらアリーナに向かってる最中にふとある事を思い出した。

「そういや山田先生、俺のモルド・テンペスタって1次移行しただけで武装の変更とかしてませんけど大丈夫ですか？」

「それに関しては安心してください。今日は歩行や飛行の練習だけ行うつもりなので大丈夫です。野上君は初心者ですのでまずは基礎からやっていきます。武装については実践訓練が終わり次第技術班と一緒に変える予定です」

そうか、確かに武装を使えてもまともに動けないんじゃ意味無いしな。という事はここ数日は飛行訓練に専念でいいのかな。

「あとその時に野上君も一緒に、武装の組み変え作業をやりますよ」

「え？　俺もですか？」

「そうです。いくら学園に技術班がいるとしても無限にいる訳ではありません。ですからここでは各々が自分でやる事が基本ですね。流石に最初から1人ではやれませんので先生や先輩方に教えを乞い、そのあと自立するってのが例年の流れですね」

「確かにそうですね。後自分でやれるっての、なんかカッコイイですね。プロみたいで」

「はい、実際に国家代表選手の方々の中には整備士を兼業する方や下手な整備士よりも上手いって言われてる方もいるのであながち間違ってませんね」

そんな事を話していたら俺等はアリーナについていた。アリーナを見て初めに思ったのは広いという事。ただただ広い。ＩＳの訓練や試合も兼ねる事から広さは必要だとは思うがこんなにも広いのか

と。
「それではこれから実践訓練を始めます。野上君、ＩＳを展開してください」
「分かりました、来い！　モルド・テンペスタ！」
　そう掛け声を上げながらモルドを強くイメージしたら、体に装甲が実体化されていく。更にはセンサー類によって俺に沢山の情報が流れてくる。
（１次移行した時は入力だけだったから気にならなかったけど、この一気に情報が来る感覚や感度の上昇……早めに慣れないとな）
「ＩＳは無事展開できましたね、ＩＳは初めのうちは名前を呼んでイメージしやすくして展開しますが、慣れてきたら瞬時に展開出来るようになるので頑張ってくださいね」
「分かりました」
「はい、いい返事です。それではまずはその状態で歩いてみましょうか」
「分かりましたってうわ！」
　そう言って俺は右足を上げようとしたが早速バランスを崩しかけたが、なんとか持ち直した。
（え？　ＩＳってこんなにも違うものなの？　めちゃくちゃ動きづらいというか、ＩＳ展開時のバランス感覚に慣れてないせいなのか？）
　それもそのはずだろう、ＩＳは確かにすごいパワードスーツで武装を乗せようともアシストで動けるだろう。だが動けるだけだ、制御しきれる訳では無い。
「大丈夫でしたか野上君、ＩＳは慣れてないとバランス感覚や力加減が分からずに転ぶ人等がいるので気をつけてくださいね」
「ありがとうございます、山田先生。出来ればもう少し早くそれが聞きたかったです」
「ご、ごめんなさい。アハハハ」
「ふぅ、さてと気を取り直して今度は慎重に足を出さないとだな」
　最初のうちはフラフラと危なかっしく歩いてたが、数十分したあたりからコツを掴んできたのか問題なく歩けて走れるようにもなって

きた。
「そろそろ慣れてきたみたいですし、次は飛行訓練をやります。飛行に大切なのはとにかくイメージです。自分が飛びたい方向へのイメージが固まっていなかったり、弱かったりすると変な方向に行ったり、飛べないなんて事もあります」
「分かりました、とにかくやってみます！」
（えーっと確か参考書には進行方向に角錐をイメージするって書いてあったが、これって要するに空気抵抗をイメージすればいいのかな？
　細い角錐は空気抵抗が少ないから速くて、てっぺんの角度上げて太くさせれば空気抵抗が増えて遅くなる。そのまま角度を上げていけば角錐が壁となって停止。よし、このイメージで行こう）
　そう考えた俺はとりあえず飛んでみようと、頭上に太い角錐があるのをイメージしてゆっくりと飛行してみた。
「お、おぉこれは少し難しいけど楽しいな」
「上手く飛行出来ましたね、おめでとうございます。それでは飛行出来るのが確認できたのでこれから少しハードな特訓をします。いいですか？」
「大丈夫です！　ドンと来いです！」
「分かりましたそれではまず初めに私がそこまでと言う所まで思いっきり高く飛んでみてください」
「分かりました、やってみます」
　俺は返事を返したあと直ぐに頭上に細い角錐をイメージして速い速度で飛行した。その後に通信で『そこで止まってください』と言われた所で停止した。
『それでは今度は下がってきてください。ただ下がるのではなく上がった速さ並に速い速度で下がってきてください』
　えーっと俺まだそんなに上手く速度制御出来ないから地面にぶつかりそうだけど……あーもうどうにでもなりやがれ！
　要するに減速時体を起こして反対方向に強く飛ぶイメージすればいいんだろ！　クソッタレェェェェェ！

……地面って冷たいね。
うん途中までは良かったと思うんだよ。体起こしてスラスター吹かす所までは行けたんだよ。ただ距離が足らなくてそのまま地面に落下してしまった。
「大丈夫ですか、野上君」
「えぇ何とか無事です。けどやっぱり初めてなのでそうそう上手く着地できませんね」
「そうですね、ですがＩＳ初心者でここまで動けるのは凄いことですよ！　出来ない人は走るまでで１日訓練するっていう人もいるので。ですからそんなに気負わなくて大丈夫です！」
「そうなんですか、それを聞けてなんか安心しました」
ふむ、先生の言葉本当なら俺は筋がいいってことでいいのかな？
それにしても、なんか褒められるって慣れてないから照れるな。それもめっちゃ笑顔でこの先生は言ってくるし。この訓練飴と鞭どころかそのうち飴と飴になるんじゃない？
「それではこの急上昇、急降下運動をあと１、２時間ほど続けますよ」
「え？」
（この結構キツイというか怖い訓練をあと１、２時間?!）
「さぁ頑張りましょう！」
「え、えとあのクッソー！　やってやるよこんちくしょう！」

そして今に至る。いやマジで何がキツいかってしっかりとしたイメージを持ち続ける事だよ。イメージすればいいだけだろ？　って思う人もいるだろうが人間脳を使うだけで疲れるもん。さらに地面とぶつからない為に体も起こすし、何より怖いからその分心労もある。

「お疲れ様です、野上君。今日の訓練はここまでです。はい、これスポーツドリンクです、どうぞ」
「ハァハァ……あ、ありがとうございます山田先生。いただきます」
俺は山田先生から貰ったスポーツドリンクをグイッと一気に流し込む。
「ぷはぁ、生き返るぅ」
「1日目からこれだけ動けるなんて本当に凄いですね、野上君は。このまま行けばクラス対抗戦にも間に合うかも知れませんね」
「山田先生、クラス対抗戦とは何ですか？」
「その名の通り、クラスで代表者を出して学年別にトーナメントをやるんです。代表者は1クラスに1人で、この代表者はトーナメント以外にも生徒会等の会議にも出席するのでまぁクラス委員と考えてくれて構いません」
「ふむふむ、そうなんですか。でもなんで俺なんかにその事を？」
「えっとそれは……」
（ん？　なんか言いづらい事なのか？）
「いえ、こういうのはハッキリ言った方がいいですね。野上君の存在は現在ＩＳ委員会を通じて既に各国の上層部に伝達済みです」
「え？　マジですか?!」
「本当です。恐らくはどの国の上層部も《たまたま巻き込まれてしまった、後ろ盾のない一般人》。との認識だと思います。初の男性操縦者である織斑一夏君がなんの事件にも巻き込まれていないのは、初代はブリュンヒルデであるお姉さんの織斑千冬さんと、ＩＳの創始者篠ノ之束さんと密接な関係であるからです。この２人が後ろ盾なり、彼を守ってます」
「まぁそれだけ大きい名前の方々と密接な関係なら怖くて手も出せませんからね」
「はい、では今度は野上君について考えてみましょう。野上君は正直に言って危険しかありません。今はＩＳ学園にいるので条約によって守られていますが、国が《何らかのこじつけで学園の外に出してそのまま研究所行き》なんて事になる事も有り得なくはありません。そ

れ程までに男性操縦者というものは危険な立ち位置なのです。ここまでは理解できましたか？」
「えぇ何とか……」
（危険危険と思っていたが、理由をこじつけてまで研究所に送りたいってそんなに切羽詰まってるの男の立場って?!　てか日本って人権尊重する国だろ！　その志は既に腐り落ちたって言うのかよ！）
「それでですね織斑先輩と相談した結果、功績を上げてどこかの国、又は会社と正式に契約して後ろ盾を得るしか無いという考えに至りました」
「やっぱりそうなりますよね」
「やっぱりと言うと野上君も……」
「はい、自分の立ち位置の危うさは初めて織斑先生と出会った時に説明されました。それでその時ＩＳ学園で行われる大会では各国のお偉いさんやＩＳの製造会社のお偉いさんが来るとテレビで報道をされてるのを思い出したんです。その人達に認められて専属の操縦者になれないかと」
「確かに各国から来るのは優秀な人材確保が主な理由だったりしますからね。野上君もその考えをしていたのでしたら話は速いですね。春期講習の間は教えると言っていましたが、あれは撤回します。私がその後も貴方を育てます。貴方が各国の人達から珍しさや体目的では無く、貴方の技術が欲しいと言わせるように育ててみせます。ですから私を貴方の師匠にさせてくれますか？」
「と、とんでもない！　そんな事俺からお願いさせて頂くことです！　貴方みたいな人に師事出来るのでしたら俺としても願ったり叶ったりです。ですからこちらこそ、お願いします。貴方に師事させて頂くことを、貴方から技術を授かる事を」
「フフフお互いがお互いに同じような事をお願いするなんておかしいですね。分かりました、貴方の事は私が責任をもって1人前にしてみせます。
　ですが覚悟してくださいね？　やるとなったら私は厳しいですからね」

（はい！　それはもう今日だけで十分分かりました!!）
「ではこの話はもう終わりにして、格納庫へ向いますよ」
「へ？　なんでですか？」
「んもぅ、もう忘れてしまったんですか？　装備の変換作業ですよ！」

　忘れてた。
「え！　いやもうヘトヘトですし、明日でもいいのでは……」
「ダメです。やると決めた事を後まわしにするとダラダラする癖が着いてしまいます。ですので行きますよ、野上君」
「嘘だァァァァ！」

6話

あの後俺と山田先生は格納庫に向かい、疲労困憊の中説明を聞きながらなんとか少し改修をした。山田先生自体、今日だけで改修を終わらす気は無かったらしい。改修を終わらす頃にはいい感じに日も暮れていて、飯時だったのでそのまま食堂に向かった。俺は技術研修生と書かれている紐付き名札を首から下げた。これは春期講習初日に貰った物である。来た日は夜遅かったから誰とも合わなかったがこの寮には当然2人目の男性操縦者の存在を知らない一般生徒達が沢山いる。そんな中男が堂々といるのは騒ぎになるから、《大手ＩＳ会社の息子が技術研修として来ている》というていを装っている。そうでもしなきゃ視線だけで蜂の巣だ（それでも十分蜂の巣にされそうな視線を感じる）。

俺は訓練で疲れていた為か物凄く肉の気分だったので、ガーリックステーキ定食にした。山田先生は天ぷらうどんである。……ここにない料理は無いのではと思い始めてる。

「「頂きます」」

うん今日も美味いなここの料理は。

「ごちそうさまでした。すいません山田先生俺先部屋に戻って風呂入ってていいですか？」

「いいですよ、今日は初めての訓練でしたもんね。湯船に浸かってしっかりと疲れをほぐしてくださいね」

と笑って返された。なんかこれだけで癒されるから本当、山田先生には敵わない。そう思いながら食器をかたして部屋に戻り体を洗った後湯船に浸かった。

「あ，～生き返るぅぅ。はぁ気持ちいなぁ♪　～」

（あー本当に疲れたよ勉強も疲れるけど訓練はマジで疲れた。何回地面とぶつかったんだよ、後半はなんとかなったけどぶつからなくなったらなったで《今度は地面から～m上で停止しましょう》っていや一応初心者ですからね俺?!　はぁ……なんで俺がこんな目に。……ってやばい！）

そう思ったが既に遅い。感じてる物を言葉にした事でそれが明確になってしまった。気分が落ちている時にマイナスなイメージを考えてしまえばそのまま考えはマイナス方面になってしまう。だからゴールドは普段そう感じたりはしても頭の中でわざとそう言葉にしないようにしてる。なぜならそうしてしまうと壊れてしまうからだ。今まで貯めてきた涙のダムがそのマイナスなイメージの悪循環によっていとも容易く壊れるからである。更にこの悪循環は途中で理由の分からない恐怖が舞い降りてくる。理由が分からないのに恐怖を感じる。それが更に悪循環に拍車をかける。気づけばゴールドは外に声が漏れないよう声を殺しながら泣いていた。小さい声を反響させながら泣いていた。自分は1人だからしっかりしようと自分に言いつけるように。これ以上あの人に迷惑がかからないように。必死にあの人にバレないように。今部屋にあの人が居ない事も忘れてしまうくらいの恐怖を感じながら、ゴールドは何年ぶりかの孤独の中、涙を流した。

しばらく泣いて漸く止まった。体は十分に暖まったし、もう寝ようと思い脱衣場に出て服を着てベッドに向かうと……そこにはいつの間にか帰っていた神妙な顔持ちな山田先生がベッドに座っていた。

ゴールドが部屋に戻って3、4分したら山田真耶も食事を終えて部屋に向かっていた。

(野上君は凄いですね。1日目でまだまだ荒いとはいえ飛行の速度制限までやれるとは。このまま行けば本当にすごい選手になるかもですね。いやいや言ったことに自信が無かった訳じゃありませんよ、本当ですよ！　って私は誰に言い訳してるんやら)

そう考えながら私は部屋に戻った。静かな事からまだ風呂なのかな？　と思い風呂場の方に行き、《ただいま》と言おうとしたが……その瞬間に息が止まった。なぜなら音は小さいが中で誰かが泣いてるからだ。誰が？　決まってる野上君だ。では何故？　そう考えたら

直ぐに分かった。
（野上君はこのＩＳ学園に来てから疲れたーやキツイといった事は言ってきたが、１度たりとも泣いていないのだ。今日彼は《初日に織斑先生から自身の身の危険性について聞いた》と言った。ならその事についてちゃんと理解してなくても大なり小なり恐怖を感じていたのではないか？　それを私に心配させまいと気を使わせたのではないか？　そして今日訓練終わりに私は彼に再度自身の身の危険性について話した、話してしまった。それによって恐怖が明確となり、彼の心の許容を超えてしまったのでは？　もしそうなら私はなんて事をしてしまったのだろう。彼を守らんとして放った言葉が逆に傷つけてしまっては本末転倒では無いか。いやそれよりも今考えるべきは彼の心のケアだ。そうと決まればやる事をやるんだ山田真耶）
　そう考えていたら風呂の扉が開いた。やるべき事は分かっている。やり遂げるんだ山田真耶。

　いつの間にか山田先生が帰っていたようだ。なんか神妙な顔してるけど何かあったのかな？
「おかえりなさい山田先生」
「野上君……少し話したい事があるのでこちらへ座って下さりませんか？」
「？　ええ分かりましたけど話ですか？」
　話ってなんだ？　と思いつつもゴールドは山田先生の隣に座った。
「率直に言います。野上君、風呂場で泣いていましたよね？」
「?!　い、いえなんの事言ってるんですか。何か水音と聞き間違えたのでは？」
「いいえ聞き間違いなんかじゃありません。私は少し前に部屋に戻って来たのですが風呂場からは泣き声以外にも怖いという声も聞こえました。それに少し目が腫れてます。これで泣いてないなんて判断はできません」
「、いやーお恥ずかしながら少し訓練がきついもんだったんで泣いてしまいましたよ。あれもう少し何とかなりませんかねぇ」

「それも嘘ですね、野上君。もしそれが本当なら怖いでは無くキツイやもう嫌だといった言葉が出てきます。野上君、本当は自分が置かれている状況に怖くて泣いたのではないのですか？　なら何故私にそんな嘘を言うんですか、そんなにも私が頼りないせ―

「それは違います！」

咄嗟に言った言葉があまりにも大きく、言われた先生も言った俺自身ビックリしている。だけどそれだけは、その言葉だけはこの人に向けて言っていい言葉ではなかったから。たとえそれがこの人自身だとしても。

「なら、何故ですか。何故本当の事を言ってくれなかったんですか」

「これ以上俺は先生方の負担になりたくありません。国の意向によって俺はこの学園に来ました。ですがそんな俺を先生方は快く受け入れてくれました。山田先生なんか他に仕事もあるだろうに俺の春期講習に付き合ってくれてます。普通急に入れられた仕事なら愚痴ぐらい漏らしていいのに、そんな事を思わせない明るい笑顔をいつも俺に向けてくれました。こんなにも俺は先生方に迷惑を掛けているのにこれ以上なんて……申し訳ありません」

俺は心の内を先生に出した。これは俺の本心だ。こんな事言ってしまえば気まづくもなるかもしれないが、言わないといけないと思った。言わないと更に負担を掛けてしまうと思ったからだ。

「そうですか野上君の考えは分かりました……ですがそれがどうしたんですか」

「え？」

「負担？　迷惑？　私はそんな事を微塵に思ってません。何故なら先生にとって生徒というものは大切であり導く存在だからです。貴方もその1人だからです。生徒が勉強について困ってる、なら講習を組んで分からない所一緒に無くそう。ＩＳが上手く操縦出来ない、ならアドバイスや訓練メニューを一緒に見直そう。生徒が悩んでいるのなら、それに真摯に向き合おう。先生とはそういうものなんです。先生にとっては生徒はそれ程までに大事なんです。ですからもう私に迷惑だとか、負担だとか思わずに相談してください。私の持てる力最

大限でこたえてみせます」
　そういうと山田先生は俺を優しく腕で包んでくれた。それが物凄く暖かくて、優しくて、俺はまたしても涙を流してしまった。だがこれは先程の涙とは違う。生きてきた中で1度も流してこなかった。温もりの中での涙だ。
　俺はしばらく泣いたら連続で泣いて疲れたせいか、そのまま瞼を落として眠ってしまった。だが今日はいつもよりよく寝れる、そう思った。

7話

春休みが終わり、今日から学校が始まるのだが……もう部屋に帰りたい。理由は視線だ。春休み中も凄かったけど今回はそれ以上だ。
（なんたって女子校当然の所に男の生徒がいるんだから異物感半端ないよ。視線で俺の体は蜂の巣状態だよ。こんなのが最低今日1日続くのかぁ……うん現実見よう恐らく半年は続くな（遠い目））
そう考えながら俺は自分のクラスである、1―1についたゴールド。入った瞬間に一斉にこっちに視線が集まる。
（……もう腹くくってたけどキツイもんはキツイな。まぁいいや、俺の席はどこだ）
ゴールドは教室の前にディスプレイに記されてる席を確認した。ついでに名前を覚えるために写真も撮っといた。どうやらゴールドは真ん中の最後列の席らしい。そこに座り、そしてそのままイヤホンを着けて読書にふけった。読書に没頭したら視線も時間も気にしなくなり気づけば山田先生と織斑先生が扉から入ってきた。
（っともうこんな時間か。クラスメイトも気づけばみんないるしイヤホンは取っておくか）
「これからＳＨＲを始めます。私はこれから貴方方の副担任を勤める山田真耶です。どうぞよろしくお願いしますね。それではまず出席番号順で自己紹介をしてください」
うーんＩＳ学園って言ってもやる事はまぁ初めは普通だよな。普通じゃなかったら俺が困惑するしその方がいいんどけど。順調に自己紹介が終わっていく中途中でそれが止まる。
「織斑君、織斑一夏君！」
「え？　は、はい！」
「今自己紹介が《あ》から始まって《お》の織斑君の番なのですが……」
あいつなんだ？　ボーッとしてたのか？　呑気なやつだな。
「す、すいません。えー織斑一夏です」
……それだけ？　いや確かに自己紹介後半になるにつれてめんどくさくなるのは分かるけど、お前まだあ行だろ?!　頑張れよ。せめて

趣味かなんかないの。んなんか言うみたいだな。全くあるならあるでさっさといっておわらｓ―
「以上です！」
以上なのかよ、簡素すぎるだろお前。人付き合いめんどくさい俺でももう少し自己紹介は考えるぞ。そう考えていたら、織斑がある人に出席簿でぶったかれてた。
「諸君、私が君達の担任である織斑千冬だ。諸君らを１人前にするように私も全力を、尽くそう。だから諸君らも励んで欲しい」
おぉ、初っ端から織斑をぶっ叩く所を除けばカッコイイ自己紹介だ。本当に織斑をぶっ叩く事以外は本当にカッコイイ。織斑なんで叩いたんだろ、スカッとしたからいいけど。
「キャ――――――！　千冬様、本物の千冬様よ‼？」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
……最初俺は周りからの視線のせいで動物園の檻の中にいるパンダかなんかだと思ってたが違う、ＩＳ学園自体が動物園だ。ゴールドはそう悟った。
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」
「きゃあああああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」
（うわぁ結構エグい事言うなぁ。そういうのは妄想だけにしとけよなぁ、織斑先生の眉間のシワがピクピク動いてるの確認できないのかよ）
「そして織斑、お前はまともに自己紹介もできないのか？」
「いや千冬姉おれは―」バシン！
「学園では織斑先生と呼べ、そう伝えておいたはずだよな？」
「はい、織斑先生」
「それでは山田先生、自己紹介の続きをお願いします」

「あ、分かりました。えーっと織斑君の次なので垣根さんからまた初めて行ってください」
　やっと自己紹介が再開して、とうとうゴールドの番となった。
「俺の名前は野上　ゴールドです。ゴールドという名前ですが容姿で分かる通りバリバリの日本人です。ＩＳの２人目の男性操縦者としてここに入学してきましたが、色々とＩＳ関連で分からない事もあるかもしれないのでその際に助けて頂いたら幸いです。この１年間よろしくお願いします」
（よし、こんだけ当たり障りのない事なら大丈夫だろう。実際問題春期講習で足りてるとは思ってないし、予習復習はしっかりとしないとな。同じ部屋に教師がいる、このアドバンテージを最大限使ってやる）
　そのまま何事もなく自己紹介は終わり、ガイダンス等を軽く説明してＳＨＲが終わった。１０分休憩の後、１時間目が始まる。１時間目は国語である。ＩＳ学園と銘打ってはいるが、その全てがＩＳ関連という訳では無い。国語や数学といった基本科目もしっかりとある。イメージ的には専門学校等をイメージしてくれればわかりやすいかもしれない。ただＩＳ寄りなのも否定はしないがな。
　俺は春期講習で沢山しごかれたおかげでなんとついていける。チラッと視界の隅に織斑を捉えたが何だか焦ってるように見える。
（アイツなんで焦ってるんだ？　俺と同じように春期講習は受けてると思うけど。まぁ俺には関係ないし、いいか）
　２時間目はＩＳ基礎学だ。これは読んで字がごとく、ＩＳの基礎についてだ。これも何とかついてってるが所々分からない単語等が出てくる度にチェックを着けてる。こうする事で復習の時に先生に聞きやすいからな。
「――――という事で現時点ではＩＳを使うには様々な規制がかかっており、基本的には国家の承認が必要不可欠なのです」
「野上君ここまでで、分からない所はありますか？」ボソッ
「所々分からない単語等がありますが、大まかな所は大丈夫そうです」ボソッ

「そうでしたか、では分からない所は後で教えますね」ボソッ
「お願いします」ボソッ
　山田先生は周りながらこっそり心配してくれた。俺、山田先生で良かったわ。てかこのご時世に女尊男卑の思想持ってる先生いないってオアシスかよ。
　ん？　次は織斑にも聞いてる。なんかさっき顔色悪かったが保健室行かなくて良かったのかな？　体調悪いなら早々に言っとけと後でいっとk――
「すいません、全部わかりません！」
　前言撤回、あいつただ単に分からないだけだった。てか、え？　全部？　本当に春期講習受けてたんだよな？
「え、えっと現段階で全く分からない人は他にいますか？」
「そ、そうだ！　確かゴールドって言ったよな。お前は、お前は俺と同じだよな?!」
「一緒にすんなアホ。ていうかお前こそなんで全部分かんねぇだよ、春期講習受けてたんだよな？」
「いや勉強なら授業で何とかなると思ったから断った」
　はぁ?!　アイツなんて馬鹿な事をいやそれよりも
「なら参考書はどうした！　あれは必読と言われて渡されてるはずだろ。それはどうしたんだよ！」
「あーあれね、電話帳と間違えて捨てた―グハッ」
　そう織斑が言うや否やいつの間にか後ろに立っていた織斑先生が出席簿で思いっきり叩いた。
「授業中に分からないからと言って、騒いだり立ったりするとはどういう事だ、織斑。それに必読と言われてた参考書も捨てるとは、それについても何かあるか？」
「い、いや千冬姉」
「学校では織斑先生と呼べ！」
「はっはい！　織斑先生！」
「たく……後で再発行してやるから1週間で覚えろ」
「いやあの厚さは1週間で何とかなるものじゃない気が―」

「聞こえなかったか？　覚えろと言ったのだぞ」
「はい、覚えます」
「それと今日から私が放課後補習を組んでやる。少しでも遅れを取り戻すよう励めよ」
「分かりました」
　とりあえずこれであいつと関わったら面倒だというのがわかったし、なるべく話さないようにしよ。基本的に1人の方がいいし、女子だからって友達になれない事も無いだろう。
　その後普通に授業に戻り2時間目は終わった。約1名他の理由で終わってるが気にしない。そもそもこっちはお前のせいでここに居るようなもんなのだ、その張本人があの様子なんだ。そりゃ腹もたつわ。
「な、なぁゴールド勉強教えてくれねぇか？」
「断る、というか近寄るな。俺まで馬鹿だと思われるだろ。それに馴れ馴れしいから下の名前は寄せ」
「そういうなよ、同じ男性操縦者として頑張ろうぜ」
「いい話風に纏めてるが結局は、テメェが馬鹿したから手伝えって言ってるもんじゃねぇか。誰がそんな事するかよ」
「野上、その様子だと大丈夫だとは思うが織斑に勉強を教えるなよ。自己責任として自分でやらせないと意味が無くなる」
「分かりました織斑先生。分かったか織斑？　まぁせいぜい頑張れよ」
「そ、そんなぁ―」
　やっとこのこいつとの会話も止めれるな、と嫌気が差してた所に。
「少し、宜しくて？」
　金髪の女子が話しかけてきた。

8話

「少し、よろしくて？」
　俺が織斑との会話に嫌気がさして来た時隣から声がかかり、そちらを見ると長い金髪が印象的な女子が話しかけてきていた。
（この人はたしか……）
「へ？誰？」
「なんでしょうか、ミス・オルコット」
　気の抜けた返事をした織斑と違い、ゴールドは確りと挨拶を返した。
「そちらの方はもう少し言葉を選んだ方がよろしいかと思います、それと野上さんはまだ初日だと言うのにもう私の名前を覚えてくださったのですね、ありがとうございます」
「この馬鹿と一緒にはあまりしないでください、ミス・オルコット。男性操縦者がニコイチとかそんな未来起きて欲しくは無いですね。それと名前に関してですが、確かに俺は名前を覚えるために席の張り出しを写真にとりましたが、貴方は少しばかり有名ですのでね。イギリスの代表候補生さん」
「まあ、その事をご存知でしたのですか。男性はＩＳに関わる事が少ないので代表候補生を誰がやってるかまで知ってる人は少ないのですけど……なるほどそちらの方とは違い、予習をしっかりとなさっていらしたのですね」
「そりゃあもう春休み中に師匠にしごかれましたので」
「それはまぁ大変でしたね。ですがそれをやり遂げたのでしょう？何事もやり遂げるにはそれほどの努力が必要となります。私もその事については身をもって知っていますので、誇ってもよろしいかと思いますよ野上さん」
「！　……代表候補生のミス・オルコットにそこまで言われると少しばかり照れますね」
「な、なぁゴールド」
「だから馴れ馴れしいから下の名前はやめろつったろ。んで何だ？」

「その代表候補生ってなんだ？」

その言葉にしばしの沈黙が起きた。
「「はぁ?!」」
（今こいつなんつった?!）
「ど、どうしたんだよ２人とも」
「こいつは……まじでなんもしてこなかったのかよ。いいか俺はさっきミス・オルコットに《イギリスの代表候補生》と言ったな？　それはつまりお前の姉、織斑千冬さんがやっていた国家代表の候補生の事だ。字面で何となくわかるだろ」
「い、いやそれぐらい俺も何となく分かってたよ！　でも一応聞いただけじゃないか」
「どうだか……」
そこで予鈴がなった。
「ほら、３時間目も始まるんだから戻った戻った。ミス・オルコット、貴方と話せて有意義な時間を過ごせました。良ければ昼休憩の際に一緒に食事等をしませんか？　勉強関連で少し聞きたい事もあるので」
「えぇわたくしもですわ。そのお誘い受けますわ。あとミス・オルコットでは無くどうぞセシリアとお呼び下さい」
「それでは俺の事もゴールドと呼んで下さい」
「……明らかに俺と態度が違う」
そんなこんなで何事もなく３時間目、４時間目が終わった。それで今俺はセシリアと一緒に食堂で食事を済ませて勉強を教えて貰ってる。
「この事柄は授業でも山田先生が復唱していたのでチェックをしてい

た方がよろしいかと思いますわ」
「あぁそこか、確かに山田先生は授業で復唱した所は結構な確率でテストに出てたから俺もチェックしてた」
「？　授業は今日が初めてでテスト等はやっておりませんでしたよね？」
「ん？　あぁ春期講習を受けたってさっき言ったろ？　その時の先生が山田先生だったんだよ。全く織斑も惜しい事をしたもんだよ、山田先生の教え方分かりやすいし、個別授業だったから質問もしやすかったし。織斑先生と補習なんて胃が持たねぇよ」
「確かにそうですわね。織斑先生は憧れはしますが1対1で会話等をするには少しばかり緊張しますね」
「だろ？　いやー本当に受けてて良かったわ。そう言えばセシリア話が変わるが来月の中旬にやるクラス対抗戦の事覚えてるか？」
「えぇガイダンスで話してた事ですわよね、それがどうかなさいましたか？」
「いやセシリアはそれに立候補するのかなって、ほら代表候補だし」
「もちろん立候補させて頂きますわ私の専用機のデータを測るにはちょうどいいですし。ですが、それがどうかなさいましたか？」
「いやなに、俺も立候補するから強いライバルだなって思っただけだよ」
「そうですね、そういう事なら私とゴールドさんはライバルになりますね。私は本気でやりますのでそこは悪しからず」
「分かってるよ、こっちも本気でやるつもりだ。油断してると足元すくってやるからな」
「それでしたら私にも代表候補生として意地もあります、初心者に負けるような無様は晒しませんよ」
　そう2人がピリピリさせる雰囲気を醸し出していたが……
「だよなぁ知ってたよそんぐらい。はぁまじでどうすりゃいいんだよ」
「へ？」
　急にゴールドが弱音を言い始めてその雰囲気はぶち壊しである。

「あ、あのゴールドさんどうしましたので？　急に弱音なんて」
「いやいや弱音も言いたくなりますよ、こんな状況じゃ。こっちは何が何でも成りたいのに、俺よりも適任そうで確実に強い人が立候補してるんだよ？　弱音も言いたくなるよ」
「それでしたら立候補はとりｋ＿」
「取り消さないよ」
　セシリアは取り消す事を勧めたが辞めた。その声と眼差しに覚悟とも言える何かがみえたからだ。
「そこまでしてなんで成りたいのかは何となく分かりますが、こちらもやらなきゃいけない事ですので引けませんよ」
「あぁそうしてくれ。引けないものなんて誰にだってある、それがたまたま被っただけだ。それにさっき言った通りお互いが本気なんだ。真剣に取り組もうや」
「それもそうですね、それではこの話は一旦やめて、少し遅いですが食後のティータイムにしませんか？　ここの食堂色々な茶葉も揃えてるようなのですよ」
　ゴールドは本格的にこの食堂に無いものは有るのだろうかと思いつつそのお誘いを受けた。

9話

昼休みが終わり午後の授業が始まった。だがこれと言って何か特別な事は無く、ゴールドは復習の際に分かりやすいようにチェック等を付けながら必死に食らいついていた。そして6時間目は学活である。最初の学校と言えばクラス委員やクラス係を決めるのが鉄板だろう。そしてここはＩＳ学園、つまり―

「これより来月に開催するクラス対抗戦に出場する代表者を決める。因みにこの代表者は対抗戦以外にも生徒会との会議等にも出てもらう為、クラス委員とでも思ってもらいたい。この事も踏まえて自推、他推問わずに言ってくれ」

これを決めるよなっとゴールドは思った。

（それでも自推他推問わないはあかんでしょ。でもまぁライバルが増える前に―）

「織斑先生、俺は代表者に立候補したいです」

「ほう、野上か。お前は自推では無く他推で名前が上がると思ったが……いや、そうだったなお前の場合はやはり自推か」

そうですよ、俺はこれになんとしてもなって各国にアピールする機会が欲しいんですよ。そう嘆いていたら

「織斑先生、私セシリア・オルコットも立候補させて頂きたいです」

「オルコットもか分かった。他の誰か居ないか？　居なければこの2人のどちらかになるが」

お願いします増えないでください。セシリアだけでも手一杯です。クラス対抗戦の代表を決めるから恐らくは対戦だろうけど、セシリア以外にも誰か来たらこっちの身が持たねぇ！

「はいはーい、私は織斑君を推薦しまーす」

「あっ私も私もー」

天は俺を見放した……ガックシ。いや待て、織斑のカスタム使用によってはまだ可能性はあるはずだ。恐らくやつは姉である織斑先生の事を少なからず尊敬しているだろうし、無意識的にも織斑先生が現役時代のカスタムに寄せるかもしれない。えーっと確か織斑先生の

現役時代は……あれ？　確かあの人サーベルだけで勝ち進めたから規格外とか言われてるんじゃなかったけ？　……流石にあの馬鹿でもそんなＩＳには乗らないか。嫌でも近距離特化と言う線も――

「ふむ、立候補はこれで以上だな？　では代表者の決め方だが２週間後の月曜日に第１アリーナでリーグ戦を行い、その総合評価で採決する」

「ちょ、ちょっと織斑先生！　俺は立候補なんて」

「自推他推問わないと言ったはずだ織斑。貴様も腹をくくれ」

「で、でも俺機体に乗った事も無いのにどうやって――」

「貴様には国から専用機が支給される、それを使え。それに学園では貸出も行っている。届くまではそれでならしとけ」

「そ、そんなぁ」

落胆している織斑を尻目にゴールドは内心驚いてた。

（え？　国から専用機が支給？　どゆこと?!　俺訓練機のカスタム何だが……もしかして俺に利用価値がないって太鼓番されてる?!　嘘だろ評価マイナススタート?!）

他のクラスメイトも驚いているのかどよめき出している。ゴールドは自分の評価に対してだが、周りは１年から専用機を持たされることについて。

「静まれ！　とにかくこれは決定事項だ。２週間後の月曜日、その日にクラス代表を決める。次は朝のＳＨＲで説明しきれなかった年間スケジュールについてだ――」

織斑先生の爆弾発言は無かったかのような如く、そのまま授業は進み３分の２授業の時間が済んだ所で話す事が無くなり各自自習となった。

（うーむセシリアだけでなく織斑とも戦わなきゃなのかぁ。放課後の山田先生との訓練でどうするか相談してみよう。師匠ならいい案が浮かぶかもしれない。だけど、師匠ばっかりにも頼れないな）

そう思い、ゴールドはおもむろにノートを取り出し、あるページを開いた。そこにはゴールドの専用機、《モルド・テンペスタ》の情報が事細かに書いてあるものだった。このノートは師匠である山田先生

から
「試合中の動き等を考える時は文字ではなく絵の方が早いし分かりやすいので何かに書く事をオススメします。あとその時に直ぐにスペックを確認できるようにどこかにメモをしてるのもいいかもですね」
　と言われて自作で《ＩＳ訓練ノート》なる物を作ったのである。実際絵（丸に移動なら青、攻撃なら赤の矢印を書いてる）の方が頭の考えを投影しやすくハッキリするので効果的である。それの新たなページに作戦を書いていってる。
（うーん初撃はあれを使うとして、そこをどこに撃ち込むかだが……わざと右を空けて誘い込んであれを使えないだろうか？　それが命中したら畳み込むし、それが外れてもまだこれが残ってる。いや流石にそれも躱されるか？　――――）
　深く考えていると時間の流れというものは速く感じて、いつの間にか終わりのチャイムが鳴っていた。
（おろ？　もう6時間目は終わりか。なら速く訓練に行かないとな。師匠を待ってる間に準備運動とか済ませたいし）
　そう言ってゴールドは足はやに第2アリーナに向かっていった。

　俺がアリーナで準備運動をしていると師匠である、山田先生が到着した。
「こんにちは野上君5時間目以来ですね。聞きましたよ、オルコットさん以外にも織斑君とも戦う事になったらしいですね」
「そうなんですよ、セシリアは昼休みの時に聞いたので分かってそれだけでも頭抱えてたのに織斑先生が《自推他推問わない！》なんて言うから織斑まで……俺はてっきり立候補制かと思ってたからびっくりしましたよ」
「アハハ、その無茶苦茶加減が先輩らしいというか、これで敵が増えて

しまいましたが訓練はこのままのやり方にします」
「それでいいのですか？　正直織斑はまだわからないとして、セシリアの対策ぐらいは取っておいた方がいいのでは……」
「その事なのですがね、野上君が今やってる訓練はそのまま対策になるんです」
「と言うと？」
「セシリアさんのＩＳのデータは以前見せましたけど覚えてますか？」
「はい、イギリスの第３世代《ブルー・ティアーズ》ですよね」
「正解です」
　俺は春休みの時に山田先生からある事を教わった。それは、
「ＩＳ学園ではアリーナで行った訓練や大会は録画データとしては逐一保管されているのです。そしてその録画データは生徒証にあるＱＲコードを読み取る事で開けるサイトや、部屋に支給されてるパソコンから閲覧する事ができます。ですが、これ生徒証に書いてあるのにあんま使われないんですよね。なんででしょう？」
（それはみんなが生徒証あんま細かく読まないからなのでは）
　この事を教えられた時にたまたま最新データがセシリアだった為ついでに説明された。
「それでは私達が行ってる訓練はどういうモノか答えてください」
「えっと、《武器の性質から並列思考処理が必要な為、補習を行いながら模擬戦をする》ですよね。この訓練素人目に見ても難易度の上限振り切ってるような訓練ですがそれがどうしました？」
「確かにこれは難易度的に考えれば初心者向きでは確実に違いますが―っと話がそれましたね。彼女、オルコットさんの専用機の特徴はＢＴ兵器にあります。ですが、これは並列思考処理をこなせればハイパーセンサーで位置が分かるので捌ききれます。ですのでこの訓練は自分の長所を伸ばしながら、相手の長所を削れる訓練なのです。これで分かってくれましたか？」
「なるほど、確かにその通りですね。分かりました、ですがそれだと織斑対策はどうするのですか？」

「現段階で織斑君の専用機については情報がないので対策がしようが無いのでそれに当てる時間は基礎の訓練に当てます」
「という事は本当にいつも通りなんですね、分かりました。それでは今日もお願いします。午前中に言ってた分からない単語等は纏めておいたので今送ります」
「ピロン―ふむふむ分かりました。それでは今日は模擬戦を１０分セットを５回、間の休憩は５分で行います。定位置に行きますよ」
「はい！」
　俺と師匠はＩＳを展開して模擬戦の定位置まで飛行した。因みに師匠が乗ってるのは通常のラファール・リヴァイヴである。
「それではカウントダウンを始めます。準備はよろしいですね？」
「いつでも大丈夫です！」
「分かりました……それではカウントダウン開始」
　そう言うとブザー音が鳴りカウントが５から始まりそして０になった瞬間に両者は動き始めた。

１０話

今日の分の訓練を終えて俺は部屋のベッドで寝そべってる。晩飯にはまだ速いので１通りストレッチしたらパソコンからさっきの訓練の録画データとセシリアの訓練の録画データを開いた。データの見直しする際にもなるべくこうして訓練するように言われているからである。正直体感で授業より頭使うから本気で疲れる。授業よりも頭使う訓練ってなんぞや？　ってなってるよ。でもそんぐらいやらないと代表候補生になんか勝てないからなぁ……そう言えばセシリアの訓練を観てると違和感を感じるんだけど、これはなんだ？　なんかこう上手く言えない違和感、まぁまだ模擬戦は先だからそれまでに分かればいいか。そう思い俺は昼寝を始めた。晩飯がまだだがアラームを付ければいいか、少し寝るだけだし。俺はアラームを設定して昼寝をした。

部屋のお風呂で汗を流して部屋に戻ると野上君はスヤスヤと昼寝をしていた。因みに私と野上君は疲れてる時は部屋のお風呂でシャワーを浴びる。理由としては疲れてる時にシャワーを浴びるとそのまま眠くなってしまうからだ。それなら部屋に戻ってから浴びて、直ぐに体をリラックスさせたいからである。

そしておもむろにゴールドの隣に座ると寝顔を見ながら頭を撫で始めた。

（気持ちよさそうに寝ていますね、最近は講習も訓練も難しくしてるので仕方ありませんね。それにしても野上君はメキメキと強くなっていきますね。師匠として、嬉しい限りですね。戦術も相手の嫌がるような所確りと付けていますし、この事から頭の回転は速いようですし。，，あの武装，は私も経験があるので教えやすいですしね。ですが、ココ最近は訓練以外にも、勉強の予習復習等の頻度が上がってきてるから不安なんですよね。先生なら生徒のそういう行動は嬉しくあるのですが……野上君の場合は頻度が少々度が過ぎてる気がしま

すね。後でそれとなく頻度を下げる事を薦めますか。それのついでに質のいい睡眠の仕方も教えましょう。体を確り休ませる事も大事と言うのをちゃんと理解してもらえるように)

そう考えていたら野上君の端末がなり始めました。おそらくはアラームでしょう。

「ん、んー……フワァもう時間かっと山田先生おはようございます」

「おはようございます野上君。そろそろいいお時間ですが、食堂に一緒に行きますか?」

「そうですね、お腹も減ってますし俺も行きます」

「分かりました、ですが行くのでしたら寝癖直してからにしましょうね。少し酷いですよ」

「え、わ、分かりました」

と少し恥ずかしかったのか足早に洗面台に向かった。フフフ普段確りしてるのを知っていると、こういうのがどうも可愛く感じてしまいますね。これも一緒の部屋にいる役得でしょうね。そう思いながら私は心を高鳴らせた。それが生徒との交流を楽しむ時のとは違う事に気付かずに。

「先生寝癖直してきました」

「それでは行きましょうか」

俺は食堂に向かう最中に山田先生から根を詰め気味になってるからと質のいい睡眠の方法と、休む時間を増やすよう言われた。遅れているからこのぐらいやらなきゃいけないと思ったが、体が壊れては元も子も無いと言われたので少し減らす事にする。そして俺は山田先生と一緒に食堂に着いたのだがそこである事に気付いた。ある事というのも、そこには織斑がクラスメイトの篠ノ之さんと食事をしていたのだが、男の存在感だ。今まで人からの視線で何となく分かっていたが、こうも客観的に見ると本当に凄い違和感だ。だって周り女子なのにそこにポツンと男1人いるのは目立つな。

「……先生今日もやっぱり端っこの方で食事しますか」
「……そうですね」
　スマンが織斑よ、だが生憎と俺もパンダにはなりたくないんだ。さらば―
「あ？　野上じゃねぇか、お前も一緒に晩飯食わないか？」
（くそがァァァァァァァァ！　え？　なにあいつ俺の事呼んでくれちゃったわけ？　こちとら少しでも静かに食事済ませたいのに！）
「はぁ呼ばれちゃったんで俺あっちで食ってきます、山田先生はどうします？」
「そうですねぇ、一緒に食べたいですが生徒達の輪に入るのも気が引けますし今回はやめときます」
「分かりました」
　俺はそう山田先生とやり取りをしたら織斑の方に向かった。
「おぉきたきた一緒にくおうぜ！」
「分かったから、一緒に食うから少し静かにしてくれ。頼むから。目立ってるから」
「お、おうなんかすまん」
（こいつ本当に悪いと思ってるのか？　っとその前に）
「初めまして篠ノ之箒さん。クラスメイトだけどしっかりとした挨拶はまだでしたね」
「そうだな初めしてだな、野上さん。あと出来れば私の事は箒と呼んで欲しい。苗字は苦手なんだ」
「（苗字ってことは姉関連か？）……分かったでは今後ともよろしく箒さん」
「あぁよろしく、野上さん」
「……なぁ、明らかに俺と箒との対応が違うんだが野上さんや」
「そりゃ当然だろ。どっかの馬鹿とは違い箒さんは確りと挨拶は返すし、いきなり馴れ馴れしくしないからな。あと人が変われば対応が違うのも当然だ」
「ウッそれはそうだが……なぁ箒からもなんか言ってくれないか？」
「断る、そもそも野上が言ってる事は正しいし悪いのはお前だ。それ

に必読するって指示されてる参考書を捨てるような馬鹿とは一緒にされたくないんだろ。自業自得だ」
（全くもってその通り）
「そんなー」
　なんかへこんでるが関係ないようかのように、ゴールドはスマホを取り出し訓練の録画データを見ながら食事を進めていた。
「ん？　野上さんは何を見ているのだ？」
「ん？　あぁこれは訓練の録画データだよ。学園ではアリーナで訓練又は模擬戦等をした時は毎回録画データが撮られるんだけど、それは生徒に公開されているんだ」
「そうなのか？　全然知らなかった。野上さんはどこでこれを？」
「春季講習中にＩＳを訓練する時があったんだがその時に知っとくと便利だからって先生が教えてくれた。詳しい事は生徒手帳に書いてあるから確認しときな」
「ありがとう野上さん。おい一夏聞いたか、真面目に春期講習受けていればこういう事をちゃんと知れたのだぞ。今からじゃ遅いかもしれんが頑張るぞ、私も訓練には付き合ってやるから」
「ほ、本当か箒?!　ありがとう、恩に着るよ！」
　うーむさっきから思ってたがこの２人、やけに距離が近いな？　前から知り合いだったのだろか？　まぁ俺には関係ないか。そう思い、飯を済ませてその場から立ち去る。
「じゃあな織斑、箒さん」
「ん、野上さん」
「おうまた明日学校でな」
　出来ればもう関わりたくないとも思いつつ部屋にもどった。部屋には誰も居ないため山田先生はまだ食事してると思われる。
「うーん風呂入って授業の復習したら寝るかな」
　そう考えて風呂場に向かった。

野上君と分かれた私はいつも野上君と食べてた小さいテーブル席に座った。このテーブル席は2人用なので1人でも違和感ないだろう。そう思っていただきますを言おうとしたら向かいに先輩の織斑先生が座った。
「すまない、相席いいか？　こちらはまだ人目が少ないからここら辺がいいのだが……」
「いいですよ、織斑先生。織斑先生は人気者ですからね」
「私としてはもう少し生徒達に自重してもらいたいがな……」
と疲れた顔で愚痴を漏らす先輩。でも生徒達の事も分からなくは無いんですよね。先輩ってかっこいいし、やってきた事もあって憧れの存在なんですよね。……少し行き過ぎてる生徒がいるのは否定しきれませんが。
「そ、それだけ皆さんに慕われてるって事じゃないですか」
「まぁ、そう考えれば少しはマシになるが。っとこの席に座ったのは愚痴の為では無かったな。野上がクラス代表に立候補したのは伝えたはずだが、彼奴のＩＳの操縦はどれほどに育った？　リーグ戦になっても反応が薄かったがもしかして既に諦めてるのか？」
なるほど、先輩なりに野上君を心配しているようですね。ですが―
「いいえむしろその逆です。一層訓練に身が入ってます。恐らくクラスメイトに代表候補生がいるから、少なからず模擬戦をやる事は予想していたのではないでしょうか」
「ふむ、それもそうだな。それに彼奴の立場で諦めるとは本当に全部諦めるような状況だからな」
「そうですね、ですから私がそんな事にならないように育てますよ」
「……あの山田先生がここまでハッキリ言うなんて、少しばっかり驚きましたね」
「確かに、以前の私ではここまでハッキリと言えませんでしたが……約束をしたので」
「それは野上との？」
「それもありますが、自分とのです」

そう答えたら織斑先生に笑われてしまった。なんで笑うんですかって聞いたら

「いやこれは私からは言えないな。自分で気づかないと意味が無いからな。……全く彼奴も隅に置けないな」

どういう事なのでしょうか？　その後もちょくちょく此方を見ては笑顔になる織斑先生が気になってしょうがなかった。

11話

あの日から2週間が経ち、とうとう今日がリーグ戦当日である。大丈夫、今日までの訓練を思い出せ。あの違和感の正体も分かった。基礎的な事から相手の嫌がるような事まで全て出し切るんだ……そういやリーグ戦っていつやるんだ？

「これから朝のＳＨＲを始める。まず初めに今日予定されていたクラス代表を決めるリーグ戦についてだが、５，６時間目を使う。昼休みが終わる前ぐらいには第１アリーナには着いていろ。リーグ戦については以上だ他には――」

なんだろう、思いっきし張り切りながら登校したせいかめっちゃ恥ずかしい。

まぁそれはさておき、昼休みまで何時もどおりっと。

時は経ち第１アリーナのカタパルトデッキにて俺は相棒であるモルド・テンペスタの最終メンテナンスを行っていた。機体はいつも通りだ、後は俺がこいつの能力を活かせるかにかかってる。

因みに戦う順番は

セシリアＶＳ俺

セシリアＶＳ織斑

俺ＶＳ織斑

となっている。これらの試合の合間に１０分の休憩と整備の時間が入る。織斑の力が未知数な以上、まだ相手の力が分かっているセシリアには勝っておきたいが……そう簡単にはいかないだろう。相手はイギリスの代表候補生、生半可な攻撃や戦略は通じないのは分かっている。だが山田先生が前言っていた通り録画データを知るものは少ない。セシリアがそれを知っているかいないかで、勝負の行く末は変わるかもしれない。そう考えていたら腕が震えているのに気づいた。この戦いで負けたら自分を評価してもらえる場面が一気に減るからである。俺が周りに評価されないという事はその分いつ見限られるか分からないという事はである。だがこんな時こそ――

「大丈夫だ、俺には相棒がついてる。それに師匠にあんだけしごかれたんだ。それをちゃんと行えればまだ勝機はある。だから……落ち着け」
俺は腕を掴みながらそう言った。そうだ、まだ勝機はある。ならそれを全力で行えるように落ち着け。ヤケになるな。ガムシャラに勝利する事だけを考えろ。俺にはそれしか出来ないのだから。
「野上君、そろそろ試合が始まりますのでカタパルトの方へ」
「分かりました」
俺が自分の事を鼓舞していたらふいに山田先生から連絡が来た。俺はその指示通りにＩＳを身に纏い、カタパルトに固定させた。
「野上ゴールド、モルド・テンペスタ……出る！」
そうして俺はアリーナに向かった。そこには既にセシリアが定位置に着いていた。
「待たせてしまったかな？」
「いえ、私も今着いたところですわ。それにしても……ゴールドさん、専用機をお持ちでしたのね。貴方も中々隅に置けませんね」
「まぁ俺のは織斑みたいに国からの直属の支給じゃなくてカスタムだけど」
ゴールドが乗っているＩＳモルド・テンペスタはラファール・リヴァイヴのカスタムだが大幅に変わっている。まず装甲の塗装が濃い緑から赤と銀の２色に変更されている。頭部はヘッドホンのようなものと、ゴーグルの様なものが装着されていた。シールドは４枚になりその全てのシールドの裏にはガトリング砲とショートソードの刃が突き出ている。そして後部にブースターが装備されたことによって肥大化している。左腕には同じシールドとガトリング砲が装備されている。両腰にはショートソードが１本ずつと目に見えた所でも大幅な改装である。
「でもその力を侮らない方がいいよ。それで痛い目を見るのはそっちだよ」
「そうですね、ご忠告痛み入りします。ですが、私には代表候補生という面子があります。そんな中相手を侮る程私も強くはありません。

全力で勝ちに行かせてもらいますわ」
「それはこっちも同じさ。自分の弱さなんて自分がよく分かってるつもりだ。だから俺も全力で行かせてもらう」
『おしゃべりはすましたか？　それではカウントダウン開始』
　織斑先生の合図によりアリーナにカウントダウンが響いた。そしてカウントがゼロになった時、両者は即座に動いた。セシリアは主武装であるビームライフルを取り出し速射を行う……はずだった。確かに代表候補生ともなれば武装の換装も速いだろうが、元から用意されていれば話は別だ。ゴールドによる計５丁のガトリング砲による面制圧により、セシリアは速射よりも回避を選んだ。
「さすがにそう簡単には当たってくれないか」
「全くいきなり全部で撃つなんて、ヒヤヒヤさせてくれますわね！」
「こんなんでヒヤヒヤしてくれるんならずっとさせてやるよ！」
　両者は高速飛行を行いながら射撃戦を繰り出すもゴールドにやや分がある。それは武器の特性にある。セシリアがスナイパー系のビームライフルに対してゴールドはガトリング砲が五丁。そしてこれはあくまで機体本体に付いているため拡張領域（バススロット）にはこれの弾薬やほかの武装もある。ハッキリ言えば相性は悪いのだが……
「クソ！　やっぱり速い！」
　ゴールドは最初の面制圧以降は弾の節約の為、２丁ずつ順番に撃っているのだが中々攻めきれない。確かにちゃんと当たってはいるが、その分こちらもシールドの間を攻められているのでおあいこなのである。ならばと、俺は腰のショートソードを引き抜き、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一気に距離を詰めて切りかかるが
「うおおぉぉぉぉぉ！」
「舐めないで下さいまし！」
　彼女も負けじとショートソードを呼び出し応戦する。
「おいおい、そんな極端な装備の訓練してる上に確りと近接出来るのかよ」
「何事も基礎は確りとしないとですからね。そのぐらい貴方も分かっているでしょう？」

「それはそうだが、な！」
　鍔迫り合いの際にシールドのガトリング砲で攻撃するがこれも躱される。全く、予想はしていたがここまでだと涙すら出てきそうだよ。
「あんなに大見得切っていらしたのですから、これだけではないのでしょう？」
「確かにこれだけではないがそれはそちらも同じ事だろ？　出せよ、虎の子を」
「?!　全く、これでも私訓練等は貴方に被らせていたのですがどこで知ったのですやら。ですがそちらがそう迄言うのでしたら最初から全力で行かしてもらいますわ！」
　セシリアはとうとう纏っているＩＳと同じ名の兵装ブルー・ティアーズを射出した。これはイギリスの第３世代が目指した兵器、ＢＴ兵器である。これは多大な集中力を用いる事で遠隔操作を実現させているのだ。だがこれには欠点がある。それは多大な集中力をティアーズの操作に使う事で本人が棒立ちになる事だ。だがそれは録画データを見たところセシリアは４機中３機目を動かしてからであり、２機迄なら本人も戦えるのだ。そしてセシリアが射出したのは２機、つまり２機の厄介な全方位攻撃を避けつつもセシリア本人を倒さなければ行けないという事なのだが―
「それを、待っていた！」
　このゴールドという男はそれを待っていたのである。確かに２機のティアーズの攻撃を避けつつもセシリア本人を攻撃するのは難しいかもしれないが、別段事前に知っていれば対処法も考えれる。それに戦えると言ってもティアーズに多大な集中力を割いてる事に何ら変わらないので、多少だがＩＳの操作も雑になる。つまり何が言いたいかと言うと……このゴールドという男は一見苦しいであろう局面を返し、勢いつけようと考えたのだ。
「そのぐらい出来ることぐらいこちらも知ってんだよ！　こいつをくらいやがれ！」
　俺はおもむろにグレネードランチャーを呼び出し、それを２発撃ち

込んだ。だがその弾はただのグレネードでは無い。
「?! これは煙幕！ ですがハイパーセンサーの前には、グッ?!」
そう一発目はセシリアが言った通りスモークグレネード。だが2発目は違う、2発目は……音響爆弾である。目の前が煙で覆われようともハイパーセンサーでなんとかなる。その無意識な安堵の直後に唐突な耳への直接攻撃。俺は耳あての効果で大音量を防いでいる。微かに緩んだ気が大幅に揺れて集中力が途切れる。集中力が途切れればそれを糧に動いてるティアーズは自由落下を初めてる。そこをガトリング砲で撃ち落とす。
が音響爆弾の効果がもう切れたの反撃を食らってしまった。
「ハァハァまさかティアーズを落とす為にわざと挑発して出させるなんて……それが通じなかったらどうするおつもりでしたの」
「これが通じなくてもまだ次がある。何も考えてなかった訳じゃないんでね」
「……考えを改めた方がよろしいですわね。心の中でやはり貴方には勝てるもんだと思ってましたがそれは取り消します。貴方は全力で戦わねば負けてしまう強者としてこれからみさせていただきます！」
「出来ればそのまま弱者として見て欲しかったのですがね！ ですがそうですね、このままでは埒が明かないので奥の手を使わせてもらいます」
俺はグレネードランチャーで再度スモークグレネードを撃ち込み煙で覆ったら、外側2枚のシールドを固定してるアームを”解除”した。

何もお前だけが遠隔攻撃できる訳では無いんだぜ？

「奥の手を使わせてもらいます！」
そう言って彼はまた、煙で姿を隠した。先程の事もあるがそれよりも早く攻撃すれば関係無いとセンサーを頼り攻撃するが、その時センサーで急激に接近する物体が2体こちらに向かってくる事がわかった。私はとにかくそれを回避しようと高度を上げ、それを確認した時

驚いた。それは……シールドだった。そう先程までゴールドさんのＩＳに装着されていたシールドなのである。どういう事だと思考していたらそれはこちらに向かいながらガトリング砲を発砲している。考えるのは後にして迎撃を行うも、シールドなだけありそうそう簡単には落とせない。更にはゴールドさんからもガトリング砲とアサルトライフルで攻撃されるので対処が追いつかない。たまらず又私は残り２機ティアーズを展開させる。
（この私がまさか全方位攻撃を味合わされる日が来るなんて思いも寄りませんでしたが、何故あのシールドはあれだけ本体から離れられるのですか？　大体の非固定浮遊装備は遠くて１０ｍが関の山。ですがあれはそれを軽く凌駕している。仕組みはなんですの?!　ん？　あれは……）
　セシリアはシールドとゴールドを結んでいる線のような物を発見する。
（あれは、ケーブル？　あれで結ぶ事で簡易的なＢＴ兵器を作ったとでも言うんですか?!　そんな無茶苦茶な！）
　だが現にその無茶苦茶な兵器はちゃんと稼働している。ならそれに対処する迄だ。ＢＴ兵器の操作はこちらの方が上手だと思い知らしめてやろうと。

　クソ！　今の不意打ちもダメかよ。そして又ティアーズが展開されたか。あれ確かに本人の操縦雑になるけど元のクオリティが高ぇから戦う分には変わんねぇんだよなぁ畜生。あんま手の内は晒したくなかったがあれも使うしかねぇか。
　俺はグレネードランチャーを再度呼び出し今度は一発だけ撃ち込んだ。
（じわりじわりと攻められて正直ジリ貧だ。ならこれで一気に攻める）
（また音響爆弾でしょうか？　いえそれならば２発目を何故撃たない？　そう考えるならばこれはノーマルのグレネード！　回避行動を

……）

だが間に合わない。,,光,,は全てを置いてくから。３つ目の特殊弾、閃光弾。相手はこれにより一気に目と耳を封じられるが、俺は先程通り耳は耳あてで防ぐ。目はゴーグルで一定量の光が入る事を検知したら画面が切り替わり電子カメラに切り替わる。これはハイパーセンサーが捉えている情報を素に作られる景色で色はモノクロだが確りと物体を確認できるので十分行動ができる。セシリアはどうやら混乱しているのか顔を左右に動かしているこの状態なら行ける！　俺は残りの２枚のシールドも展開してセシリアの四方に展開。俺自身はセシリアの頭上から狙いを定め、ガトリング砲計５丁とアサルトライフルの弾幕でブルー・ティアーズのＳＥを削る。

「ブルー・ティアーズ、ＳＥエンプティー。勝者。モルド・テンペスタ、野上ゴールド」

１２話

まさかここまでとはな、想像以上だ。私は先程までイギリスの代表候補生セシリア・オルコットと今しがた隣にいる後輩、山田先生の弟子である野上ゴールドの試合を審判として見届けていた。私の予想としては野上はまだＩＳを操縦して日が浅い。だからこの試合は負けると思っていたが……結果はどうだ？　野上は想像より遥かに上手くＩＳを駆使し、格上のオルコットを翻弄し倒したのだ。全く、どれだけ上手く教えればこの短期間でここまで育てたんだこの後輩は。あそこまで基礎を確りと教えられるのならＩＳの実践授業の時に手伝って欲しいものだな。

「フフフどうでしたか織斑先生、私の自慢の弟子は」

「あぁそうだな、想像以上だった。山田先生には悪いが野上は負けるもんだと思ってたからな」

「いいですよ、それが普通の反応ですから。まぁ私もあそこまで彼の作戦が上手く言ったのはびっくりしましたけど」

「全く……参考までに聞きたいがどう指導したんだ？　並大抵の訓練じゃこの短期間にあの完成度は出来ないと思うが」

「あぁそれは私が代表候補生だった時のそうですねぇ、確か国家代表を決める頃ぐらいの訓練メニューを野上君用に改変したものですね」

ん？　国家代表を決める頃の訓練メニュー？　って、て事は―

「野上に代表候補生、それも本来２年又は３年がやるような事を?!」

「そうですね、ですがその中でも基礎的な訓練でしたし、少し改変もしていましたので何とかなりましたよ。いやー野上君、どんどん技術を上げていったので私も教えがいがありました」

（これは……うん、参考には出来ないな）

強くなる必要があるがよく野上はその訓練をやり続けたな。いや、初心者だったからこの訓練の難易度が異常に高い事に気づかなかったのか？　まぁそれはさておきこんな訓練を参考にしてたら生徒達が潰れかねないな。どうしたものかな。

「それでは私は師匠として弟子を労って来ますのでオルコットさんの

フォローお願いしますね」
「あぁ分かった……いや待ってくれ山田先生ってもう行ってしまったか。全くあれで無自覚なのだから、野上も大変だな。さてとここは私も元日本代表としてオルコットを労うか」
そう思い、私はオルコットがいるカタパルトデッキに向かった。

「坊主！　凄かったじゃねぇか！　初戦勝利なんて幸先がいいな」
「ありがとうございます、おやっさん。相棒のメンテナンスお願いします」
「おう、任せろ任せろ。お前は今のうちに休憩してろ。おいテメェら！　これよりモルド・テンペスタのメンテナンスに入る。時間は１０分間、キビキビやるぞ！」
「「はい！　主任！」」
今話したのはこの学園の３種類ある技術班のうちの１つの技術主任である。
チームは打鉄チーム、ラファールチーム、そして最後に特殊チームがある。前２つはその名の通りだが最後のは少し違い、代表候補生が扱う専用機を扱う各国の技術者が集まってる。だからこのチームには主任が専用機の数だけ居るのである。そして先程のおヤッさんはラファールチームの主任、田島総司（たじまそうじ）さんである。俺の相棒は武装が少し特殊だが元を辿れば全てラファールの装備なのでおやっさん達がやってくれる事になった。
遅れたが今回は連続で試合をする為生徒だけではメンテナンスが追いつかないと先生方が判断し、技術班の方々が来てくれる事になった。
ゴールドは田島主任の言葉に甘えて控え室に入ってスポーツドリンクを飲んだ。未だに震える体が先程まで試合をしていた事を教えてくれ、胸に溢れんとする幸福感や達成感が自分は勝利したと教えてくれる。訓練では未だに師匠の山田先生に勝てずにいる為、これがゴールドの初の白星なのだ。その初の白星に内心浮かれていると、山

田先生が控え室にやって来た。
「野上君、まずは初戦おめでとうございます」
「ありがとうございます」
「それにしても代表候補生相手に上手く動かせましたね。師匠として鼻が高いです」
「当然です、なんせ師匠の弟子ですから」
っとゴールドは胸を張りながら言った。それはさながらどこかの師匠の仕草のようだ。
「ですが勝ったからと言って気を緩めたらいけません。次の対戦はオルコットさんと織斑君ですので、２人の試合をよく見て対策を練るんですよ？」
「はい、分かっています」
「それでは私は管制室の方に戻りますね。野上君も１人の方が休めると思いますし」
そう言って山田先生は控え室を後にした。

セシリアはカタパルトデッキについていた。
「お疲れ様でしたセシリアさん。ティアーズはこちらでお預かりしますのでセシリアさんは今のうちに休息を」
「ハァハァ……ありがとうございます、ミス・ラミアス。それではティアーズの方をお願い致します」
「はい、お願いされました。皆さん、これよりブルー・ティアーズの修復作業を行います。タイムリミットはわずか１０分。ですが私達ならこのぐらいやれますよね？　では作業開始！」
「「はい！」」
彼女はイギリスから派遣されたブルー・ティアーズ専用チームの技術主任、マリュー・ラミアス。彼女は元はイギリスの代表候補生で、卒業後今の会社に就職したという。元代表候補生との事もあり、セシリアが来るまでは試験パイロットは彼女でもあった。今は整備に専念しているが偶にセシリアの相談に乗ってくれたりと、セシリアのよき理解者である。

セシリアは控え室に戻り冷却スプレーで火照った体を冷やしていると織斑先生がやって来た。
「ふむ、負けた割には随分と冷静なのだな。代表候補生は天狗が多いが、お前は違ったか」
「なんですか織斑先生、それを言いにだけ来たのでしたら趣味が悪すぎますわよ」
「いや何私も元日本代表だ、代表の先輩として格下に負けた後輩を慰めてやろうと思っただけだ。だがその様子だと大丈夫そうだな」
「ええ、それ程までに彼の戦略は賞賛すべきものでした。それをたったの1ヶ月であそこまで完成させたのなら尚更です」
「これは本格的に私はいらなかったな。じゃあ次の試合まで確りと休息を取るんだぞ」
そう言って織斑先生は控え室を後にした。

13話

1人目の男性操縦者、織斑一夏は今プレッシャーに押しつぶされそうになっていた。彼は今日までＩＳの訓練や、体力作りの為に箒と剣道等をしてそこそこ戦えるようになってきていた。そんな彼がプレッシャーを受けている理由は2つ。1つは、先の対戦でセシリアともゴールドとも実力の差がありすぎるためである。2つは先程届いて1次移行したばっかの専用機にある。

「……いくら確認しても装備はこれだけ」

そう、装備が1つしかないのである。どうやら姉である織斑先生の機体と同様零落白夜を使えるのだが、それだけである。これでどう戦えと言うのだろうか。最初織斑は何かの間違いか？　と思い他の武装を探したが、自らを技術主任だと言う女性に―

「それしかないよ」

と言われどう戦えばいいんだよと愚痴を漏らす。だが時間は非情であり、そんな事を考えながらもどんどんと時間は過ぎていき、とうとう出撃しなければならない時間にまでなってしまった。

「いくら考えても出ないんじゃあしょうが無い。出たとこ勝負で何とかするさ。白式、織斑一夏出ます！」

そう自分に言い聞かせて織斑一夏は出撃した。

「もう時間ですわね」

セシリアは時計を見て休憩時間が終わったのを確認した。そのままデッキに向かい、ラミアス主任に礼を言った後ティアーズを回収。そのままカタパルトに向かった。

(先程は相手の力を見誤った私の失態。ゴールドさんは何故か私の専用機の特性を知っていましたが、人にお願いするなどすれば簡単にデータは取れる。次は相手も自分を知っていると思って動いた方がよろしいですわね)

「セシリア・オルコット。ブルー・ティアーズ、発進致しますわ」

セシリアがカタパルトから発進したと同じくらいに織斑も発進し

ていた。その操縦は多少のぎこちなさはあるものの確りと出来ていた。
「先程から驚かされてばかりですわね。まだまだ荒いですがきちんと飛行の基礎をこの短期間でものにするなんて」
「俺も一応男なんでね、勝負事それも女子に負けるのは色々と悔しいもんなのよ。だから俺も必死で訓練しただけさ」
「そうですか。では私もその必死さに見合うだけの試合をさせて頂きます」
『両者定位置に着いたな、それではカウントダウン開始！』
その号令によりカウントダウンは始まり、ゼロカウントのアナウンスで試合が始まった。
セシリアは今回は攻撃が来てもいいように左に移動しながらライフルを展開して織斑の胴体に向かって速射した。だがそのビームは織斑の足を掠めた。
織斑は開始したと同時に上昇し、剣を展開しながら太陽を背にセシリアに対面した。
「クッ逆光で狙いを定めさせない気ですわね。ですが！　その程度で私からの攻撃からは逃れられません！」
セシリアは右手で牽制射撃を行いながら、左手にショートソードを展開して織斑に向かう。どうやら接近戦を仕掛ける気らしい。
（彼が未だに攻撃を仕掛けてこないのは恐らく機体が特化型、それも私のティアーズとは逆に近接戦闘で発揮するタイプ。そして試合開始の時の上昇スピードは並ではなかったことから、十中八九高速機動近接型で間違いないでしょう。織斑先生の弟であるせいかきっとそれに似せられたのでしょうが、そうと分かればやりようはある）
「はぁぁぁぁぁ！」
「いやぁぁぁぁ！」
織斑とセシリアは叫びながら接近しあい……セシリアは織斑を避けてそのまま上昇して行った。
「え?!」
「これで上はこちらのものです！」

そういうや否や、セシリアはショートソードをしまいブルー・ティアーズを2機展開させた。
「しまった！」
「確かに逆光を利用したのはいいアイデアでしたが、乗る機体が悪かったですわね。1つでも遠距離兵装があれば有利に運べたかもしれないのに、接近戦でしか戦えず自分のアドバンテージを捨てるかもしれない攻撃しか出来ないのですから」
「クソ！」
織斑はセシリアの攻撃を何とか躱そうとするも高すぎる機体性能に振り回され上手く回避ができずにいる。セシリアは先の対戦の事もあってかこの有利な状況でも対応できるようにじわりじわりと織斑との距離を離して行ってる。
（このままじゃ一方的に撃たれて落とされる。ならまだエネルギーが残ってる今のうちに！）
「セイヤァァォァァァ！」
織斑は何か意を決したのか左腕を盾にするかのように構え、セシリアに突撃を行った。それをみすみす許すセシリアではない。本人とビットで迎撃を試みる。そのほとんどが当たってはいるが、織斑は止まらない。たまらずセシリアはショートソードを再度展開して接近戦体制を取る。
そこでセシリアは気づく、織斑の持っているソードが急に可変してビームの刃を出していたのだ。これにビックリして堪らず回避行動をとった。だがそれが幸を為した。
（あ、あれはもしや織斑先生が現役時代に使っていた零落白夜?!　あれを貰ったらひとたまりもありませんわ！）
零落白夜、これは自らのＳＥを消費する事で相手に装甲無視攻撃が出来るのである。そして織斑が使っているのは恐らく織斑先生が使っている物の後継機。威力はその時以上と想定していいだろう。
「まだまだァァァァ！」
そう言いながら織斑は振り向きながら2度目の攻撃を行おうとしたその時―

「白式、ＳＥエンプティー。ブルー・ティアーズ、セシリア・オルコットの勝利！」

何とも情けない方法で織斑は敗北した。

１４話

俺はセシリアと織斑の戦いを見ていたのだが、織斑の機体酷くない？

（織斑の機体は試合を見る限りめぼしい遠距離兵装が無いのだろう。太陽を背後にして有利を取ったのにそのまま近接戦闘を仕掛けたのがその証拠。そして注意すべきなのはあの機動力と零落白夜だろう。あのスピードで近づいて零落白夜で一撃突破というのがコンセプトなのだろう。織斑先生も確かそのような戦闘をしていた。この事からきっと織斑は織斑先生と同じくらい規格外だと思われていたのだろう。だがあいつには悪いがこれは都合がいい。要は近寄らせなければいいのだ。俺の相棒ならそれが出来る。それを俺がやれるかどうかだ。具体的には――）

『野上君、そろそろ時間ですのでカタパルトの方へ』

「あ、もうそんなに経ったのか分かりました。直ぐに向かいます」

俺はおやっさん達に礼を言いながら相棒を貰いそのまま展開、カタパルトへ固定した。

（とにかくこれで勝てば念願のクラス代表だから――）

「俺に付き合ってくれよ、相棒。モルド・テンペスタ、野上ゴールド……出る！」

俺が出撃して少し経つと織斑も出てきて定位置についた。

「お前とは１度やりたいって思ってたんだ」

「そうかい出来れば俺はやりたくなかったがな」

「そう釣れないこと言わないでくれよ野上、それにやるからには全力でやるんだろ？」

「そりゃ当然」

（じゃなきゃこっちはやべぇんだよ）

「なら俺はそれでいいや」

「あっそ」

『無駄話は済ませたか？　ではこれより試合を始める。カウントダウン開始！』

カウントがゼロになった瞬間、織斑は物凄いスピードで突っ込んできた。だが
（予想通り……）
それを予測できない程野上は馬鹿では無い。そのまま後方に飛びながらガトリングを五丁全てで面射撃をした。だがこれを急降下して回避し、そのまま急上昇。下からゴールドに向かう。
「クソっならこれをくらいな！」
「?!」
ゴールドはシールドを２つ射出した。だが、そのシールドについてるガトリングはシールドの裏にすっぽり隠れていて、ショートソードの刃だけが突き出ていた。その２つのシールドはそのまま突っ込んできた織斑と激突して織斑のＳＥを減らし、そのままガトリングを撃ち込み更に減らした。
「武装のしまい込みとかまだ慣れないな畜生、今後の課題だな。だが今は」
「はぁぁぁぁぁ！」
「こいつの対処だ！」
織斑は今度はゴールドの周りを回りながら近づいてきた。ゴールドはそれをショートソードで向かい打つ。
「いくらそっちが近接特化型だからってなぁ、こっちだってキッツい訓練こなしてるんだよ！　そうそう負けられねぇよ！」
「んだとゴラァァ！」
「舐めんなぁ！」
「グゥ」
俺はシールドのガトリングで織斑に仕返しと言わんばかりに発砲した。セシリアの時外れたが、は今度は当たった。そのまま怯んだところで左手のシールドと腕の間に隙間を作り、そこにガトリングを収納する。展開する装備はショットガンを２丁、それもフルオート可能なものである。
「蜂の巣になりやがれ！」
そのままシールドの４丁のガトリングと合わせて一気に撃ち込む。

「白式ＳＥエンプティ。モルド・テンペスタ、野上ゴールドの勝利！」

15話

織斑との試合も勝利してそのままカタパルトデッキに戻ったゴールドは、おやっさん達にモルドを頼んだらそのまま一目散に控え室に入った。

（ハァハァ……まだだ、2人に勝利してコレで晴れてクラス代表になる。だけどそれだけじゃダメだ。他のクラス代表には今日の試合で俺の戦術がバレたと考えて、新しい戦術を考えなきゃ……後で山田先生、いや近接の事を聞きたいし織斑先生に聞こう。それと――）

ゴールドは控え室に入るなり息を整えるのもそっちのけで長考に入った。さっきの試合を始める前に織斑と話していた事―

「そう釣れないこと言わないでくれよ野上、それにやるからには全力でやるんだろ？」

「そりゃ当然」

（じゃなきゃこっちはやべぇんだよ）

泣いたあの日以降ゴールドは相談を少しずつだが出来るようになった。それは山田先生だったり、田島主任だったりと人数も増えてきている。だが、それで恐怖心が無くなったかと聞かれれば否だ。今もこうして些細な事で恐怖が爆発し、ほかの事を強く考えないといけないくらいだ。

（大丈夫、大丈夫……だから）

「野上？」

「?!　……お、織斑先生」

気がつけば織斑先生が控え室に来ていた。きっと労いに来てくれたのだろう。この人は厳しいが優しい人だと知っている。だけど今は、見られたくはなかった。とにかく今は普通を装う。

「織斑先生どうしたんですか？　あ、もしかして俺を労いに来てくれたんですか？　そんな事しなくてもいいのにー、先生って律儀ですねー」

「……野上、,,それ,,はいつからだ」

「なんの事ですか？」

「野上、いくら取り繕っても私には無意味だぞ。私とて教師だ、この2週間のお前を知っているから今お前がいつも通りでは無いことぐらい分かっている。だから聞いているのだ、,,それ,,はいつからだ」
「……初めてＩＳを操縦した日からです。ったく、なんでここの先生方はこんなにも敏感なんですか。これでも俺男なんで女性に弱いとこあんま見られたくないんですけどねぇ」
「ふむ分かった。だが野上よ、そういうだったら速く1人前になる事だ。それならば強くなって更にはお前の安全も確保される」
　そう言うと織斑先生は俺の頭を優しく撫でてくれた。そしたら我慢してたのがアホになるくらい涙が出てきた。
（あぁもう、やっぱりこの人達はあったけぇなぁ）
「フッ子供はそのぐらいでいいんだ、そもそもお前は抱えすぎなのだ。山田先生が言ったのではないのか？　私達を頼れと」
「はい、ですがやっぱりまだ慣れなくて。すんません」
「なに、謝ることはない。今までが今までだったんだ、これから慣れればいい。今は弱くたっていいんだ、生き急ぐな。時間は私達が作る。それとこのことは山田先生には内緒にしといてやる。心配はかけたくのないのだろう？」
（あぁもう本っ当にここにいる先生はいい人ばっかだよ）
　そう思いつつ俺は今も尚撫でれ続けてる頭から温もりを感じていた。
「それと遅れたが2勝おめでとう、これでお前は晴れてクラス代表になった。だがなっただけだぞ？　今後も決して天狗にはならずに日々精進するように」
「はい！」
「うむ、いい返事だ。そんな奴はこうだ！」
「ちょっな、なんですか?!」
　そういうや否やさっきまで優しく撫でてたのに急にわしゃわしゃとしてきた織斑先生。
「ちょちょちょ、なんですか」
「いや何、お前がいつまでも辛気臭かったもんだから元気づけようと

したのだよ。子供はこういうの好きだろ？」
「いや確かに俺もいやな気はしませんでしたが……それ人によってはウザがられますよ」
「なに？　そうか、なら今後は控えるとしよう」
「いややめるという選択肢は──」
「嫌じゃなかったのだろう？」
「グッそそれは、とにかく嫌われたくなかったら控えてくださいね」
「あぁ分かった分かった」
　この人には適わない、俺はそうおもった。
「さてと、お前シャワーは浴びてなかったよな？」
「はい、確かにまだですね」
「それならさっさと浴びて食堂にいけ。小娘達が何やら用意をしていたぞ。私は先に行ってるぞ」
「？　わかりました」
　用意？　まぁいいか。とにかく待っているのなら速く済まして行かなくてはな。

（山田先生から少し聞いてはいたが……あれは確かに危ういな。あの状況でまだ人を頼りきれないのはあいつの出生故か、はたまた人柄故か。どちらにしても今回みたいにちゃんとガス抜きをしてやらんとまた破裂しかねないな。これは今後の課題だな、山田先生とまた確りと話さなければな。だが……今日くらいは抱えている物を置いてもいいのではないか野上よ。少なくともこの後に行われる事はそう思ってもいいものだぞ。あの小娘達もまだまだひよっこだが、みんな良い奴だ。あいつらと触れ合えば少しは楽になるだろう）
　織斑先生はそう考えながら食堂に1人、向かっていったのである。

１６話

全ての試合が終わった後、セシリアは控え室のシャワー室に入っていた。

（今日の試合、改善点が更に増えてきましたわね。ティアーズを最大限活かしきれてない事もですが、まさか特殊グレネードによる絡め手に擬似ＢＴ兵器。後者はともかく前者は今後も使って来る選手はいるはずでしょうね。ハイパーセンサーに頼っている私達にとってあれは言わば天敵とも言えるでしょう。対策を講じないと……野上さんは恐らく身につけていたゴーグルやヘッドホンで対策をしていましたし、それが１番速いでしょうね。そして織斑さんとの試合でまさか私がそうそうに上を取られてしまった事ですね。あれは彼のＩＳが異常に特化型だったから良かったですが、それこそ野上さんにやられていたらもっときつい戦いでしたでしょうね。立ち回り方も見直しですわね）

そう考えた後セシリアはある事を思った。ゴールドを引き込めないか。

（野上さんがあれほどまでに強いのは恐らく前仰ってた師匠の教えがいい事もあるでしょうが……彼の出生も関わっていらっしゃるでしょうね。聞いた話によると野上さんは孤児だとか、それで今まで１人で頑張ってきたと。その経験からあそこまで強くなれたのでしょう。そして何より彼が使っているあのシールドは擬似的ではあるが歴としたＢＴ兵器だ。それをあそこまでに使いこなしているのなら本国の方々も悪い顔はしませんでしょう。そうなれば私と野上さんは名実共にライバルですね。日本には『昨日の敵は今日の友』と言ったふうに敵であろうと一緒に競い合いお互いを高め合うと言う風習があると聞きます。そうなればきっと私も野上さんのように強くなれるかも知れません。後でミス・ラミアスに一緒に本国に掛け合ってくれるようお願いしましょう）

そう結論付けてセシリアはシャワー室を出た。そこで連絡が入った。

『セシリアさん、お疲れ様です。今シャワー中でしたか？』
「いえ、今でたところです山田先生。ところでご要件は？」
『ええっとですねクラスの皆さんが食堂でお疲れ様会を開く準備をしているらしいのでそれを伝えようかと』
「そうですか分かりました。準備が出来たら私も向かいます」
『分かりました』
（お疲れ様会……確かに今日は疲れましたね。なら少しくらい楽しんでもバチはあたりませんよね）
そう思いセシリアは食堂に向かった。

「つっっっかれたァ！」
織斑は控え室のベッドの上に寝そべりながらそう叫んだ。
「だぁ、やっぱり負けたァ！　そもそも近接しかないってどうゆう事だよ！　そりゃ負けるよ！　だって２人共遠距離武器が豊富だもん！　あんなの卑怯だよ。それに野上の野郎、本気でやりたいってのは本音だけどあそこまで弾幕張る必要無かったろ。めっちゃ怖かったぁ。畜生……実力差分かっててもやっぱり悔しいなぁ」
「ならば強くなればよかろう」
「……箒さんなんでここにいるんですか」
急に声が聞こえそちらを向くと幼なじみの箒が立っていた。
「お前がいつまでも来ないから心配してきてやったのだ。だが心配して損した、なんださっきまで言葉は。そもそもお前は代表候補生でも無ければ春期講習すら受けてないのだ。実力差があって当然だろう」
「い、いや俺だってこの２週間頑張ってきたし……」
「その程度で２人の努力を覆るとでも？」
「思ってません」
「分かっているじゃないか、お前と２人では努力の差があるのだと」
「それでも悔しいもんは悔しいんだっての」
「それは私もわかってるだからさっき言ったのだぞ。強くなればいいじゃないかと。そもそも私達はまだ入学したばっかだ、それまで焦る必要も無いだろう」

「ありがとう、箒。これからも一緒に訓練してくれるか？」
「それは構わんが……何故私なのだ？　いや頼ってくれる分には私も尽力を尽くすが……それこそ織斑先生にでも頼れば良かったのではないか？　補習もあったのだし」
「……忘れてた」
「……そうか、うん。私も教えて貰いたいことがあるし後で一緒に行くか？」
「何から何までありがとう、箒」
「なに、私とお前の仲だろ？　気にするな。そしてそれとこれでは話は変わるが実は私最近欲しい手拭い出来てしまったのだが……小遣いが少し足らなくてだな。誰か買ってはくれないだろうか」
「グッ……か、買わせて貰います」
「ん？　私は一夏にはお願いしてないのだがなぁ」
「これまでのお礼とこれからもよろしくって事で……今回はそれでお願いします」
「よろしい」
『お疲れ様です、織斑君。今いいですかってあれ？　篠ノ之さん？』
「なんですか、山田先生」
『い、いえそのクラスの人達が皆さんの試合のお疲れ様会を食堂で開こうとしているのでそれを教えようかと』
「分かりました、箒聞いたか？　打ち上げだとよ、行こうぜ」
「そうだな私も行くとしよう」
「山田先生教えてくれてありがとうございます」
「いえいえ、皆さん今日は頑張ったのですから目いっぱい楽しんでくださいね」
「はい！」
　そう言って織斑と箒の２人は食堂に向かった。

17話

パン！　パパン！

「「野上君、織斑君、セシリアさんお疲れ様ー！」」

「何これ」

「お疲れ様会って俺は聞いたぞ」

「一夏と同じく」

「私もですわ」

俺は織斑先生に言われた通り食堂に向かう途中セシリアと織斑、箒さんに合流して、そのまま食堂に向かった。３人は山田先生に『お疲れ様会を開くから』と言われたらしい。だが着いた直後にクラッカーで歓迎されたら誰だってびっくりするだろう。

「えーっと本当に何これ」

と困惑していたら、クラスメイトの１人が―

「あーこれなんか３人がリーグ戦やるって決まった時にね、布仏さんが終わった後代表決定のお祝いも兼ねて打ち上げしようって言い出して、みんなもやろうやろう言っちゃったんだ」

「そんな言い方だと私が悪い言い方じゃんー。何やかんやでみんなも賛同してたじゃん」

「もうどうでもいいや、腹減ったし俺は飯食べる。織斑、パンダ役は任せた」

「な?!　ちょっと待ってくれよ野上！」

「私も疲れましたのでご一緒させていただきます、野上さん」

「え?　セシリアまで！」

なんか後ろから織斑の断末魔が聞こえているが俺には関係ない。そもそもこういうのは俺よりも顔がいい織斑の方が適任だ。そう思いゴールドはグラタンとそこら辺に用意されていたコーラ、セシリアはサンドウィッチとコーヒーをもってテラスの方に出た。

「ふぅ、やっと落ち着ける。っとコレがお疲れ様会なら言う事言わなきゃな、お疲れ様セシリア。今日はいい試合が出来たよ」

「お疲れ様ですわゴールドさん。私も今後の課題等が分かった試合で

したわ。ですがゴールドさんが私にお疲れ様なんて、皮肉ですか？」
「まさか、ただコレがお疲れ様会って言うんなら1回は言わないとなって思っただけだよ」
「フフ、冗談ですよ。そこまで本気でいいわけしないでください」
２人はそこで会話をやめて晩御飯を食べ始めた。２人が食事を終えて、夜風に当たってる最中にセシリアが話しかけてきた。
「野上さん、少しお話をしませんか」
「それはいいが、どうしたんですか突然改まって」
「いえ、ただ少し真剣な話をしようかと思いまして。……ミスタ・野上、イギリスの代表候補生になるおつもりはありませんか？」
「?!　……それはどう言った意味で？　ミス・オルコット」
「言葉の通りです。先程のリーグ戦にて私は貴方の操作技術が素晴らしいものであると感じました。そして貴方はあのシールド、あれは擬似的ではありますが我々イギリスが目指しているＢＴ兵器を使いこなしています。あれ程使いこなしているのならＢＴ兵器も使いこなせると判断してこの推薦を持ちかけました。既に技術主任であるミス・ラミアスと言う方を通して本国に連絡済みです。そして先程返信が来た所、《こちらからも是非お願いしたい》との事でした。貴方さえ良ければ直ぐにイギリスの代表候補生になれますが？」
「分かりました、確かにそれはこちらとしても嬉しい申し出です。俺、野上ゴールドは制式にイギリスと契約し、代表候補生になります」
「いいのですか？　確かにすぐになれるとは言いましたが、そんなに即決してしまうのは」
「はい、元より俺は後ろ盾が欲しくて努力してきました。それがこんなにも速く叶うのならそれに越した事はありません。それにミス・オルコットの様子を見れば職場環境も悪くないのは分かります」
「そうですか、それならこの事は早速本国に連絡をしますね。恐らく近い内に先生方を通して書類が届くかと思います。それに確りと目を通して書類にサインをしてもらえれば、晴れて代表候補生です。今後ともよろしくお願いしますね、ゴールドさん」
「あぁ、俺からもよろしくお願いしますセシリアさん」

こうして俺は、イギリスの代表候補生となる道を選んだ。

「あー！　野上君とセシリアさんいないと思ったらここにいたのか。せっかくのパーティなんだから騒ごうよー」

このまま静かにしようかなと思ってたらクラスメイトに見つかってしまい、そのままみんなの所へ連行されてしまった。だけど―

「たまにはこういうのもいいかな」

１８話

お疲れ様会が終わり、みんなは自分の部屋に戻って行った。俺も特にやる事が無いので山田先生と一緒に部屋に戻った。てか先生達どこにいたんだろ？　お疲れ様会の時全然見なかったんだが。まぁそれはいいとして、イギリスの代表候補生になる事伝えなきゃやな。

「山田先生」

「ん、なんですか野上君」

「俺セシリアに推薦受けたので、イギリスの代表候補生になる事にしました」

「あ、そうなんですか。コレで少しは落ち着けますね……え?!

野上君今なんて?!」

「いやだからセシリアに推薦受けたのでイギリスと正式に契約するんですよ」

「い、いつ推薦受けたんですか?!」

「お疲れ様会の時みんなと離れた時があったんですけど、その時に真剣な話があるって言われて……」

「そのまま推薦を受けたんですね。いやまぁ野上君に後ろ盾が出来るのは喜ばしい事ですから良いんですが、イギリスも随分と手が速いですね」

「なんでもセシリアとイギリスの技術主任さんが推薦してくれたそうなんですよ」

「イギリスの技術主任……あぁラミアスさんですか。あの人も一緒に推薦してくれたのでしたら確かにこれはある意味当然でしたね」

「どういう事ですか？」

「ラミアスさんという方は嘗てイギリスの代表候補生で学生時代、現代表と唯一渡り合えた人なんです。代表を決めるリーグ戦でも終わる直前までどちらが勝つか分からない、それ程までに強い人なんですね」

「えぇ……そんな凄い人に推薦されたんですか俺。期待に応えられるか不安で仕方ないですよ」

「そこはもう野上君の頑張り次第ですね、私も師匠としてサポートしますので」
「何から何までありがとうございます」
そうこうしていたら部屋についていた。
「今日は疲れたと思いますし、野上君先お風呂どうぞ」
「ありがとうございます、それではお言葉に甘えさせていただきます」
そう返事をしたら、パジャマを持って更衣室に入った。

山田真耶はただいま考え事をしていた。それはゴールドの事だ。
（コレで少なかず野上君の身はイギリスが保証してくれるでしょうね。この事がきっかけで少しは野上君から恐怖を取り除ければいいのですが……そう上手く事が運ぶとも限りません。ですが今日のお疲れ様会を見た感じ、クラスの人達とも仲が良さげだった事から少しは取り除けているのでしょうか。そうでしたらいいのですがね。それにしてもセシリアさん手が速すぎませんかね？　いやまぁこちらとしてもなるべく速く後ろ盾を作ってやりたかったし、弟子が評価されて嫌な気はしませんが……なんなのでしょう、この胸のモヤモヤは。今までこんな事はありませんでしたけど、疲れてるのでしょうか？　いやそれならちゃんと休息もとっているし……うーん分かりませんね。ただまぁ今の所実害はありませんし大丈夫でしょう）
そう結論付けてゴールドが風呂から出るのを待つことにした。

「ここがＩＳ学園ね、待ってなさいよ一夏」
またあいつのせいで騒がしくなる事は誰も知らない。

19話

リーグ戦の翌日、俺はいつも通り登校して教室に入ったが……なんかいつもより騒がしいな。なんかあったのか？　そしたらクラスの人が―

「ねぇねぇ野上君、あの事について聞いた？」

「あの事？　何の事だ？」

「なんでも2組に中国から転校生が来たらしいんだって」

「中国から？　でもなんでこの時期に……」

「なんでも書類関係でトラブルか起きて、今までは通話授業してたらしいの」

（女子はこういう話題をどこから引っ張ってきてるんだ？　普通書類トラブルなんて漏れないだろ）

「それでその転校生、そのままクラス代表にもなったらしいの」

「そうなんか……って今なんて言った?!」

「い、いやだからそのままクラス代表になったって」

「いやいやいやいや、クラス代表って先生も言った通りクラス委員みたいなもんよ？　そんなのホイホイ変えていいの?!」

「転校生が代表候補生らしくてね、クラスメイトが満場一致でいいって言ったらしくて、先生もそれならって」

「えぇぇ……」

（そんなのありかよ……ん？　つまり）

「2組も専用機持ちになったってこと?!」

「そうよ！　そこの男はちゃんと分かってわね！」

「……だれだ？」

俺が驚いて声上げた時に、教室の扉を思いっきり開けて女子が現れた。本当に誰あいつ？　もしかして件の転校生？

「お前、鈴か？」

「そうよ！　中国の代表候補生、凰鈴音よ！」

（お前か！　最近思い始めたけど……お前トラブルの元かなんかだろ?!）

「何やってんだよ鈴、かっこつけちゃって。似合わねぇぞ」
「な?! あんたねぇ、せっかく私がカッコつけてんだからそこは気を利かして話合わしてくれても良いじゃない！」
「イヤだって……本当に似合ってないぞ?」
「本気で心配すんな！ はずがしくなって来るでしょ」
（今の時点で充分恥ずかしいからさっさと自分のクラス戻れよ……あ、あいつの後ろの人は…）
「おい、いつまでも扉で仁王立ちするな小娘。通行の邪魔だ」
「なによ！ 私が小さいからって小娘よ、び……は……」
「凰鈴音よ、私は何も貴様の身長が周りに低い事をわざわざ貶してる訳では無い。私にとって生徒は等しく小娘小僧なのだ」
「ち、千冬さん」
「織斑先生だバカもの！」
「は、はい！」
　凰鈴音の後ろにいたのは我らが担任の織斑先生だった。てかあいつ知り合いなら声でわかったろ、なに熱くなってんだか。
「ほら、そろそろ予鈴がなる。お前も自分のクラスに戻っておれ」
「い、いやまだ一夏と話が……」
「そんなもの休憩の時にでもやれるだろ、つべこべ言わずに戻れ！」
「は、はい！」
「たく……よーし全員席につけー、これから朝のＨＲを始める」
　さっきまで何事も無かったかのように進める織斑先生、いくつかの連絡事したら最後にこんな事を言った。
「以前からも言っていたが、今日からＩＳの実践訓練を授業でもやって行くことになる。それに伴って火曜日のＩＳ基礎学は以降、ＩＳ実習となる。今から変更後の時間割も配布するから間違えないように」
（そう言えば今日からだったな、ＩＳの実習授業。何やるんだろう?
　俺の時みたいに歩行の訓練かな）

　時刻は昼、俺とセシリアそして各々が所属している技術班の主任２

人、合計４人は今後の話をする事も兼ねて食堂の隅っこで一緒に食事をしていた。
「まさか既に坊主が口説かれていたとはな～、嬢さん達は目利きがいいねぇ。俺はＩＳ学園１期生が入学した時にここに就職した、言わば古株でな。男の中ではそれなりに実力の善し悪しが分かるがこの坊主は筋が良い。それは装甲の消耗具合でよく分かる。坊主は山田先生に師事しているんだがな、最初はそりゃあ機体をボロボロにされていたんだ。だが最近じゃ損傷が少しだが減ってきてるし、逆に山田先生の機体に数ヶ所傷を負わせれる程だ。断言する、こいつは強くなる」
　まさかここまでべた褒めされるとは思っていたなかったゴールドは、顔を真っ赤にしてる。
「試合を観戦した時から凄いとは思っていましたが、まさか現役の教師に傷を負わせれる程とは……これはミス・セシリアもうかうか出来ませんね。先日は情報戦の結果有利を取られましたが、このままでは本当に勝てなくなりますね」
「そうですね、ミス・ラミアス。１度訓練を見直すのでその際はミス・ラミアスにも助力お願いします」
「それぐらいなら構いませんよ」
「……そろそろ本題にいきませんか御三方」
　ゴールドは今までこれ程一気に褒められた事が無いので恥ずかしく、話の路線を戻す事にした。
「っとそうでしたわね。それでは改めまして自己紹介を、私はイギリスの代表候補生セシリア・オルコットさんの専属技術班主任、マリュー・ラミアスです」
「じゃあ俺も、ラファールチーム主任の田島総司だ。坊主がラファールのカスタム機という事で俺が担当している」
「わざわざありがとうございます、それで今日集まっていただいたのは他でもありません。ミスタ・野上がイギリスの代表候補生になるにあたっての軽い説明会だと思ってください。この内容には勿論現在ミスタが所持している専用機《モルド・テンペスタ》にも関わりがあ

りますので、技術主任であるミスタ田島にも来てもらいました」
　そこからは先程ラミアスさんが言った通り説明会のようなものだった。ラミアスさんの話によれば代表候補生とは一種の職業に当たるそうで、俺はセシリアが所属している会社の２人目の代表候補生という事になるらしい。てか代表候補生って職業だったのね、それで所属した後は基本的には毎日の簡単な健康検査の報告や訓練データの報告と言った事がメインになるらしい。給料は基本的には正社員と同等で、ＩＳに関する事でアイデアを提出してそれが通った場合はそれもちゃんと給料に加算してくれるとの事。学生の身だからこの程度らしく、卒業後は国家代表か会社のテスト操縦者等になるとのこと。その他にも大雑把なルールを聞いた。
「今日はここまでにしますね、今日の暮れ頃には書類が届くと思われますのでそれに同封されている説明資料をよく読んでから署名して下さい」
「分かりました」
「それではまた今度、それとミスタ・野上とミス・セシリアは確か次の授業ＩＳの実習授業でしたよね。まだ時間はありますが早めに準備をしていた方がよろしいですよ。アリーナまでは少しありますしね」
　そう言うとラミアスさんは席を外した、その後おやっさんとセシリアとも別れて俺は更衣室に向かった。そしたらそこには既に織斑が着替えていた。
「ん？　よぉ野上、お前も着替えか」
「あぁそうだよ、それ以外でここに来るかよ。それにしてもお前はやいな、まだ少し時間あるのに」
「いやまぁな、俺はまだＩＳに慣れてないから少し先に慣らしとけってちふ……織斑先生から言われてさ」
「そうなんか、なら俺も頼んで少し鳴らしとこうかな。まだ武装の違いで展開速度にムラがあるし」
「今でも充分強いだろお前……」
「そんなの知るか、こちとらやっと師匠に傷つけれる程度になってきたんだ。そんなのでこの先やってけれるか、その為に不安要素は１つ

でも減らすんだよ」
「お前がそういうんならいいけど、本番で体壊して不戦敗なんてなるなよ」
「そこは安心しろ、それに関して師匠から特に厳しく言われてる。てかこんな話やめてアリーナ入るぞ、俺はまだお願いしてないから早く言わなきゃやし」
「それもそうだな」
俺らはアリーナに入り、織斑は白式を展開して飛行を始めた。俺は織斑先生に申請をして許可を得た後、モルドを展開して1つずつ武器を展開する。
(やっぱり武装が多い分展開のムラが多いな、これの改善として武装を減らすかひたすら訓練をするしかないが……まず俺の戦法が搦手が基本だから訓練しかないな。とにかく対抗戦までに、あれ、はちゃんと実戦でも違和感なく使えるようにしないとな。結局リーグ戦ではまだまだって事で使えてないし)
そう考えゴールドはある武装を重点的に展開の訓練をしていた。

昼休みも終えて、俺と織斑は既にＩＳを解除して他のクラスメイトと一緒に整列していた。
「よし、遅刻者はいないな。ではこれより、ＩＳの基本操縦の実習授業を行う。そうだな、織斑、野上、オルコット。見本として前に出て飛んで見せろ」
名指しを受けた3人は前に出てＩＳを展開する。セシリアが最初に展開し、そのすぐ後にゴールドが展開。織斑は名前を呼んでの展開を行う。
「ふむ、流石にまだオルコットの方が速いか。だが野上は操縦時間の割にその展開スピードは驚異的だ、これからも精進するように。織斑はまだ名前を呼んでの展開だがそれでも展開速度はそこそこだ、まだ慣れてない証拠だ。慣れてないうちは訓練以外にも自分の機体の写真を見たり模写等をしてイメージ出来るようにしろ。……よし、飛べ！」

織斑先生はひとしきり評価を言い渡すと、３人に指示を出した。指示の３人は飛び上がっていく。１番早いのはセシリア、次いでゴールド、最後に織斑である。ゴールドがセシリアに勝ったと言っても基礎や機体性能はセシリアの方が上である。だがそれに負けじとゴールドもその後ろを飛んでいる。織斑はゴールドの３歩後ろあたりで険しい顔をしながら飛んでいる。

『織斑、何をしている。機体性能だけを見ればお前が扱っている白式がトップなんだぞ。オルコットはともかくとして、野上が扱っているモルドはカスタムされているとはいえ第２世代だ。並走するぐらいはしてみせろ』

「そういったってなぁ……なぁ２人はどうやって飛んでいるんだ？」

「私は参考書通りですわ」

「俺もだ。お前こそどうしてそんなに遅いんだ？　リーグ戦の時はもう少し速かった気がするんだが」

「あの時は無我夢中だったんだよ、てかなんで２人は三角錐でイメージ出来るの?!」

「いや、あれって要するに空気抵抗を考えればいいんだろ？　細い角錐は細い分空気の抵抗が受けにくい、だから速いって。てかそんなに上手くいかないんならイメージを変えたらどうだ？」

「そうですわね、恐らく織斑さんにはそちらの方がよろしいですわね……それでしたら矢印を思い浮かべてはどうでしょうか？　それなら移動先も明確にしやすいかと、速く飛行したい時は太くして力強くってイメージでどうでしょう」

「お、それいいな。ありがとう２人とも」

織斑は２人の助言もあり、少しだがスムーズに飛行できるようになった。

暫くして織斑先生から停止の指示が来て、３人はその場で停止した。

『そこから急降下し地上スレスレで完全停止をやってみろ。目安はオルコットが１０ｃｍ以内、野上が１５ｃｍ以内、織斑が２０ｃｍ以内だ。まずはオルコットからやってみろ』

「分かりました。それでは御二方お先に」
そう言ってセシリアは急降下をし、１０ｃｍジャストで停止した。
『流石だなオルコット、それでは次は野上だ』
「はい！」
俺は急降下を行い、ある程度まで下がったら体を起こしてスラスターを逆転、減速にかかる。
「ふむ、１３ｃｍか。この様子だとお前にも１０ｃｍで良かったかもな」
「いやいや俺はまだまだですよ」
「それ程謙遜する事もないと思うがな、それでは最後に織斑！　やってみろ」
『俺だってやってやるぜ！』
そう言って織斑は急降下して俺と同じように途中で体を起こしてスラスターを逆噴射し、減速を計ったが……
「なぁ織斑よ、私はまだお前が未熟なのを考慮してオルコットや野上よりも目安を多くした。だがな、これ程とは思わなかったぞ……いいからその情けない姿をどうにかしろ」
「……はい」
減速が足らず、足が埋まってしまった。
「お、お前……足がズポッテククク」
「うっさい！　俺もまさかこんな感じで不時着するなんて思わなかったわ！　これならまだぶっ倒れた方が良かったわ！」
「ハァ、それでは気を取り直して授業を進めるぞ。今度は武装の展開だ、これも先程の順番でやる。まずはオルコット、やってみろ」
「分かりました」
そう返事をするとセシリアは最初にレーザーライフルを展開、収納し、ショートソードも同様に展開、収納した。
「うむ、合格だ。流石だなオルコット」
「ありがとうございます」
「今後もその調子で頑張っていけ。次は野上だ」

「すいません織斑先生、武装は全部ですか？」
「全部だ」
「分かりました」
　そう返事をしてゴールドは、アサルトライフル、サブマシンガン、ショットガン２丁、グレネードランチャー、ロケットランチャーを展開した。
「ふむ、殆どは素早く展開しているな。だがロケットランチャーはまだ展開が遅いな、この展開の遅さでは試合では大きな隙になる。克服するように」
「分かりました」
「それ以外は先程言った通り素早く展開できているから安心しろ、次は織斑だ」
「はい！」
　織斑はそう返事をすると、ブレードを展開した。その展開速度は遅くはないが実戦で扱える速度と言うとやはり少し遅い。恐らくこれも操縦同様に慣れてないせいである。
「少し遅いな、武装も機体同様に写真等を見て日頃からイメージしやすくするように訓練する事だ。いいな？」
「はい、分かりました」

「これにて実習授業を終わる、気おつけ、礼」
「「ありがとうございました！」」
　これにて初の実習授業は終了した。

２０話

２組に凰鈴音がやって来て２週間、とうとうクラス代表対抗戦当日である。

俺は選手の控え室にて待機している。ここには各クラスのクラス代表が集まり、モニターに対戦表が出るのを今か今かと待っている。俺はＩＳ訓練ノートを読んで各武装の平均展開速度や、弾倉、戦術の確認をしていた。俺の戦術は初見殺しの所が大きい。それでも２回目や３回目でも充分に効果は得られる。だから俺は、搦手の後の戦術の幅を増やす事にした。幸いにも俺の身近には心強い人が多い、その人達に相談して何とか増やすことが出来た。それに報いる事が出来るように全力を尽くす。

そうこうしているうちにモニターにトーナメント表が映し出されていた。

１回戦

１―１　野上ゴールド

ＶＳ

１―２　凰鈴音

（初っ端あいつって……これはラッキーなのでは？）

先程も言った通り、ゴールドの戦術は初見殺しな部分が大きい。恐らく今大会で１番厄介であろう相手にそれを喰らわせれるのは物凄く運がいいと言えるだろう。

所変わりカタパルトデッキ、ゴールドは右手に付けている指輪を見ながら呟いていた。

「今日は前のリーグ戦の時の比じゃない程人が見に来てる。先生方の話によれば、お偉いさんも来ているようだ。その中には俺らの社長もいるらしい。なぁモルド、お前がどう思っているかは知らねぇが俺はこの短期間でだがお前を相棒だと思っている。そしてお前と一緒に勝ちたい、勝って俺とお前が最高のタッグだって知らしめてぇんだ。

だから、俺に力を貸してくれねぇか」
　そう言った後ゴールドはモルドを展開した。その展開スピードは今までの中で1番早く、ゴールドは自分が言った事が通じたのでは無いか?!　って心を高ぶらせながらカタパルトに乗った。
「もし本当にお前が同じ気持ちならいいんだけどな……モルド・テンペスタ、野上ゴールド、出る！」
　ゴールドがカタパルトから出撃するのと同時に向かいの方のカタパルトから凰鈴音も出てきた。2人は所定の位置につき、開始の合図を待つついでに会話を始めた。
「一夏から聞いたわよ、あんたすごく強いらしいわね」
「強いかどうかは俺自身分からないが、あいつに勝ったのは事実だな」
「一夏以外にも確か、オルコットだっけ？　イギリスの代表候補生にも勝ったって言うじゃない。なら充分に強いって胸張ってもいいんじゃない？」
「あれはたまたまだ、たまたまこっちに情報があってあっちには無かった。そんな決定的な差があってやっと勝てたんだ」
「それでも勝った。なら勝者らしくしていなさい」
「……随分とまぁ良い評価だな。俺はお前にそんな評価されるような事を見せてないんだがな」
「あら？　そんなの簡単よ。1組にも友達が出来てね、その娘マメな性格なのかその時の試合録画してたの。それを見てこっちは本当にびっくりしたんだから。短時間まであそこまでの技術を物にするんだから。だからこれは1人のＩＳ操縦者としてあんたに送る素直な賞賛よ」
「それはまぁありがとよ。だが、そんな事言われたって手加減なんてしねぇからな」
「それは当然こっちだってそうよ、むしろそんな事されたらいつまでもあんたの事恨むからね。私どんな事であれ、手加減されるの嫌いなのよ」
「そうですか、ならせいぜい恨まれないように全力を尽くすよ」
　そんな事を話していたらスタッフ側も最終チェックが済んだのか、

審判による放送が流れる。
『これより1回戦、1年1組代表野上ゴールドと、1年2組代表凰鈴音の試合を開始します。それでは……はじめ！』

21話

開始の合図と共に両者は動き出す。ゴールドはセシリア戦同様5丁ガトリング砲で面射撃を行う。凰はこれを降下しながら円を描くような軌道でゴールドに接近戦を仕掛ける。が、それをゴールドは左手に装備しているシールドで防御する。

「チッ録画で見た時より操縦上手くなってるじゃない。全く楽しませてくれるわね！」

「そりゃこっちだって毎日鬼畜訓練受けてるんでね、否応にも上手くなるってもんだよ！」

「危な?!」

ゴールドはシールド一基のガトリング砲を裏にしまい込み、シールドに装備されているソードで攻撃するも間一髪の所で回避されつつ、逆に凰の第3世代兵器《龍砲》の空気散弾に反撃を貰う。これをゴールドはシールドを全面に広げて、1枚の大きなシールドとして使う事で散弾を防御。

(操作技術はあっちが上、そしてあいつの装備、龍砲に対する手段はシールドを前面に展開するっていうこっちの強み全殺し……そういやあの装備は第3世代兵器だから、イメージインターフェイスで操作しているはず。ならあれが凰にも通用するな)

(想像以上に操縦が上手い……龍砲の対応も見えないという強みを余剰防御で完封する。考えが柔軟の証拠ね。だけどそれであいつ自身も装備の強みを代償にしているのも事実。それに前面に展開してるから直接目視は出来ない、どれだけハイパーセンサーが強力であろうともそこには少しの誤差が生まれる……そこを上手く付ければダメージは免れない！)

場所は変わりここはアリーナ観客席より上部に位置する部屋、いわゆるＶＩＰ室である。そこには３人の男女が席に座しているいる。ブルー・ティアーズ開発チームの主任であるラミアス主任とラファールチーム技術主任の田島主任。そして――

「いやぁそれにしてもわずか１ヶ月とちょっとであそこまでＩＳを動かせるなんてね。ミスオルコットからデータを送られた時もそうだが驚愕だね」

セシリア、そしてゴールドが所属する会社の社長兼、最高技術責任者ムウ・ラ・フラガである。

「そりゃあいつは師匠から鬼のような扱きをされてるからね、自然と身につくよ。だがフラガ社長、俺もここにいていいのか？　言っちまえば俺はあんたの会社とは坊主を通しての関係。言わば直接的な関係は無いのになんでここへ招待した？」

田島の言ってる事は最もな疑問で、田島本人はゴールドの機体と深く関わっている。だがそれとフラガが田島をわざわざＶＩＰ室に招待する理由にはならない。

「確かに俺とアンタには直接的な関係は無い。関係はあってもそれはあくまであの坊主を通しての関係だ。それに加えて俺らは今日が初対面、その疑問は最もだ。だからその理由をこの試合を観戦しながら話そうと思ってね。１つは単純に１人の技術者として貴方と話がしたかったからだ」

「話？　それはどんな？」

「話に聞くところモルド・テンペスタのシールドは大まかな考えと設計はあの坊主が考えたが、その問題点等の改修工事は貴方１人でやったらしいではないですか。その訳を聞きたくてですね」

「何そんな事は簡単だよ……その時はまだ部下に任せれなかっただけだ。あれの上位互換とも言えるような兵装を扱ってるアンタ達には釈迦に説法だろうけども、あの兵装は調整がシビアだ。いくらコードを接続し、扱いやすくしようがそこは変わらねぇ。俺は以前にあれと似たような兵装を扱った事があったからその応用でやったが、その時一緒にやっていた奴は打鉄のチームに行ったり、引き抜きで他の職場

に行ったりと俺しか残ってなかった。だから俺だけで改修したまでだ」
「そうだったのですか、それはなんともまぁ大変な事で」
「まぁ最近やっとまともな調整が出来るようになった奴も出てきたから、今後は俺も楽できるがよ」
　田島は嬉しそう言った。
「それで、話ってのはこれだけかい？」
「いいえ、今の話は1人の技術者として、これからは会社を担う責任者としてお話を伺います……田島総司さん、貴方に是非我が社の新チームモルド・テンペスタ及び野上ゴールド君の専属開発チームの主任を頼みたいのです」
　その言葉に田島は驚きながらその理由を聞いた。
「おいおいいきなり何を言うかと思えば、引き抜き？　この俺を？　どうしてまた」
「あの坊主の機体のシールド、あれ程の完成度を1人で調整しきれる程の技術、この短期間であのシビアな調整をこなせる人材にまで育成させたその指導力。これだけでも貴方を欲する理由には充分過ぎる。むしろ今まで引き抜きがされなかったのがおかしいとさえ思えます」
「そんなの俺に聞いたって分かりませんよ。それに何故まだ代表候補生である坊主に専属チームを？」
「それはあの野上君が男性操縦者だからですよ。もし彼が国家代表になれなくてもその時には高い操縦スキルが備わっていると思われます。その特殊な立場と高い操縦スキルがあれば一選手として輝けます。何も大会はモンド・グロッソだけではありません。ならば今のうちから専属チームを作って技術者も一緒に育てようと思っただけです。それでお返事は頂けますかな？」
「……そうだな、俺はその話悪くは無いとは思ったよ。あの坊主はそれなりに気に入っているし、このままあいつの機体の面倒見れるのならそれもいいと思う」
「それなら」
「だが、直ぐには無理だ」

「?!　、それはどう言った理由で?」
「簡単な話、俺は仕事を途中で投げなすのが嫌なんだ。俺はいまラファールチームの主任なんだ。だからいま部下達に教えている技術を途中で辞める訳にはいかない。それが俺の仕事である限りその行為は俺の流儀に反しちまうんでな。だからあんたらの方が良ければだが条件を呑んでくれるのなら受けようと思う」
「その条件とは?」
「2年後、つまりあの坊主が3年生になるまでは俺がラファールチームの主任でもいい事。もしかしたら複数人俺のチームから一緒にアンタの所に世話になるかもしれない事。あと細かい条件もあるが大まかなのはこんな所だ」
「それぐらいで貴方程の人材と契約できるのなら安い買い物です」
「……うーんこんなに俺を買ってくれるのはいいが後悔しても知らんからな?」
「大丈夫ですよ、ミスタ田島。彼は普段はおちゃらけていたりしますが、仕事は1級品です。それにミスタ野上のスカウトに1番乗り気だったの、本国では彼なんですよ」
「成程、それなら目利きは大丈夫といった事ですね」
「ええ、ですので貴方は存分に自分の技術を誇ってください」
　そうして3人の技術者は会話を終わらせ、期待の新星を応援するのであった。

２２話

アリーナを銃弾と空気砲が入り乱れる。技術者達の対談が終わっても尚試合は継続されている。時に銃弾が、時に空気砲が、時に斬撃が両者のＩＳを削るが一向にこれといった決定打が出ない。それもそのはず。お互いがお互いの強みを犠牲に相手の強みを封じている為である。

だが、だからといって互角と言われたらそれは違う。ゴールドと凰のＳＥが少しずつだが、離されて言ってる。やはりと言うべきか、地力の差で押され始めているのだ。

（チッやばいな、どんどん押され始めてきたな。目に見えないから対応が難しいのもあるが……その砲弾を連射させるあいつの集中力はおかしいだろ）

そう、凰は空気砲を〝連射〟させているのである。本来彼女のあの武装は、発表当初の説明ではこう言われていたのである。〝単発式圧縮空気砲弾〟と、確かに彼女は散弾を放つ事も出来るが、散弾を放つのと、連射させるのとでは用いる集中力の量が桁違いだからである。（散弾は圧縮した空気を作った後砲身の口を大きくさせて撃てばそのまま圧縮した空気が散って散弾となる。

だけどそれが連射となれば話が違う。空気を圧縮する、ここまではいい。だが、連射という事はこれ以外にも最低でももう１つ同じ空間に砲弾を形成させなければいけない。空気を再チャージして作るか、その圧縮弾を分割しているかは分からないが〝狭い密閉空間に圧縮した空気弾を複数個形成し続ける〟。これだけでも頭がおかしいのにそれを併用しながら戦闘？　全くもってふざけてるよ、だから……その集中力をせいぜい利用させてもらうよ。その為にはまずあの砲弾が分割式なのかチャージ式なのか確かめなきゃだな。まぁでも装甲の傷の度合いを見る限り、十中八九チャージ式で間違いないだろうな。もし分割式なら、序盤受けた傷よりも小さくないといけないのに対して、同等の大きさだ。これではおかしいからな、だからそろそろ使わせてもらうか）

そう結論つけたらゴールドはグレネードランチャーを展開、凰が撃った後に2発のスモークグレネードを発射。その後今まで防御に回していたコード付きのシールドに細工をした。

（やっぱり使ってきたわね、スモークグレネード）

凰鈴音は煙に包まれながらもセンサーで相手を警戒していた。

（グレネードを2発撃ってきたからてっきり片方は音響爆弾かと思ったけどそれもスモーク……何をする気かしら。でも何が来てもいいように今の内に弾を用意してた方がいいわね）

それは普通の考えだった。何が来るかわからない状況だから迎撃出来るように準備をする。それは至って普通だが、それならスモークから出る事を最優先にするべきだった。確かにスモークから逃げる所を、上手く迎撃されてしまったら大ダメージは免れないかもしれない。だが、スモークの中で弾を用意する意味を凰は理解しきれてなかった。

（?! なにか接近してくる物体が2つ、センサーには合計3機映ってるから……この2つはシールド?! でもなんで今更！）

そう凰の予想は正しかった。ゴールドは4機の内2機のシールドを急激な速度で飛ばしたのである。だが、今まで防御に回していたシールドを急に攻撃に向かわせる事に疑問が出るがそれよりもまずは迎撃だ。

（ガトリング砲を打ってこないって事はソードによる近接攻撃、だけど真っ直ぐなだけの攻撃なんて私には通用しな、い〟い！）

ガトリング砲が撃たれない為ソードによる近接だと凰は予想した。その予想は半分正解で半分不正解である。1機のシールドにはちゃんとソードがついている、ならもう片方の1機には何がついているだろうか？ スモークが思いの外深く、それこそ数メートルあるかないかぐらいの距離ではないと目視出来なかった。そこで凰が目にしたのは〝ロケットランチャーが装備されている〟シールドであった。そこからロケットが発射、時限信管だったのか即座に爆破。それは音

響爆弾であった。そんな事は全く予想だにしなかった凰はここでやっと集中力が乱れた。乱れてしまった。ここで思い出して欲しい、凰はシールドを迎撃する為に何を準備していた？　それは多大な集中力を要する空気砲である、そして今その必要な集中力が乱れてしまった。圧縮空気砲は多大な集中力があって初めて存在するがそれが無くなればその後はどうなるか……それは火を見るより明らか。空気は装備内部で拡散し、暴発。辛うじて片方に集中するもそれをシールドの近接攻撃により破壊。凰の遠距離兵装は完全に無くなってしまった。

「ハァハァ……やってくれたわねあんた。良くもまぁ人が嫌がるような事をポンポンと思いつくわね」

「それは褒め言葉として貰っておくよ。そもそも俺とお前とじゃ機体スペックも操縦技術も俺が負けてるんだから、搦手で何とかするしかないだろ？」

　と不敵な笑みを浮かべながらこの相手はほざきやがる。全くもって腹立たしい、けど何よりその作戦にまんまと引っかかった自分自身に腹が立つ。録画データを観ただけで相手の作戦を分かった気になってた自分が不甲斐ない。

「これで自慢の装備も無くなったんだ、こっからはこっちも思う存分やらせてもらうぜ」

「ハンッ龍砲だけが私の強さじゃない事教えて上げるわよ！」

（と言っても辛いのは確かよね……この試合では確かパーソナルロックが解除されていたはず。どうにかあいつの装備をぶんどって使えればまだ勝機はあるかもしれない）

　パーソナルロックとはＩＳが装備している武装を他人が使えないようにする為に自分、又は許可した相手にしか使わせない機能の事である。本来は解除されないのだが、こういった大会等では盛り上げる為にその機能を全面的に解除されるのだ。

　凰がそんな事を考えていたら、アリーナ全域に衝撃が走った。

２３話

「な、なんだ?!」
「なに?!」
　アリーナに突如として鳴り響く轟音。そしてアリーナ地上中央部で煙が立ち上がっている。
　２人が驚愕しながら煙の立ち込めてる場所を見ていると通信が入る。
『凰、野上２人とも無事か?!』
「は、はい何とか」
「俺の方も平気です、ですがあれはなんですか織斑先生」
『所属不明のＩＳだ。アリーナの防御シールドを突き破って来た所から強力な武器を搭載している事は確かだ。今そちらに武装部隊が救援に言っている。だが少し距離があって直ぐにはつかない。それまでどうにかそちらで持ちこたえて欲しい』
「分かりました。凰、お前に渡したいのがある」
　そう言うや否やゴールドはシールドの１つを凰に近づけ、アサルトライフルとその弾薬、そしてショットガン一丁と持っている弾薬の半分を展開し、渡した。
「流石に近接兵装だけじゃ無理があるからそれを渡しとくぞ」
「サンキュー野上、最近使ってなかったけどまぁ何とかするわ」
「先生が言ってた武装隊が来るまではとにかく接近せずに撃ちあおう。アリーナを突き破るような高出力の、ＩＳの攻撃なんて受けたら一溜りもないからな。シールドがある俺が前に出る、凰には後ろで精密射撃を頼みたい」
「分かったわ、だけど落ちるんじゃないわよ。危険度はあんたの方が格段に上なんだから」
「心配ありがとう、だけどそろそろおしゃべりの時間は終わりみたいだ」
　気がついたら所属不明機はこちらを見据えながら砲門をこちらに突きつけていた。

「くそ！　どこの部隊も最低でも２０分はかかる。どうしたら……」
２０分、この時間は遅すぎる。決して２人の実力を軽んじている訳では無い、むしろ２人ともあの歳でなら凄腕と言っても遜色が無いだろう。が！　今回の相手はアリーナの防御シールドを突き破る程の高出力、更には試合の途中という事で現場の２人は疲弊している。でかいのを１発貰うだけでやられる危険性がある相手にそんなコンディションではいつ落とされてもおかしくない。どうすれば……そんな時後輩の山田先生に話しかけられる。

（なんなんだよこのＩＳ?!　クロスレンジとアウトレンジの切り替えが速い！）
ゴールドと凰は当初、遠距離兵装による撃ち合いで時間を稼ごうとした。その考えは普通によかった。未知数な敵に向かって考え無しに突っ込むより、離れた所から撃ち合いをし、少しでも相手の情報を得て武装隊に伝える方が有意義だ。更に相手は防御シールドをも突破できる高出力を持っている、そんな相手なら尚更近寄れない。だが……その高出力が移動にも反映されていたらどうだ？　結果は凄惨なものだ、こちらは相手のスピードに翻弄され決定打がなかなか決まらない。
ゴールドと凰は攻撃を何とか防ぎながら現状維持、及び現状把握に務めていた。
「ハァハァ……クッ凰、装備の状況はどうなってる？」
「アサルトライフルの方は半分を切ったわね、ショットガンはあと３マガジンよ。近接武器の方も結構ガタが来てる」
「こっちはシールドが１つ完全に壊れた、残り３つのうち２つもそろ

そろヤバい。ガトリング砲の弾薬も底が見えてきた、サブマシンガンが残り5マガジン、ショットガンはこのマガジンでラスト。ショートソードは1本が折れてあるのはシールドについてるのと腰にあるやつ合計4本。ロケットランチャーはさっき落とした、多分取りには行けないだろうな。グレネードランチャーはさっき殴られて壊れた」
(たった数分で良くもまぁここまでやってくれたもんだ)
「どうするのよ、シールドが無くなれば私はともかくあんたはジリ貧になるわよ！」
「分かってる……なぁ、俺がアイツに突っ込んで押さえつける。それを援護してくれるか？」
「はぁ?!　あんた何言ってんのよ！　そんな事したら―」
「分かってる、だけど武装隊が思いの外遅い。今最悪なのはこちらの武装が全て使い物にならなくなっても武装隊が到着していない事だ。それならまだ使える物がある内に賭けに出たい」
「～～～?!　……分かったわよ、ただし絶対に死ぬんじゃないわよ。この試合だってまだ決着をつけてないんだから」
「ありがとう」
「いいわよ、それよりいつやるの」
「奴をどうにか地面の所まで行かして、俺がアイツに向かって残ってるランチャーの通常弾頭のを全部投げてそれを俺が撃って目くまらしと攻撃を同時に行う。それが合図だ。だからまず奴を地面に誘い込む又は突き落とす事からだ」
「分かった、それで行く」

２４話

敵ＩＳをどうやって押さえつけるか説明するには、モルド・テンペスタのシールドについて説明しなければならない。

このシールドはゴールドが正攻法では勝ち抜けないと考え出した擬似ＢＩＴ兵装である。だが、やはりそこは擬似兵装……本家イギリスとは決定的な違いが存在している、それは仕組みだ。似ているのに仕組みが違うのかと思われるが、これはあくまでたまたま似てしまった為であるから仕様がないことだ。

本家イギリスのＢＩＴ兵装は、多大な集中力とイメージ力で脳内に仮想空間を作り、そこでＢＩＴを将棋やチェスの駒のように移動させるイメージする。それをＩＳ側がキャッチし、信号を送って操作している。

変わってモルド・テンペスタの擬似ＢＩＴ兵装は、本体と強靭なケーブルが接続されており、そのケーブルを介してガトリング砲やスラスターを操作している。”シールド及びケーブルは本体と繋がっている為、ＢＩＴ程の集中力を要さない”。

つまり、本家イギリスでは多大な集中力やイメージ力を糧に完全なる無線操作を行っているのに対し、モルド・テンペスタは有線を用いて少しの制約はあるものの、操作の簡略化を目指した作りになっているのだ。

そして今回の作戦で重要な役割を果たすのは、”シールド及びケーブルは本体と繋がっている為、ＢＩＴ程の集中力を要さない”という事だ。

つまり、ゴールドは敵ＩＳをケーブルで拘束した後に、シールドに装備されているソードで地面に固定しようとしているのだ。

（この作戦には穴ぼこだらけだ。１つに敵ＩＳに隙を作れるか、２つにケーブルで拘束できるか、３つに地面に拘束する前に逃がさない

か、４つに地面に拘束できたとして継続できるか……やっべぇ少し考えただけで４つも穴が見つけれたよ、少し泣きそう。だけどそんぐらいしないとあいつは止められねぇ。なら―）

ゴールドはシールドを展開、高速で回転させながら掃射、シールドが壊されて余ってしまったケーブルは”先を輪っかに作って待機”。ケーブルが絡まらないようにゴールド自身も回転しながらガトリング砲とサブマシンガンを撃っている。

（やるしかねぇだろ！）

ゴールドは３つのＢＩＴを回転させながら撃つことで銃弾の檻を形成、敵ＩＳを逃がさないようにした。だが、そんな事をすれば当然標的はゴールド自身に集中し、敵ＩＳは両腕をクロスして盾にしながら突っ込んでくる……が！　ゴールド自身の目的は拘束である為その行動は願ったり叶ったりである。

ゴールドは左手に装備してるシールドを構えてタックルによる衝撃に備える。だが、ただ備えるだけではない。衝突する寸前にシールドの前方に、残っていたグレネードランチャー及び、ロケットランチャーの通常弾頭を展開した。

そんな事をすればゴールド自身もタダでは済まない、現にシールドは完全に壊れてしまったが必要経費だと思って割り切る。敵ＩＳは爆発をもろに受けてしまったせいか、スラスター系統に異常が起き、落下している。

「そこだァァァァァ！」

俺はその隙を見逃すまいと突撃、シールドやケーブルで拘束しながら地面に叩きつけた。そしてそのままだと逃げられるので、シールドについてるソードそして、腰のソードをさっきケーブルで作った輪っかに結びつけた物を地面に突き刺した。

「ハァハァハ……これでお前はもう動けまい。いい加減諦めやがれ」

敵ＩＳは尚も抵抗している為、依然として気が抜けない。

「おい凰、武装隊はまだ着かねぇのか」

「そうね、まだ姿は見えないわ。それよりも私も拘束手伝うわ、万が一って事もあるし」

「そうか、助―」
かる。そう言おうとしたら、爆発が起きた。どこで？　敵ＩＳからだ。
「ぐがぁ！」
「野上?!」
（なんだなんだなんだ！　今度は一体なんなんだよ?!）
と俺は敵ＩＳの方を見てすぐ確信した。地面はえぐれ、奴のでっかい腕に備え付けられている銃身から煙が出てる。つまり―
（こいつ……まさか、自分ごと地面を撃って抉ったのか?!）
いくら強靭なケーブルで拘束されようとも、それを支えているのは４本のショートソードだ。それが地面から離れてしまえば奴の高い出力なら容易く解けるだろう。
（クソ！　しくった、こいつ中々に頭がキレやがる）
いや、そもそもＩＳ学園なんて所に襲撃してくるような奴だ。相当の愚者か頭のネジが取れた天才のどっちかだ。そしてこいつはあろう事か、学園のセキュリティに一切引っかからずに襲撃を行った。つまりは後者で確定なんだよこんちくしょう！
俺はすぐさまショットガンとサブマシンガンを展開、発砲する。
だが、そんなの効かんとばかりに接近し、その大木ぐらいあるのではないかと思われる大きさの腕で殴られてしまう。
「野上！　あんたよくも野上を！」
「ば！　バカそんな特攻そいつに効くわけねぇ！」
俺の予想は正しかった。凰は感情的になり過ぎて隙が多く、容易く敵ＩＳのビームによって撃ち落とされてしまった。
敵ＩＳはそのまま俺に歩み寄ってきた。歩いているのは先程のスラスターの不調のせいであろう。
（くそっ体が動かねぇ、ＳＥも残り僅か……ここまでか）
出てくるのはあの優しい人。
（いや？　良く持ったと思うよ俺は）
出てくるのはあの温かい人
（こっちはＩＳ乗ってまだ１．２ヶ月、対してあっちは……分から

ねぇけど想像を絶するような訓練をしているだろう）
出てくるのあの暖かな風景
（そんな相手に1度は拘束したんだぜ？　上出来だろう）
出てくるのはあの優しい笑顔。
そこでやっとゴールドはある事に気づいた。自分がある事について悲しんでいる事に。それは死への恐怖とは違った。それは―
『野上君』
親しい人に会えなくなるという寂しさだった。
（もうあの人に会えないのか……せめて最後にまた、あの人のあの暖かな笑顔を見たかったんだけどな）
そこまで考えてるからうちに敵ＩＳはすぐそこまで来ていた。そしてその腕が今振り下ろされンとしていた。
さようなら、山田先生……
そう心の中で呟いたその時、１つの銃声が鳴り響いた。その方向に顔を向けたゴールドは酷く〝安堵し涙を流した〟。依然として戦場である、この場で安堵したのだ。
なんたってそこには、彼の暖かな記憶の大半を占める〝あの人〟が居たからである。
「～～～山田先生！」
「助けに来ましたよ、野上君！　凰さん！」
そこで俺の意識は途絶えた。

２５話

「ハァハァ……なんとか間に合いましたね」
ラファール・リヴァイブを纏う女性―山田真耶は、この場の状況に少しの安堵と多大な自責の念を感じた。
（生徒達がこんなに傷つけられてやっと到着……これはかなり不甲斐ないですね）
それは生徒の命をギリギリで守れた事に対する安堵と、それ程になる前に辿り着けなかった自分の力不足に対してだ。
「ですが今は……」
そう、今はそんな事を思うよりもやらなければならない事がある。
「貴方を捕えさせてもらいます！」

そもそもとして何故彼女がここにいるのかと言うかだが、それはＩＳ襲撃直後まで遡る。

生徒が襲撃された、そして救助にはまだ時間がかかる……なら！
「織斑先生、お話があります」
「どうした山田先生。それはこの緊急事態に話さなければならない事か」
「はい、この緊急事態だからこそです……私単独なら、現場に急行出来ます」
「どういう事だ？」
先輩の疑問は確かなものだろう。現場に行けると言うことは、今現在ＩＳを所持していると言っているようなものなのだから。
「野上君の訓練の為に春休みの内から長期の貸出申請をしてまして、それが先日通ったのです。ここからなら１０分で現場に行けます」
「そうか！　それなら今すぐに現場に行ってくれ、でも１０分か……」
「あの子達の安否なら恐らく平気です」
私がそう言うと先輩は珍しく驚いた顔を見せた。
「それは何故だ？」

何故？　そんなの分かり切ってる。
「凰さんは言わずもがな、私の弟子も強いんですよ」
そう言って私はＩＳを纏いながら現場に急行した。

敵ＩＳとの戦闘は生徒２名・教師１及び、武装部隊の活躍により幕を下ろした。

『契約によってこれより、人格表現システムをアクティブに移行……』

「見覚えがある天井だ……」
野上ゴールドは見覚えのある部屋のベッドで目を覚ました。そこは……
「ここは、保健室？　でもなんでここに……ってそうだあのＩＳは?!」
自分が何故ここに居るかを考えて思い出す、自分が敵ＩＳの戦っていた事を。
その時ベッドの周りを仕切っていたカーテンが開く、そこに居たのは
「起きたみたいですね、気分はどうですか？　野上君」
「えっと、とりあえず大丈夫そうです……シャマル先生」
八神シャマル、このＩＳ学園の保健室室長を任されてる人だ。っといまはそんなことより……

「シャマル先生！　あの、あの敵ＩＳはどうなったんですか?!」
そうだ、今はとにかくあのＩＳの事だ。
「それはですね……」
シャマル先生に聞いた話を簡潔に纏めるとこうなる。
・俺と凰が戦闘不能になった際に山田先生が来て助かった事
・山田先生がその後１人で武装隊が来るまで凌ぎ切った事
・敵ＩＳとの戦闘が終わってから既に２時間が過ぎてること
・敵ＩＳの搭乗者は既に護送の準備が行われている事

２時間？
「俺２時間も寝てたんですか?!」
「そうよ、山田先生とかすっごく心配してたわよ。『私がもっと早く着いてれば……』って、あの状況じゃ仕方の無い事だったし何より貴方もそう思ってるでしょ」
「はい、そもそもあれは俺が不甲斐なかったからあぁなったわけですので何も山田先生は……」
野上がそう言った時、シャマルが一瞬顔を顰めたが野上自身が顔を下げていた事とその事が一瞬だった為気づかれなかった。
「……野上君体調はもう大丈夫なのよね？」
「え？　あっはいもう大丈夫そうです！」
「そう、でもまだ部屋に戻す事は出来ません。体力も回復し切って無いだろうし、幸い夕飯にはまだ時間がありますのでもう少し横になっていてください」
「……分かりました」
「うん、素直でよろしい。私は織斑先生や山田先生達に君が目覚めた事を連絡しますので席を外しますね」
「はい、ありがとうございました」
「いーえ、これは私のお仕事ですので」
そう言ってシャマルはカーテンを閉めてそのまま保健室を出ていった。

「不甲斐ないのは、私達の方ですよ……」

26話

敵ＩＳとの戦闘終了より数十分後、織斑千冬は苛立ちを隠せないままある所に電話していた。それというのも敵ＩＳの搭乗者についてだ、ＩＳとはパワードスーツである為にそれを纏う者がいる。だが、あのＩＳには居なかった……つまり無人機という事だ。

無人機の開発なんて聞いたことが無い、だが千冬は知っている。こんな規格外な事をやって退ける存在を知っている。それは――

「あれはどういう事だ、〝束〟」

『えー電話して開口一番がそれって、ちーちゃんは相変わらず冷たいなー』

「そんな事はどうでもいい、私はあれはなんだと聞いているんだ」

ＩＳの開発者にて〝天災〟、篠ノ之束である。

『あれってーもしかして無人機の事かなー？』

「それもあるが、何故学園を襲撃してきた。お前は何が目的だ」

『目的ねー最初は単なる興味本位だったんだけどーそうだね……〝母親〟として〝娘〟の我儘に付き合ったが合ってるかな』

「母親？　娘？　ますます訳が分からないぞ」

『そのうちちーちゃんにも分かるよ、束さんはまだまだやる事があるからじゃあねー』

「な?!　おい束、話はまだ――」

『箒ちゃんといっくん、それと……２人目の子にもよろしく言っといてねー』

「チッ切られたか……それにしても箒や一夏はともかく野上だと？本当に何がしたいんだあいつは」

「フフフ……まさかあんな事を言わせるパートナーに出会うとはねぇ、嬉しいものだねぇ」

山田真耶は医務室、そこに配備されているベッドの横で椅子座りな

がらそこに横たわっている〝彼〟を見つめていた。
（野上君に凰さん、無事……と言ったら良いのか分かりませんがとにかく良かった。命に別状が無くて）
だけど
「貴方達を守れませんでした、ままなりませんね。本当に……っとそろそろ私も戻らないとですね、ソレではシャマル先生私はこれで」
「えぇ、ですが貴方も気をつけてくださいね？　戦闘の直後なんですから」
「分かっています、お仕事が一段落しましたらまた来ますね」
そう眠る2人に告げると、山田先生は医務室を出ていった。

俺と箒は山田先生と入れ違うように医務室に入った。
「失礼します、1年1組の織斑一夏です」
「同じく、1年1組の篠ノ之箒です」
「同じく、1年1組、セシリア・オルコットです」
「あら、いらっしゃい。1組ってことは野上君のお見舞いですかね」
「はい、野上と鈴のお見舞いに。2人はどちらへ」
「そこのベッドに横たわっているわ、右が凰さん。左が野上君よ。2人共まだ目が覚めてないから静かにね」
そう医務室の先生が指さした方に視線を動かすと、そこはカーテンで仕切られており、先生が言った通り右に鈴、左に野上が眠っていた。
「ミス・シャマル、お2人は大丈夫なんですよね」
「はい、傷の処置は済ませています。ですが戦闘での疲労、そして突然の実戦による過度のストレスで目覚めるにはまだ時間がかかると思います」
「そうですか……」
「そう落ち込むなオルコットよ、確かに2人が目を覚まさないのは心配かもしれないが先生も傷の処置は済ませていると言っている。今は2人を休ませる事が先決だ」
「そうですわね、ありがとうございますミス・篠ノ之」

「いや、気にするな」
その後、俺達は少し過ごした後医務室をあとにした。

27話

ゴールドは目を覚ますとひとの気配を感じ、そちらに顔を向ける。
「あ、野上君！　起きたのですね、気分等は平気ですか？」
「大丈夫ですよ、山田先生」
「あら、目を覚ましたのですね野上君」
「目を覚ましたのですねって、俺1回起きたじゃないですか。山田先生に伝えてないんですか？」
「伝えたわよ、でもそれだけ貴方達生徒を心配しているのよ。私達教師は、だからそこは甘んじて心配されて。とっくに凰さんは回復して戻ってるのですし」
「はぁ……ってもう9時?!」
「はいもう夜ですね。野上君、今食欲はありますか？　あるのでしたこれから食堂に行きますので一緒に夕飯を食べませんか？」
「あーはい、お腹ぺこぺこです。シャマル先生ありがとうございました」
「出来ればもうここにお世話にならないようにしてくださいね」
「善処します……」
◇？
（――気まずい、日頃無茶はしないで下さいって言われてたからなぁ。物凄く気まずい）
「野上君――」
「は、はい?!」
「本当に体は大丈夫なのですか？　何処かまだ痛むようでしたら先に部屋で待って頂いて、私が持っていきますけど……」
「だ、大丈夫です！　何処も全然痛みませんし、ほら！」
ゴールドはそう言うと腕を大袈裟に動かして見せた、それを見るや真耶も強ばっていた顔を少し緩める。
「そうですか……ですが不調が確認でき次第報告してくださいね？」
「はい、安心してくださいっと着きましたね」
「そうですね、じゃあ好きな物取っていつもの席で食べましょうか」

食堂には夜遅い事もあって生徒は居ないが仕事終わりの大人達が結構な人数居て、喧騒が響いている。
（こんなにも遅い時間なのにこんな人数、よく見ればほとんどゲッソリしてるな。やっぱり今日の事後処理が大変だったのだろうか。今日の、事……
大丈夫だ、もうあれは終わったんだ。もう安全なんだ、だから大丈夫。俺はもうダイジョウブ）
「野上君？　ボーッとして大丈夫ですか？」
「?!」
その言葉にゴールドは自分が既にテーブルに着いてる事に気がつく。
「料理を取って座ったと思ったらずっと料理を見つめて……やはりまだ本調子じゃないのですか？」
「えっとー、そーですね。少しまだ疲れてるようです、ですがまぁ大丈夫な範囲です！　さぁ、もう時間も時間ですのでさっさと食べちゃいますか」
「……それもそうですね」
（あっぶねぇ……これ以上先生達に迷惑かけれねぇしな、ボロが出ねぇうちに今日は早く寝るか。それにしても――）
そこまで考えるたら視線を料理から〝スプーンを持っている自分の手〟に移した。
（これがバレない事を祈るか、早く収まってくれ――）

◊

食事を済ませたゴールドと真耶は部屋に戻ると2人は風呂に入ると寝支度を終わらせると不意に真耶が腕を拡げながら話しかけた。
「そう言えば野上君、少しお話があるのでこちらへ来てください」
「こちらと言うと……」
「もちろん私の腕の中です」
「いやいやいや、いきなりなんですか山田先生。余りの急展開に追いつけないんですけど」

「――手の震え」
「?!」
「更に注意力散漫と深い思考……野上君、貴方は残酷な迄に感性が普通で聡い。この学園に来る生徒は皆多かれ少なかれ〝覚悟〟を持っています、その覚悟と言うのはＩＳという強大な力を扱うという覚悟です。ですが貴方と織斑君……彼は少し能天気な所があるのと、面識ある方が居るのでそこまで気負ってませんが貴方達は覚悟を決める前にここへ来ました。そして覚悟無い力をそれでも振りかざさなければいけない、ましてや今日は命懸け……人が〝頼る〟には充分過ぎる理由です。ですから、今は私を頼ってくれますか？」
　そう言うと山田先生は優しく俺を抱きしめてくれた。
（あぁ、これだ。この人のこの〝温もり〟がきっと俺は――）
「ではお言葉に甘えて頼ります、少しの間このままでいいですか？」
「少しと言わず寝る迄こうしても良いのですよ？」
「そこまでされると流石に男として恥ずかしいので……〝少し〟だけ」
「分かりました」
　そうして俺は山田先生を抱き返した、いつかこの人に――この優しい温もりをくれた人達に報いると誓いながら。

２８話

襲撃の翌日、事後処理が未だ終わらず急遽休みとなった。だが、俺と凰それにセシリアと織斑は校長室に呼び出された。

俺と凰は分かるがなんであの２人も呼ばれてるんだ？　校長室には俺らと校長先生以外にも織斑先生と山田先生が居た。

「今日は休みの中態々来て貰ってすまない、ただ昨日の事で君らは確実にこの学園を危機から守ってくれたのだ。そのお礼をさせて欲しい」

校長先生はそう言うとまずセシリアと織斑の方に顔を向けた。

「オルコットさん、そして織斑君。君達は指示を受け、冷静にＩＳを駆使し他生徒達の脱出経路を確保してくれた。避難が早々に出来たのは君達のおかげだ」

「あと、えっと、あの……あ、ありがとうございます」

「お褒め頂きありがとうございます」

そんな事やってたのか、全然気づけなかった。

そして今度は俺らの方を向いたと思ったら急に頭を下げて話し始めた。

「凰さん、野上君。君達には謝罪と感謝を、私達大人のミスで君達を危険に晒してしまった事を。そしてありがとう、君達の奮闘のお陰で避難の時間は稼がれ負傷者も最小限に抑えれた。本当にありがとう」

「ありがとうございます、そう言って貰えて何よりです」

「私からもありがとうございます」

その後俺達は〝お礼の品物〟という事で薄い茶封筒を貰ったのだが……なんだこれ？　何が入っているんだ？　と疑問に思っていたら織斑が質問していた。

「すいません、これ一体何でしょうか？　今確認してもよろしいですか？」

「あぁ、構わないさ」

「では失礼して……さて、中身はなんだろうなってなんだこれ？　小切手？」

「あぁ、それは学園から君達への特別賞与だ。あれからの脅威から学園を守ってくれたのだ、これくらいはさせて欲しい」
額は学生が貰うには過ぎるもので、サラリーマンのボーナスなんて比にならないのではと思う程だった。
それに皆は喜んでいた、きっと思い思いの使い道を考えてるのだろう。かく言う俺もその1人なのではあるのだが――

そうして今日はお開きとなった。

◇

あの後俺らは解散してとりあえず部屋に戻ってきた、そして俺はベッドに転がり悩んでいた。それというのも――
（きゅーにこんな大金貰っちゃったけどどうしよっかなー）
そう、先程貰ったこの小切手だ。あれだけあれば今迄の奨学金とかの返済に3分の2を回して残りを少し使おうと思ったが、それでも額が額だった為に凄く残ってる。
（まぁ、〝誰に〟使うかは決まってるんだけどどうしたものか……まぁ、悩んでても仕方ないから出るか）
そう思い外出準備を進めていたら不意に声が聞こえ始めた。
《外出ですか？　今日は気温が高いので薄着をオススメします》
「え？　……え？　誰?!」
それにビックリして辺りを見渡すも部屋には俺以外に居無かった。
「空耳か？　にしては凄くハッキリと聞こえてた気が――」
《こっちですこっち、貴方の指にハマっているものをよく見てください》
その声につられて両手の指を確認すると、〝待機状態の相棒の指輪の赤い線が点滅〟していた。
「え？　何、どうゆう事？　まさか故障？」
《故障ではありませんよ?!　全く、今迄私に良く話しかけてくれていたではありませんか》
「え？　……まさかお前、モルド・テンペスタか?!」
《Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ♪　私は〝貴方の相棒〟、ラファール・

リブファイブカスタムもといモルド・テンペスタです》

２９話

《Ｙｅｓ，Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ♪　私は〝貴方の相棒〟、ラファール・リブァイブカスタムもといモルド・テンペスタです》

俺は今、今年で何度目かになるかも分からない位に驚愕している、それと言うのもＩＳが喋り始めたのだ。

いや、確かにＩＳには１つ１つに感情があると聞いた。ある選手は声を聞いた事があるとも知ってる、だけどそれは高い親和性等で起こる……つまり――ＩＳを纏っている時に起きる事象であって、このように待機状態での会話の記録が無いのだ。

《あ、あのー……マスター？　出来れば何か言ってもらわないと此方もなんだが恥ずかしいのですが》

「あっすまん！　突然の事で気が動転して、というか本当にお前はモルドなのか？」

《む？　マスターは私の事を疑うのですか、いやまぁ仕方ないとは思いますけど本当に貴方の相棒ですよ？　何なら今まで貴方が語りかけてくれた言葉を一言一句言ってもかま――》

「分かった！　分かったからそんな恥ずかしい事はやめてくれ?!」

《そんなに恥ずべき事でしょうか？　私にとって１つ１つが思い出なのですが……》

「あーなんというか照れくさいんだよ、結構カッコつけた事も言ってたし。とりあえずお前がモルドだってのは分かったよ」

《それは良かったです》

「でも何で急に話すようになったんだ？　今までは俺が話しかけてもこうやって話せなかったじゃないか」

《いやーそのー何といいますか……話すと長くなるので簡単に言いますと、暗黙の了解みたいのがあったんですよ。会話に関しては》

「暗黙の了解？　何でそんな物があるんだ？」

《実はですね、白騎士事件ってあるじゃないですか？　あの時に当の白騎士さんが搭乗者と会話してもいいか篠ノ之束博士――私達のお母様に聞いた際に「親和性も高いしいいよーでもめんどくさい事にな

るかもだからあんま人前でやらないでねー」って言った為に〝話す際は高い親和性に加えて直接ではなくプライベートチャンネルによる隠蔽〟というルールが……》
「じゃあ何でお前はこんな風に話してるんだよ、思いっきし破ってるじゃん」
《まぁその……マスターと話したくてお母様に進言しましたので、どうか現マスターと会話の許可を――と、そしたら「え？　そんなの言わなくても騒ぎが起きなきゃ喋って良いんだよ？」って言われちゃいまして。それとこの事についてマスターに謝罪を》
「そりゃまた何とも……それで謝罪って？」
《昨日の無所属ＩＳ……実はお母様の差し金なんです》
「そうなのか?!　っていや確かにそれはビックリな事実だけどなんでお前が原因になる？」
《それは……私がマスターと会話したいと聞いたからです、今迄私の家族達は搭乗者と会話をしてる機体がルールのせいで少なく博士は不思議に思ってたのです。ですがお母様は私達の事を子供として接し、深く聞きませんでした。そんな所に私が会話に関する了承を得ようとして今迄の事に合点が行き、暗黙の了解をもどうにかしたいと思わせたマスターに興味を得てしまったのです。そしてその好奇心が暴走して――》
「あんな事をやってしまった……そういうことか？」
《――はい》
「そうか、なぁモルド。かの大天災様から俺への印象はどんな感じだった？」
《少なくとも今の所は悪い印象を、持ってないかと――》
「そうか、もしお前のお母様に連絡が着くとしたのなら伝言を頼まれてくれないか？　内容は――ＩＳを作ってくれてありがとう、俺はアンタのお陰で結果的に救われた。だから、ありがとうって」
《……え？　どうして？》
「どうしてって何がだ？」
《私のせいでマスターは危険に晒されたのですよ?!　マスターはあの

時確かに死を覚悟していました！　それ程迄に私は貴方を追い込んだんですよ！　それなのになんでそんな簡単に言えるのですか?!》
　モルドは知っている、現マスター野上ゴールドがここへ来てから色々な〝辛さ〟を襲っていってることを。そして何も出来ないもどかしさを感じている、その原因がそもそもとして自分達である故に。
「確かに俺はあの時死を覚悟した……いやマジであの時はダメかと思ったよ――でもな？　俺はＩＳに出会えて、この学園に来て良かったって思ってる。確かに今でもモルドを……ＩＳを纏う事に抵抗というか恐怖心の様な物は感じてる。
　だけどさ、それでも色んな出会いがあった、ＩＳに出会えないままの生き方じゃありえない出会いがあった、勿論お前も入ってる。だから俺は感謝してるんだよ、あの博士に。それにモルドの話聞く限り本当に殺す気は無さそうだったぽいしな」
《ありがとうございます、マイマスター。貴方は最高のマスターです》
「そりゃどうも、でも今度からはあんな強硬策はしないでいてもらえないかな。そのうち本当にコロッと死にそうで怖い」
《それはもう！　物凄く言いますから！》
　こうして、野上は相棒との初めての対話を終えた。
《そう言えばマスターは外出の準備をしてましたけど何処か行く予定でもあったのですか？》
「あーそれはだなって、そう言えばモルドって精神的な性別とかそういうの設定されてるの？」
《性別ですか？　一応会話のベースが女性に設定されているので女性と言えば女性ですが……》
「そうか、それなら少し手伝って欲しい事があるから一緒に行ってくれるか？」
《マスターとなら何処までも――》

３０話

あの後俺はモルドと共に街に出た、今迄も一緒に居たが前以上にそういう気持ちが強い。これからは２人の時はスピーカーで、外ではプライベートチャンネルで会話をする事にした。

さて、何で何時もなら練習をしてそうな俺がこうやって休んでるかと言うと……アリーナの使用者上限が既に達していたのである。よって俺は諦めて休日を私用に使おうと思った、というのも――

（やっぱりどういう奴が山田先生に合うかな）

〈ここはやはり彼女の明るい緑が映える、赤や黒等の濃いめの方がよろしいかと。〉

日頃お世話になっている山田先生へお返しを選んでいる、ただ……女性がどう言った物を好むか全く分からず手探り状態なのである。

（うーん、どうした物かな。しっくりこないなぁ……）

〈それではあちらの棚も拝見してみましょう、あちらにはあるかもしれません。〉

（そうだな……ん？　なぁモルド、これなんかどうだ？）

〈えっと、これは確かにあの方に似合いそうですね。〉

（だろ？　他にも見て良さげのが無かったらこれにするか）

〈そうですね、この店以外で何処か今日は行くのですか？　〉

（そうだね、後は本屋に行って本を買って終わりかな）

〈分かりました。〉

◇

「ふぅ、やっと終わりましたー」

「お疲れ様だ、山田先生。これからコーヒー飲もうと思うが山田先生も飲むか？」

「ありがとうございます、織斑先生。それではお言葉に甘えさせてもらいます」

「それにしても昨日の今日でやっと終わったな、報告書。全く、書き込

まなければいけない事が沢山あるのは仕方の無い事だがこうも多いとやってられんな」
「確かにそうですね、本来ならトーナメントが終わってやっと一区切りだーって所だったんですけどね」
「あぁ、そう言えば昨日野上はあの後大丈夫だったか？　あれだけの事があったんだ、何か無いか心配だったのだが……」
「少しだけ心への負担が強まってましたけど何とかフォローしときました、とりあえずはいつも通りです」
「そうか、それなら良かった。凰の方も2組の先生から聞いた限り心の整理がついているらしい」
「そうでしたか、それは良かったです。ってもう1時?!　お昼ご飯食べ損ねちゃいました」
「私も人の事言えた限りでは無いが、食生活はしっかりとした方が良いですよ。弟子にも心配かけてしまいますよ」
「あはは、心掛けます。それでは少し遅めですが昼ご飯食べに行ってきます」
「あっ山田先生ちょっと……」
「ん？　何ですか織斑先生」
「いやなに……その、私も食べ損ねているので私も同行しようかと」
「本当に先輩も人の事言えないじゃないですか……」
「面目ない」

◊

（よし、本も買ったしそろそろ帰ろっかな）
　そう思って帰ろうとすると不意に空腹感に襲われる。
「む、買い物に夢中になりすぎたか。余り出費は出したくないし、おにぎりでも買って食堂までの繋ぎにするか。あそこの飯美味いからな、きっと下手なレストランよりも美味いよ……レストラン行ったことねぇから分からんけど」
　そうと決まればさっさと学園に戻って飯でも食うか、いやその前に荷物置いてからでいいか。おにぎり買って帰るんだし。

31話

（さて、荷物も部屋に置いてきたし少し遅いが昼飯でも――ん？）
　ゴールドは買い物を済ました後、食堂へ向かった所お世話になっている2人の先生を見かけた。昼時より少し過ぎた故か人も比較的少なく、その中で大人とはよく目立つのですぐ分かった。
（山田先生と織斑先生？　昼って言うには少し遅いけど……やっぱり昨日の事関連なんだろうな。折り行った話もあるだろうし少し離れた所にすわ――）
「あら？　野上君じゃないですか、野上君もお昼ですか？」
「どうだ、偶には一緒に食事でもどうだ野上よ」
「あっはい、そうですね。それでは御一緒させてもらいます」
（誘ってもらったって事は普通に大丈夫って事か、それにしても――）
「俺が言えた事じゃないですけど昼ごはん遅くないですか先生方……」
「まぁ、大人は色々あるからな。それに野上だってそうじゃないか、休日って事だから何処かにでも行ってたのか？」
「はい、ちょっと買い物に。それで気が付いたら昼過ぎになってたんですけどぶっちゃけここの食堂の方が外で食うよりも美味しいし、何よりタダなので。それともし宜しければこの後部屋に来て貰えますか？　内密に相談したい事があるので」
（話して大丈夫何だな？）
　〈私はマスターの判断に委ねます、ですが二人だけの秘密が一日も経たずに消えるのは少し残念です……〉
（二人だけって、それはまた別の事で勘弁してくれ）
「む？　そうか、分かった。それで先程買い物と言っていたが、早速何を買ったんだ？」
「本を少々、それからまぁ……これは後で話します」
「今じゃいかんのか？」
「今はダメです」
「そうか、それなら待つとする」

そうして三人は少し遅めの昼食を摂った後部屋に戻った。
「それで野上、内密に相談とは一体何の事だ？　人払いをする程だ、それ相応のトラブルが起こったのだろう？」
「えぇまぁ、トラブルって言えばトラブルになるんでしょうかね。とりあえず驚くと思うので心の準備の程を」
そう言うとゴールドは指輪――モルド・テンペスタを嵌めている方の手の甲を、二人に差し出すかのように見せる
「モルド、もうスピーカーで話してくれて構わない。とりあえず二人に挨拶してくれ」
《了解Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ。意思疎通という面に関しては初めましてですね、モルド・テンペスタです。主従共々いつもお世話になっております、この度は博士より許可を頂いた為こうして大っぴらに会話が出来るようになりました。今後は私とも仲良くしてくれたらと思っております》
「……」
「またか……またなのかァ」
指輪を赤い線をチカチカと光らせながら話すモルドに対し、いきなりの事で山田先生は呆然とし、織斑先生は何かを察してしまったか目元に手を当てながら天を仰ぎ始めた。
とりあえず何故こうなったか今までの経緯をモルドと一緒に二人には話した、すると――
「成程、確かにこの事が世に渡ればまた大騒ぎだな」
「はい、今迄眉唾物と言われていたＩＳの魂。それが人工知能として確立されてると分かれば研究科目が増える事によって更にＩＳの需要が上がってしまいます」
「篠ノ之束という人間の知名度もな、ただでさえどちらもバカみたいにあるのにこれ以上上げてどうするというのだアイツは……とりあえずこの話は私から上に報告する、野上はこの事については他言無用でいいな」
「はい」
「とりあえずこの話はこれで終わりにするとして、本当にモルド・テン

ペスタ何ですよね？　この音声の主は」
《山田先生、正式名称ではなく気軽にモルドちゃんとお呼びください。そしてその質問については肯定、その通りです。先程も言いました通り、私はこの春よりマスター野上ゴールドと共に空を翔けてきたＩＳ。モルド・テンペスタのコアＡＩです》
「むぅ……そう説明されても中々に実感が湧きませんね、すいません」
《いえいえ、突然の事ですので整理がつかないのは仕方ありません。これから慣れていただけたら私は十分です》
「が、頑張ります！」
　それからは今後のモルドについて話した。
　先ずモルドの事は他言無用である事、基本的に会話は個人チャットを使う事、大まかにだがこの二点を言い渡された。
「さて……野上、相談したい事についてはこれで終わりだと思うが結局お前は今日何を買ったのだ？」
「あぁそのーそれはですね……」
　ゴールドは多少いい淀みながらも〝二つの紙袋〟を持ってきてそれぞれを二人に差し出した。
「日頃お世話になってる人達に何かお返しをと思いまして、その……所謂ぷ、プレゼントです。受け取って貰えますか？」
　その行動に二人は少し驚くも頬を綻ばせながら受け取った。
「ありがとうございます、野上君♪」
「ありがたく貰おう、それにしても山田先生はともかくとして私にもか」
「はい、織斑先生にも何かと感謝しているので。中身は山田先生の方がペンダントを、織斑先生はこういうのには興味が無いと思い実用性を込めて万年筆を買わせて頂きました」
「フッよく分かってるな」
「わぁ綺麗なルビーですねフフ、ありがとうございます」
（喜んでもらえて良かったな）
「さっきお世話になってる人達にと言っていたが、私達以外にも渡す予定はあるのか？」

「はい！　他には田島さんとセシリアに贈ろうかなと思っています」
「そうなんですか、お二人共きっと喜んでくれますよ」
「そうだったらいいかな、それじゃ早速行ってきます！」
　そう言いながらゴールドは紙袋を持って部屋を出た。それを見送った千冬はふぅっと息を吐きながら呟いた。
「それにしてもお世話になってる人達に？ッか、周りを見渡せる余裕が出てきたと喜ぶべきか、自分への褒美をあげれてない事に心配すべきか悩ましいな」
「野上君はどう見ても嬉しそうでしたし、前者の方で大丈夫だと思いますよ先輩♪」
「あぁ、そうだな……それにしても生徒からこういった物を受け取るというのは一般的にセーフなのだろうか、特に山田先生は」
「ちゃ、ちゃんと公私を分ければ大丈夫だと思いますよ……多分、それに先輩もファンの方から貰ったりしますしそれと同じですよ」
「そういうものか」
　プレゼントを貰い喜びと悩みが湧いてくる教師陣でした。

３２話

色々あった休日を終え学校が再開した、既にクラスには何時もの喧騒が響いていた。

（うーん、皆さんいつも通り過ぎない？　肝っ玉すわり過ぎでしょ）

と、思いながらもいつも通り朝礼が始まる迄参考書を読むことにした。今回読んでるところは『如何に相手に情報を渡せるか』という戦術について、ＩＳにはハイパーセンサーという高性能なセンサーが搭載されている。それによりＩＳ操縦者は死角の情報や、肉眼では得られない距離の情報だって得られる事が出来る。だがそれは時として不利益になる事だってありうる、幾ら大量の情報を得られたとしてもソレを処理するのはあくまでも人間だ。だから考える〝前提条件の情報〟として必要か不必要かの選別を脳内で行われる、この工程をどうやったら遅らせることが出来るか、どうやったら混乱させる事が出来るか。ＩＳについてはやはり何歩も遅れている俺は、とにかく〝ＩＳの操作技術に依存しない〟戦術を取り入れないといけない。確かにＩＳの操作技術も必要だし、鍛錬を疎かにするつもりは毛頭ない。だがＩＳ（ソ）の操作技術（レ）は相手の土俵（土俵）、そんなフィールドで真っ向からやり合ったところで負けるのは明白だ。だからこそ搦手で相手の操作技術（土俵）を崩し、相手に本気を出させないようにする。

幾つか試案を考え出した所で朝のホームルームの時間になっていた。

「えーこれから朝のホームルームをやるんですがその前に、皆さんに嬉しいお知らせがあります」

「嬉しいお知らせ？」

「もしかしてかっこいい先生でも新しく来たんですか！」

「違います、本日からこのクラスに新しいお友達がやってくるんです。それでは入ってきてください」

山田先生がそういうと教室の扉から金髪の〝少女〟が現れた。

「皆さんはじめまして、フランスから転校してきました〝シャルロット〟・デュノアです。これから一年、皆さんと仲良くして貰えたら幸

いです」
転校生??――?デュノアの自己紹介が終わると脳の処理が終わったのかクラスメイトがブワッと沸き始めた。
まだまだ刺激が欲しい歳頃、それ故に綺麗な転校生というイベントに熱が入るのは分かる。けれど俺は逆に背中に冷や汗を流していた。
(シャルロット・〝デュノア〟……かぁ、多分俺の考えている通りであってるとは思うけど……モルド?、ラファール・リヴァイブの原型は留めては居るけどかなり改変してるしあんまり見せたくは無いなぁ)
そう、その理由とはゴールドが所有している専用機?――?モルド・テンペスタを見せてキレられないかが怖いのである。
(社長の娘ならきっと自社製ISにだって愛着なり誇りなり抱いてそうだしあんまり本人の前で見せたくないなぁ……)
そう考えていると織斑先生がクラスメイト達を戒める。
「静かにしろ、お前ら。今日の一限は前々から言っていた2組との合同実習だ、各自事前に連絡したようにISスーツを着用の上第2アリーナに集合するように?――?以上」
(モルドを見せる見せないはこの際後回しにして、今は移動だな)
「なぁ野上、更衣室まで一緒に行こうぜ」
「……いやまぁ目的地は結局一緒だしいいけどさ」
「よし!　それじゃあさっさと行くか、女生徒達に絡まれると時間がすぐ無くなるからな」
「それには同感だ」
俺達がこの学校に来てまだ日は浅いせいか未だにパンダ扱いというか、物珍しさから行く先々で何かと女生徒達に絡まれる事が絶えない。
事実上の女学校に男子が居るのが珍しいのは分かるがこうも頻度が多いと流石にやつれそうだ……そういえばIS学園は『ISが女性しか扱えないから』女学校になってるけどぶっちゃけエンジニアの育成とかどうしてるんだろ?　おやっさんみたいに男でもISに関わる人間は居るのにこの学校には男は今迄一人も入学した前例がない

……ことは別にエンジニアはエンジニアの専門学校みたいなのがあるのかな？
「だから？――？って野上俺の話聞いてるか？」
「ん？　あぁ聞いてる聞いてる、やっぱりラーメンは味噌だよなって話だろ？　めっちゃ同感」
「ラーメンどっから出てきた?!　俺の白式と雪片二型の改修についてだよ！」
「あーあれだろ？　遠距離はバススロットの関係上搭載出来ないから、手数で押すモードと一撃で決めるモードを切り替えるようにする。そして装甲は1部に集中させて防御は局部防御頼みにして、その引き換えとしてただでさえくそ早いスピードを更に上げる」
「そうだよ！　ちゃんと聞いてんならボケんなよ?!
「失敬な、ちゃんと聞いてたからこそボケたんだよ。そんで改修の件だけどいいんじゃない？　あの機体は変に汎用性目指すよりは尖りに尖った方が強そうだし……まぁ、操作性は前よりもグンっと下がるだろうし、改修するのに遠距離兵装1つも追加出来ないの考えるにやるんだったら覚悟決めてからの方が良いかもな」
「う〝ッ！　……け、けど遠距離武器に関しては俺も考えがあるからある程度何とかなる。前みたいにはならないから覚悟するんだな」
「覚悟したくないので戦いは辞退させて頂きます」
「そこはやる流れだろ?!」
　そんな事を話していたら目的地である更衣室に到着した、そのままＩＳスーツに着替えアリーナに向かった。

◇

「これより、1組と2組による合同実践授業を行う。気をつけ、礼」
「「よろしくお願いします!!!」」
　出席番号順に並んでいつも通り授業を始める挨拶を終えたが
（……とても居づらい）
《マスター、どうしましたか？　先程から何やら心拍数が上がってい

ますが……》
　いつも以上の居づらさを感じていたら相棒から心配する声が送られてきた。
（いやその……モルド俺の苗字は知っての通り〝野上〟だろ？）
《はい、そうですね》
（つまり出席番号はそこそこ真ん中だろ？）
《はい》
（そして今は出席番号順に並んでいる……周りのクラスメイトのＩＳスーツが目の毒過ぎるんだよ）
《あーなるほど、確かに男性であるマスターにとってＩＳスーツは情欲を駆り立てるような？――？》
（それ以上はやめてくれ、もっと意識しちゃうだろ！）
《コレは失礼しました……後でこの映像端末に送っときますね♪》
（本当にやめて?!）
「野上！」
「はいぃ?!」
　相棒と俺の今後の学園生活が危ぶまれる会話をしていたらどうやら織斑先生に呼ばれていたらしいマジで心臓止まるかと思った。
「全く……いいからお前も前に出てこい」
「あっはい」
　前に出るとそこには俺と同じように呼ばれたと思われる凰が居た。
「俺と凰、そしてここはアリーナ……こないだの再戦ですか？」
「それなら私も大歓迎、結局あの時は決着つけれなかったしね」
「はしゃぐな若僧共、お前らの相手は？――？あいつだ」
　そういうと織斑先生はハッチの方を向く、ソレに釣られるように俺らもそっちに目線を送るとそこには
「お二人の相手は私がやります」

俺の敬愛すべき師匠が居た。

３３話

　山田先生は華麗に着地するとそのまま俺たちの方に歩いてきてそう宣言した。
「山田先生と模擬戦……ですか」
「そうだ、お前ら２人が山田先生と２対１で模擬戦をする」
「人数差があるとはいえ生徒と教師でですか……」
「何よ野上、ヤル気ないわね。私とやった時の活気はどうしたのよ」
「あのなぁ凰、前に話した師匠は山田先生なんだよ。そんでこっちは未だに白星をあの人からもぎ取れてないんだ、気後れしても仕方ないだろ」
「そうは言っても授業なんだから仕方ないでしょ、さっさとやるわよ」
　そう言いながら凰はＩＳを纏った。
「何をしている、野上もさっさとＩＳを展開しろ」
「あっはい、分かりました」
（はぁ、やるんだったらタイマンが良かったのになぁ）
　そう考えながら野上もモルドを身にまとい戦闘準備を始め、３名が空に翔ける。
　定位置に着くと通信機から織斑先生の声が届く。
『定位置に着いたな、それでは模擬戦を始める。一同、礼』
「よろしくお願いします！」
「よろしくお願いします」
「よろしくお願いしますね」
『それでは、はじめ！』
「行くわよ野上！」
「おう！」
　号令が始まるのと同時に凰と野上は左右に分かれ、クロスファイアの陣形を取る。
（これは……）
（急ごしらえの連携でどうにかなるほど山田先生に勝つのは容易くない）

（だからこそ高い練度が必要にはならない遠距離兵装による連携体制にする）
（ある程度の誤射は必要経費と考えて近接は極力せずに遠距離で削りきる！）

「なるほど、下手に突っ込まずに『不可視の弾丸』と『多彩な弾丸』を活かしつつ連携をある程度ならごまかせる陣形だ。それなら一矢報いる事が出来るかもしれないが？――？そこまでだぞ？」

（くっそ、やっぱり〝訓練なしの連携〟は無理がある！）
俺が持ち前の弾幕で山田先生の行動を妨げ釘付けにし、そこを凰が衝撃砲で挟撃するって考え迄は良かった。なんせ俺の相棒は沢山の火器がある、敵の意識をこっちに向けさせるは容易いことだった。ただ相手が？――？
「想像以上にマルチタスクに長けてる事を除けばな」
『山田先生本当にどうなってんの?! こっちはアンタの方に意識が向いているであろうタイミングで死角からの攻撃してんのに、まるで見えてるかのようだわ』
「実際見えてんだろ、俺らだってＩＳのハイパーセンサーがあるから理論上は可能だ。ただあの人が〝視覚をセンサー頼りで回避出来る程の経験と余裕がある〟だけなんだよ」
（あぁそうだ、山田先生がセシリア対策の時になんて言ったか忘れたのかよ）
《彼女、オルコットさんの専用機の特徴はＢＴ兵器にあります。ですが、これは並列思考処理をこなせればハイパーセンサーで位置が分かるので捌ききれます》
（《知ってた》じゃねぇか、あの人にこんな数の挟撃を仕掛けた所で意味ないってことを！）
『どうすんのよ野上、面白いほど山田先生に当たらないわよ！』

「俺が特殊グレネードで錯乱をかける、最初の2発は通常弾で油断を誘って3発目を音響弾にする。ビビって不発すんなよ」
『言ってなさい！』
野上は盾2つをマシンガンを掃射しながら射出、ケーブルをエネルギーを消費しながら操作していき包囲網を構築していく。
（俺の攻撃も当たってくれれば御の字だがメインはあくまで足止め、グレネードも移動先への牽制。そして音響弾で狙う所は――？）
頭の真後ろ、人間の完全な死角ッ！

「空が……青いな」
「何ドヤ顔で言ってるのよ、撃墜されて大の字になってる癖に」
「現実叩きつけるのやめて」
結果から言うと作戦失敗、音響弾なんて何処吹く風。
何なら空間に固定してたケーブル掴まれてそのまま俺をハンマーとして凰に激突された後グレネードランチャーで仲良く撃ち落とされた。
ランチャークルクルさせながら構えてた山田先生可愛かったな、弟子として不甲斐なさ過ぎて涙でそう……
そう黄昏ていたら織斑先生が話し始めた
「今お前らが見た通り教師は皆熟練のＩＳ操縦者達だ、今後はしっかり敬意を払って接するように！
それでは余興も終わった所で本格的にＩＳ操縦の訓練を始める、それに当たり操縦者と同伴する必要がある為各自〝ＩＳ所有者〟である織斑、野上、オルコット、凰、〝デュノア〟、そして山田先生の6人をリーダーとして班を6つ作ってくれ」
「え？　シャルロットさん専用機持ちなの?!」
「あ、うんそうなんだ。言ってなかったっけ？」
「言ってないぞ～」

突然の新事実に生徒達がワラワラとシャルロットの方に集まって行った。
「それじゃあ紹介するね、コレがデュノア社製第三世代ＩＳ？――？【ネールアンフィルミエル】！」
シャルロットのＩＳは一見すれば野上や山田先生が扱うラファールと酷似していた、ただ脇下から胸にかけての所に装甲が追加されて色がオレンジになっている。
「……あれ？　ラファール？」
「あぁうん〝この形態〟ならそういう反応になるよね」
「あ、気分を悪くしちゃったよねごめん……」
「いやいいよ、この子のもうひとつの姿を見せるから」
（もう１つの姿？　何だろう）
俺はシャルロットの方に行っていないクラスメイトと班決めをしながらそれとなく聞いていた。
「それじゃあこの子が第三世代である所を見せるね」
シャルロットがそう言うと突然ガシャゴショと機械音を立った為びっくりしてついそっちを振り向くとそこには？――？
「ジャーン！　コレがネルエルのもう１つの形態だよ！」
〝両肩の上に腕が増えて合計４本になっている〟シャルロットが居た。

３４話

「腕が４本に増えた！」
「強そう！」
「ゲテモノ感凄い！」
「あはは皆ありが？――？ちょっと最後の一言誰が言った?!」
（デュノアのＩＳ……変形の時見れなかったのはアレだが胸周りの追加装甲が見当たらない事からそれが変形したって事で良いのかな？
それにしても？――？）
相手にはしたくない、野上は素直にそう思った。見た目通り〝あのラファール・リヴァイブ〟をベースに造られているとしたら、〝あの豊富な武装〟を最大４つ扱えるという事だ。野上自身その豊富さがあったから特殊グレネードと多量の火器による戦い方を見つけれた、しかしそれは正攻法では無い。
相手はデュノア、本家本元である彼らが造った機体だ。操作性が悪くて武器が扱い辛いなんて言う本末転倒な事は無いだろう……
「披露会もいい加減にしろ、今は休み時間では無いのだぞ！」
そんな事を考えていたら手を叩きながら織斑先生が注意をし、シャルロット専用機披露会は幕を閉じた。授業内容は俺が春期講習で初めにやったＩＳでの歩行演習だった、しかし1人あたりの搭乗時間が少ないからか複数人まだ動きがぎこちない人が多かった。
余談として披露会中は俺・織斑・デュノアの3人に人が集中していたが織斑先生が注意した事によって上手い具合に人が分散した
（ソレでも我関せずと真顔で俺や織斑の所に居座ってた数人は度胸があるというか命知らずというか……）

「ねぇ、確か君って野上君で名前あってたよね」
「ッ！　お、おうそうだがどうしたデュノア？」
授業が終わり織斑と一緒に更衣室へ向かおうとした時突然デュノアに声をかけられた。
「いやぁさっきの山田先生との模擬戦が凄かったからさ、昼休みにで

も一緒にお話できたら良いなって思ってね。美味しいご飯を食べながらＩＳトークに華を咲かせない？　勿論織斑君とも一緒にお話したいんだけど、どう？」
（……割とモルドの改修については何とも思ってなさそう？）
「まぁ、俺はいいけど……織斑、お前はどうすんだよ」
「俺も参加していいなら参加させて貰うさ！　俺だってお前から色々と学んで起きたいからな」
「お前が俺から学んで役立つ事あるか？　武装から立ち回り迄全然違うだろ」
「〝だからだよ〟、俺はまだ〝俺の戦い方しか知らない〟。それじゃあ勝てない、だからこそ色んな人の戦い方を知っておかなきゃいけないんだ」
（ふーん、こいつもこいつなりに考えてるんだな）
（って、箒に言われた。でも実際その通りだからなぁ……頑張らないと！）

「やった！　それじゃあまた後でね！」
「おう、織斑そろそろ俺ら着替えないと間に合わなそうだから急ぐぞ」
「分かった、それじゃあまた教室でな！」
　そうして俺らはデュノアと別れ更衣室で着替えた後教室に戻った。授業はいつも通り進んでいき、そしてとうとう昼休みとなった。

35話

昼休み、俺らはシャルロットの誘いの元食堂に集まっていた。
「……なんか人多くね」
「箒たちも呼ばれてたんだな」
「うん、どうせなら他の人達の意見も聞きたいなぁって思ったから誘ったの」
「アレを誘ったって言うの少し無理があるわよ……」
「どちらかといえば有無を言わさずに連れてきたの方があっているかと思いますわ」
「あはは、ソレはごめんね」
「いやまぁいいんだが……何故私もなんだ？　すまんが私はセシリアや鈴と違って候補生でもないし、〝あの人〟関連も期待されては困るぞ？」
「あの人？　……あぁ違う違う、そういう事で呼んだんじゃないんだ」
「む？　そうか……益々理由(わけ)が分からんぞ？」
「転校してきたばっかの私が言うのもアレだけどさ、箒さん織斑君と仲良さげだったからさ。ただでさえ男子が少ない環境なんだから、少しでも気のおける人が近くに居た方が気楽じゃないかなって」
「成程……」
そしてデュノアの更なる言葉に俺は言葉を無くした。
「後私達華の高校生だよ？　恋バナとかしたいなって思うでしょ」
「……」
「……」
……何か露骨に箒と凰が目逸らし始めたな。
「恋バナって俺はよく分からねぇしなぁ」
「俺はそんな暇はない」
「私(わたくし)も今はそういうのに浮かれてる暇はないかなと思っております」
「うーん、皆ストイックだねぇ。私は今くらいは少しくらい異性とのふれあいを大事にした方がいいと思うよ？　特にココじゃ」
「む？　ソレはどういう事だデュノア？」

「いやだって、今のうちに少しでも異性とのつきあい方とかなんとなくでも覚えとかないとさ、大人になった時大変そうじゃない？」
「なんでだ？　俺は別に困らないと思うが？」
「いやね？　コレはもしかしたら私の周りだけかもしれないんだけどさ、割と〝行き遅れてる人〟多いんだよね……」
「あぁ……」
「まぁ、ＩＳが女性メインであるが故の弊害というかなんというか……」
「そう！　そしてココが少し前まで女子校だった事もあってか、若い時に男性と接する時間がかなり少ないの……いやほんと私も将来ああなるのは嫌なんだよね」
「そんなにキツいのか？　俺も小耳に話した程度だが男子の中でも、彼女ほし～とか、あの子と付き合いたかったなぁとかは話すらしいが……」
「なんかね、女性のソレはなんというか……エグい」
「あ～」
　何か女子は分かるのか納得の声をあげてるがまだ俺と織斑はピンときてない。
「あの人はコレが気づいてくれないとか、あの人のココが嫌だから振ってやったとか言う癖にお酒が入るととにかく誰でもいいから付き合いたいとか……欲望とプライドがごちゃごちゃになってるんだよねぇ」
「ＩＳに携わってる分無駄にプライドでかくなってそのまんまって感じよ、私の周りでもそういう人チラホラ居た気がするわ」
「へ～、大変そうなんだな」
「織斑、かなり他人事だが正直こと〝異性とのお付き合い〟、という話ならどっちかって言うと俺らの方がめんどくさくなる可能性高いからな？」
「え！　なんで?!」
「俺とお前は男性でありながらＩＳを動かせる人材だ、普通に恋愛以外にも政治的な意味で縁談だってさせられる可能性は十二分にある。

特にお前は〝あの〟織斑千冬の弟なんだからな」
「グッ分かったよ、てか早くＩＳについて話そ?!」
「それもそうだな」
　織斑のその一言でようやくＩＳ談義が始まった。
「やっぱりモルドのあのガトリングとシールドのデカさは少し柔軟性に欠けるんじゃない?」
「確かに俺もそう思う所はあるが、物量によるゴリ押しは割と使える分手放し難い。いざとなれば試合中でも即換装できる構造設計だから意外となんとかなる」
「え?　そうなの?!」
「そうよ、おかげでこっちは面食らったわよ」
「うん、私も一夏の考えには賛成だし、実際問題白式の中距離武装としてはそこら辺が限界だと思うよ」
「だよなぁ、後は機体の各所に小型のブースターを付けたいんだよな」
「ん?　ソレはどうして?」
「それは?――?」
　そんなこんなでＩＳ談義は思いの外盛り上がっていった。

　その日の晩、一夏は部屋でベッドに寝っ転がりながら考え事をしていた。
(やっぱり今の俺の実力じゃ白式に振り回されるだけになる、それに加えて今日皆と相談したカスタマイズをすると更にじゃじゃ馬になって更に振り回される事になる……けど俺が勝つ為にはそういう風に戦わないと勝てない……それなら)
　そう考えていると〝同じ部屋で寝泊まりしている〟千冬が仕事から帰ってきた。
「あっ千冬姉おかえり」

「あぁ、ただいま一夏。言っといた課題は終わらしたか？」
「まぁ、一応ね……なぁ千冬姉、頼み事があるんだけど良いかな」
「なんだ？　できる範囲ならやってもいいが……」
　そうだ、彼奴に勝つんだったら俺もなりふり構うな。手段は使えるだけ使え！
「二刀流での戦い方を、俺にレクチャーして欲しいんだ」

３６話　野上ＶＳ織斑

「模擬戦？俺とお前でか？」
「あぁ、頼めるか？」
　昼休憩の際、飯へ行こうと思ったら織斑に呼び止められて何事かと思ったが……
（本当になにごと？）
「どうした急に、何時もなら箒や凰とやってるじゃないか」
「確かに何時もなら箒や鈴に頼んでるけど、今回はお前とやりたい……いや、お前じゃなきゃダメなんだ。今日がダメならお前が大丈夫な日程で構わない、だから頼む！」
　そう言って織斑は俺に向かって深々と頭を下げる。
（う～ん、マジで目的が分からないけど……此奴のバカ正直な性格を考えるに本当に俺と模擬戦がしたいだけなんやろな）
「分かった、一旦山田先生に今日の放課後の特訓についてメニュー変更できるか聞いてみる」
「ほ、本当か！」
「あぁ、多分帰りのホームルームやる迄には連絡が来ると思うから来たら言う。できる日がかなり遠くなっても文句はいうなよ？」
「言わない言わない！んじゃありがとな野上！」
　そういうと織斑は箒達と一緒に教室を後にした、多分食堂に行ったんだろうな。

◇

　ゴールドは食堂で弁当を受け取った後、屋上で一人端末とノートを開きながら昼食を始めた。
「うーん、織斑の白式の大きな変更点はコレとコレと……あとコレか？」
　食事中も考え事をしたい時は、こうやって一人静かな所に訪れる事に決めたのだ。
「にしても本当にここは静かでいいな、ゆっくり考え事ができる」

ゴールドはそう独りごちながらハンバーグをひょいっと口に放り込んだ。
「ごちそうさま……はぁ」
昼食を終えたゴールドはそのまま横になり、ゆっくりも動く雲を見ながら休み始めた。
「雲は、ゆっくりだよな……風にゆらゆらと揺られて……気ままに……俺も？」
その時、端末から電話の着信音が鳴り響いて、言葉は止まった。端末には『山田先生』という文字が映っていた。
「もしもし、野上です」
「あ、野上くんこんにちは。今よろしいですか？」
「はい、大丈夫です」
「ではまず先程連絡を貰った織斑くんとの模擬戦についてですが今日やっても平気ですよ」
「本当ですか、ありがとうございます。けど大丈夫なんですか？せっかくスケジュールを組んで頂いたのに、急に模擬戦だなんて」
「平気ですよ、あくまでコレは野上くんの訓練です。なのである程度は野上くんの要望に乗っ取りたいんです」
「先生……ありがとうございます」
「いえいえ、これも先生のお仕事ですからお気になさらず。それで別のお話になるんですけど、今どちらにいらっしゃいますか？」
「え？今は屋上のテラスですけど、どうしたんですか？」
「いえ、最近昼時に野上くんを見かけない事が多くなったので。何時もなら食堂近くの自習室でこもっていたじゃないですか。誰かと交友を広げてるのなら別に良かったのですけど、教室とか見回した所そういう感じじゃなかったので」
「あー最近は気分転換にちょくちょく場所を変えてるんですよね、特にトラブルとかには巻き込まれてないので平気です」
「そうでしたか、それなら良かったです。連絡はコレで終わりですけど……」
「？」

「屋上に居るのでしたら風邪を引かないようにしてくださいね、ココ最近風が強くなってきましたので」
「わかりました、気をつけます」
そうして電話を切り、対戦に向けての作戦を立てていた。彼の心には、寂しさは残ってなかった。

◊

放課後、訓練室にゴールドと織斑、山田先生に加えてセシリアや箒と凰……更には珍しく織斑先生も見物人として来ていた。
「織斑先生も見に来たんですね、正直意外でしたわ」
「ん？あーまぁな、織斑の特訓は最近少し手伝ってたからな。どれだけソレが発揮できてるか確認しようと思ってな」
「なるほど」
「そろそろ始まるぞ」
セシリアの質問に織斑先生照れくさそうにしながら答える。
「それでは、野上ゴールドと織斑一夏による模擬戦を始めます。礼」
「「お願いします！」」
（織斑の白式……かなり見た目が変わってるな）
両腰部・ふくらはぎ・肩・背中にスラスターを、肘には小型のスラスターを付けてやがる。そして雪片も見た目が少し変化している。
白式は元々接近戦による短期決戦しか出来ないピーキー過ぎる機体だった、だから織斑は中・長距離戦をどうするか凄く悩んでた。
悩んで悩んで悩み抜いた結果……捨てたんだろうなぁ。実際白式に中長距離兵装を載せるだけならやりようはある、けれど使えるかどうかは別問題だからな。
「模擬戦……始め！」
山田先生のその声と同時に？――？目の前が真っ白になった。
「――――ガッ！」
〝織斑に切られた〟事に気づいたのは、吹っ飛ばされてフィールド端のエネルギーバリアに叩きつけられてからだった。

衝撃で無理やり空気を抜かれて消えそうな意識を食いしばり、吠える。
「それ、が……新しい白式、か」
「あぁこれが新しい白式――白式・刃衣(はごろも)だ！」
右手にビーム刃が伸びてる雪片、左手に鍔が無いショートソード……そして何より目を見張るのは装甲の至る所から伸びる仕込み刀だろう。
「装甲偏らせて、ブースタ増設して、ソコに仕込み刀か。随分思い切ったな、ゲテモノかよ」
「言ってろ、こっからがコイツの本領だ」
（2刀流……雪片が十手のような形になってる事から、鍔が無い方は恐らく元々の雪片の中央部分を抜き取ったのだろうな）
前回零落白夜を見た時実体剣部分は全て変形していたのに対し、今回は十手部分が残ってる事からあってる筈。
「考えてる暇なんかやるかよ！」
「クソが！」
そうこうしていると零落白夜を解除した織斑が突っ込んできた。
当然迎撃しようとしたが、驚くべき事に奴は俺が放った弾丸の線とも言えるべき物に対し沿うように駆け抜け、俺との距離を最小限の動きで詰め寄ったのだ。
「ハァァ!!!!」
「クソが！」
最速最短で距離を詰める織斑に対し、俺はシールドを構えて防御を取ることしか出来なかった。
「零落白夜！」
「やばい!?」
だが奴の方が1枚上手だった、構えていたシールドはガトリングごと両断された。奴は一向に止まらない。
「ウォオオオオオ！」
そのままブースターを吹かせ、回りながら？
？――？いや、〝舞いながら〟数多の刀剣で俺を切り刻む。

「このまま決める！」
「なめんなぁ！」
俺は右腰にさしてあるショートソードを逆手で引き抜き、〝雪片弐型の実体剣部分〟にぶつけた。
「くっ！」
「やっぱりな……零落白夜がどれだけ強力であろうと、そのビームに触らなきゃただ素早さが乗った剣撃だ！そんぐらいいなしてやるよ！」
俺は織斑の土手っ腹に突き蹴りをお見舞いし、そのまま直立不動で後ろへ距離を離しながら銃撃で牽制する。
（彼奴の武器はとにかく速さと重い一撃と鬱陶しい多数の刃による連撃。そしてそれらを敵にぶつける為のド級のバカとも言える物怖じしない精神にある……だが、剣である以上〝得物を振るう間合い〟が必要だ。俺の得意距離を維持し、万が一〝アイツの得意な距離〟になったら更にもう一歩踏み込んでどっちにもキツい距離にしてやる）
（野上との戦いで気をつけなければいけないのはとにかく飛び道具、だけどソレはさっきの打ち合いでなんとかなるのは確認できた。後は俺自身が〝最適解の避け方を選び続けて〟尚且つ〝相手に策を講じさせない猛攻〟をすれば勝機はある。白式にはソレをやれる程のスペックが十二分にある、覚悟を決めろ男織斑一夏）

（完封してみせる！）
（突破口を切り開け！）

ＷＩＮ：野上ゴールド
ＬＯＳＥ：織斑一夏

「だァァァ負けたあ！」
「何悔しがってんだてめぇもっと誇れ、圧倒的に有利な俺に弾薬全部使わせた上で剣全部折って、中距離専門の俺に拳と蹴り使わせた俺の為にももっと誇れじゃなきゃムカつくだろいいから立て、いつもみた

いな馬鹿面晒せコノヤロウ」
「ごめんごめんごめん！悪かったからそんな怖い顔でまくし立てないで！てか俺の脇腹蹴り続けないで痛い痛い！徐々に力入れ痛いんだよ?!」
「……はぁ、クソ。お前のせいで課題がまた増えたじゃねぇかホントまじ、あー泣き事言いたいのはこっちだよまじも～!!!」
「現在進行形で泣き言言うとりませんかい？」
「あ？」
「なんでもないです」
「ったく……だが、お前のおかげで改善点が洗えたともいえる。だから」
「だから？」
「……あんがとな」
「！お、おう！」
「じゃあな！俺はもう部屋に戻る！」
「えーいいじゃねぇかもうちょい話そうぜ」
「うるせぇ！汗ベタベタでだァやめろくっつくな！汗や砂でジャリジャリ気持ち悪い！」
「だから更衣室のシャワー室で話しながら洗おうぜ」
「だから俺は部屋でっておい！話せ！ちくしょうてめぇさっき全力出し切ったんじゃねぇかよこのばか力！」
「ははは！これでも千冬ねぇの弟だからな俺、そんじゃ行くぞ！」
「分かった！分かった行くから襟を掴むなくる！くるじぃ!?!?!」

37話　同居人に対する気苦労

ポカポカする、ふわふわする、安心する。
いい匂いがする、なんの匂いかは思い出せないけど最近ずっと感じていた匂い、安心する時いつも感じるあの香り？。
ゴールドは微睡みから徐々に覚醒していき、目を開け？――？
「すぅ……すぅ……」
「――――ッ?!?!?!」
敬愛する教師、山田真耶が目の前で愛らしい寝顔を見せているのを認識すると同時に、声にならない叫びを上げながら体と共に一気に意識を叩き起した。
（え!?　な、なんで山田先生が!?）
よくよく山田先生を見ると床に座りながらベッドに顔を預けている。恐らくは俺の事を見守ってくれてたのだろう。
「いやまぁ、練習終わりに風呂も入らず速攻寝てたら心配もするか……山田先生髪の毛乾ききってないし、せんせー？　山田せんせー？髪の毛ちゃんと乾かさないと風邪引いちゃいますよ？」
「ん……はい、起きます。だからあとちょっとだけ」
「いやいやダメですから、起きてドライヤーちゃんとしてください。あと寝るならせめて自分のベッドで」
俺は山田先生の頭付近のベッド押し揺らして何とか起こそうと試みる。
「うぅん……はい！　起きます！　野上くんも、疲れてるようなので私みたくシャッとシャワーだけにするように」
「はーい」
脱衣所に行き服を脱ぎ始めるが、思考は先程の山田先生の……胸元が少しはだけたパジャマ姿に埋め尽くされていた。
「……」
冷たいシャワーが嫌という程心地よかった。
◇
翌日、朝の挨拶が始まる前に織斑に話しかけていた。

「なぁ織斑ちょっといいか？」
「ん、野上から来るなんて珍しいな。どうした？」
「いや、その……ちょっと、男同士で相談したいことがあってさ。よかったら昼休み、２人っきりで相談できないか？」
「まぁ、それくらいなら別にいいぞ。場所はどうする？」
「あんま他の人に聞かれたくないからな、屋上に弁当持ってって事でいいか？」
「おう、じゃあまた昼休みな」
「すまんな、助かる」
俺はそうして織斑に要件を伝えたら、自分の席に戻った。
「……男同士の相談、ねぇ」

◊

授業が終わり、野上と織斑は食堂で弁当を貰ったら屋上におもむいて居た。
その後方には、何やら見知った顔が幾つかあったが……
「な、なぁ……やっぱり辞めないか？　わざわざ２人っきりで話したいと野上が言っていたのだろう？」
「だからこそだよ箒、こんな面白そうな事覗くに決まってるじゃん！」
「そうよ、もしかしたらついでにあのバカの弱味も握れるかもしれないしね」
「そ、それは……その」
たまたま今朝の会話を聞いていたシャルロット、そしてそんなシャルロットに呼ばれたが乗り気では無い箒とノリノリな鈴。
「箒さんの気持ちは分かりますが、もしかしたら私達でも力添えができるかもしれません。聞くだけ聞いてみる価値はあると思います」
「ワタシも、あの２人自体に興味があるからな。聞いといて損は無いだろ」
あくまでもクラスメイトを案ずるセシリアに、鈴に誘われ興味本位で着いてきた〝ついこないだ１―２に転入してきた〟ラウラ・ボーデヴィッヒ。計５人が聞き耳を立てていた。

「それで？　わざわざこんな所にまで来てしたい相談ってのはなんだ？」
「その前に確認したいんだが、お前の部屋の同居人って織斑先生であってるか？」
「「「「?!」」」」
「あぁ、そうだけどどうした？」
「「「「?!」」」」
　唐突な事実に驚きおののいてる出歯亀ガールズ、そんな事は知らない野上はそのまま話を進める。
「そうか、よかった……実は俺も学園に来てからはトラブル防止の為に、山田先生と一緒に暮らしてるんだ」
「そうだったのか」
「あぁ、でさやっぱりこう……年上の女性と一緒に暮らして行くとまぁその、不都合というか男性的に困る事ってあるだろ？　それについて愚痴というか、お前はどうしてんのかなって思って」
「例えば？」
「あー、その……例えば、山田先生が風呂上がりで少し、ちゃんと服を着れてないというか無防備になってるかなーみたいな」
「あーはいはい、なるほどね。あるある」
「分かってくれるのか!?」
「あたぼうよ、俺もそういう時あるもん」
　野上はこの時本当に、心の底から織斑の事に感謝した。同じ男性、同じ年齢、同じ境遇に同じ悩み。溜まりに溜まっていた愚痴をこれでようやく語り合えると思った。
「流石に身内とはいえそういうみっともない所は見苦しいよなぁ」
「……ん？」
　その気持ちは、ろうそくの火のように儚い存在ではあったが。
「確かに普段先生として気を張ってるんだし、プライベートの事とかとやかく言いたくないけどだらしなさ過ぎるのはちょっとアレだよなぁ」
「え？　あの、えっと、あれ？　……あっ」

ここで野上はようやく気づく、己と目の前にいる男の違いを。それは？――？
「流石にあの歳の〝姉〟に生活態度について注意は気が引けるもん」
血の繋がりのある保護者かどうか、だ。
（そりゃそうだよな！　だってこの人達姉弟だもんな！　そらそういう所見てもなんとも思わないよな⁉　なんなら風呂だって一緒に入ってた可能性あるもんな⁉）
焦ってる野上を見てこいらで出歯亀ガールズも、〝野上の本当に相談したかった内容、そして唯一同じ男性でもある織斑にも話しづらくなった〟事に気づき申し訳なさと同情の念がこもった瞳で見守る事しか出来なくなっていた。
だが男野上、もうやけくそ気味になって長々と姉に対する愚痴を零す織斑に再度仕掛ける。
「それでさぁ」
「織斑先生に対する愚痴はそこまでにして、俺が相談したい本質について言ってもいいか？」
「え？　あ、そうだったなすまん」
「ありがとう、いやな？　お前ん所はさ、姉弟だからいいよ……俺と山田先生赤の他人だからな？」
「あ」
「それに、あんま言いたくないけどさ……俺もう高校生だぜ？　小さい純粋なガキと違って、〝そういう〟言っちゃ汚い欲求だってある訳よ？　山田先生めっちゃ美人だしさぁ……」
「そっか……お前ん所だと……」
「うん……俺、山田先生の事はめっちゃ尊敬してるしめっちゃ世話になってるから感謝しかないんだ。だから、だから山田先生に対して〝そういう風に見ちゃう自分〟がどうしても嫌で、それで今日は相談しに来たんだ」
「そっか……」
なんでお通夜みたいな雰囲気になってんだよちきしょう！
「まぁその、なんだ……俺もお前ももう年頃の男だし、〝そういう欲求

〝があるかないかって言われたらそらなぁ？　って感じで普通の事だと思うけどな」
「だけどよぉ……」
「どうせ俺達は最低でも1年、長けりゃ卒業した後にだってこういう立場になってるかもしれねぇんだ。今からそんな気負い過ぎても潰れるだけだよ」
　そう言って織斑はサンドイッチペロッとたいらげた。
「織斑、お前……基本的にバカでアホだけど地頭はそこそこ良い方なんだな」
「喧嘩なら買うぞこの野郎」
「悪い悪い。そうだな、確かに今から気負い過ぎてもどうにもならないよな」
「そうそう、ソレと別に〝そういう欲求〟はあんまり否定し過ぎない方がいいぞ」
「というと？」
「俺も周りから見たら淡白というか、興味無さそうに見えるのかダチに心配される事が割とあったんだよ。〝我慢しててもいつか爆発して飛んでもない事をしでかすぞー?!〟って。確かに山田先生に対し何かをしようとするのはご法度だが、思うくらいバチは当たらねぇよ」
「俺が神様だったら山田先生みたいな人で妄想する人には率先してバチ与えるわ」
「ははは、ちげぇねぇ。俺も千冬姉でそんな事考える不届き者が居たら率先してバチ与えるよ」
　そう言い合って、俺らは目を合わせて笑った。おたがい、大事な人が居ると男ってのは好戦的になるんだなって笑いあった。

「んで結局どうすんだよ」

「うっせ、隠れてしろ」
「アッハイ」
「愚痴はいいが俺からはこれ以上何も言えん」
「ごもっともですありがとうございました」

３８話　雷の舞と嵐の舞

火薬が炸裂する音と共にギャオンッと大気を震わしながら疾走する純白の雷。
「ハッ！　……ハッ！　……ハーッ！」
脳内回路が焼き切れんばかりにフル稼働させ続けた身体は、警報と言わんばかりに心臓を鳴らし、消火せんと汗を吹き出し、破裂させぬ為に口から灼熱の息を吐く。
滑り落ちそうな剣を強く握り戻し、息を整え、強くイメージする。強く、鋭く、雷鳴の如き動きを。
「はーッ！」
少年は、誰よりも早く翔け抜ける。

◇

疲れきった一夏は己に鞭を打ち、ようやく自室のベッドへ体を放り投げた。体と共に意識がベッドへと吸い込まれる。
「くひゃ?!」
そうやって落ち切る瞬間、背中に冷たい何かが降りてきて意識は叩き起された。
「な、なになに！　なにごと?!」
「全く、熱が籠った体をそのままに寝たら明日がしんどくなるぞ。氷当てといてやるからそのままにしてろ」
「ち、千冬姉か、びっくりした……突然氷当てないでよ、びっくりするじゃんか」
「一応声はかけた、お前が寝るの早いだけだ。ついでに体ほぐしてやるが、どうする？」
「お願いします」
（部屋だといつもこうなんだけどなぁ……）
一夏は千冬のマッサージを堪能しながら、公私での対応の違いに外でもこんくらい優しくして欲しいと思ってしまった。
「なぁ千冬姉、少しいいか？」
「なんだ」

「ＩＳの必殺技ってよりかは〝型〟を作ってみたんだ。俺的にはかなり形に出来て、模擬用のダミー映像相手程度なら通用するくらいになったんだ」
「ほう、型と来たか。どうして作ろうと思ったんだ」
「俺の白式はどうしてもやれる事が限られる、相手が何か行動すればそれは更にグンッと縮まっちまう。そんな時焦って愚策に走ったらその時点で敗北濃厚だ。だから〝できる事リスト〟を自分で纏めて、その時々で求められる行動を選べれるようにしたいって思った」
「なるほど、それは良い心がけだな」
「でしょ？　ソレで型ってのはソレの副産物、リストアップしてる時に、あっコレなら相手にこっちの優位性押し付けれるな！　って思えたのがあったんだ。詳しい事は見せたいから、明日時間取れないかな？」
「明日か、明日ならちょうど時間がある。いいだろう、お前がどれだけ白式を理解し、扱えているか見せてみろ」
「うん、あり……がと……う」
「ん？　一夏？」
「すぅ……すぅ……」
「寝たか、最近はかなり疲れてる様子だったし無理もないか」
そういうと千冬は氷袋をどけて毛布を被せ、数回頭を撫でたら自身も寝る準備を始めた。

◊

翌日、演習場の観客席には私以外にも人影が一つ存在した。
「篠ノ之、ありがとう。織斑の……弟の特訓に付き合ってくれていたのだろう？」
「え、あ、はい」
（一夏から〝例の技〟を千冬さんに見せると聞いたから同席したが、急にお礼言われたら焦るから前置きください千冬さん）
「そもそもとして言い出したのは彼奴です、私はソレを手伝った迄です。言い出した理由も、他から感化された事でしょうしね」
「そうだな」

私達は一緒に、何時もあのバカに振り回されてる苦労人を思い浮かべた。
「あ、出てきた」
「さて、態々私に見せたくなるほどの物だ。お手並み拝見といかせてもらう」
『千冬姉！　ちゃんとそっから見えてるー？』
「あぁ見えているぞ、それと今は〝織斑先生〟だ！」
『うひぃ！　はい！』
「全く、公私は分けろと何時もいってるだろうに」
「ですけど、今日はなんだか嬉しそうですよ？　織斑先生」
「……大人はからかうもんじゃないぞ」
「ふふ、すいません」
私は篠ノ之の頭をウリウリとしてやったら、一夏の方に視線を戻す。

◇

「さてっと、千冬姉が見てる手前ヘマはできねぇな」
目の前には半透明のホログラムがラファール・リヴァイブを映し出す、そしてそのままライフルをこちらに向けて発射してくる。
「雷の舞」
〝3度の爆発〟を経て敵ＩＳに近づき、そのまま回転する。
「嵐の舞ッ！」
手持ちの剣で、刃衣で、拳で、蹴りで、超近距離におけるインファイト。動けば当たるそんな距離にて、回避を行えるのは速さを制するこちらのみ。逃げすら許さぬ速さで〝舞い続ける〟。

◇

「個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）だと……！」
正直に言えば、彼奴のいう必殺技とやらに期待はしていなかった。ＩＳを半年も触っていない奴の成果など、たかが知れている。
だから今日は彼奴が少しでも上手くＩＳを操縦できていれば満足だったのだが……
「ソレがあの技の本来の名前なんですか？」

「本来のって、知らずに身につけたのか？　アレを」
「はい、元々白式は瞬発力と瞬間火力に全てを出し切った機体。改修によってソレらをさらにとがらせました、だから求められるべき行動は〝敵の攻撃には当たらず、こちらのみ攻撃する〟」
「つまりは、後の先」
「はい、ですので狙いを定めさせずに素早く接近するよう〝ジグザグに連続で瞬時加速を行う〟に行き着きました」
　篠ノ之が言っていることは理解できる、理解できるがソレを実現させるにはあまりにも早熟過ぎる。良くて瞬時加速（イグニッション・ブースト）を成功するか5分と5分なんて事だってあったろうに、それの発展技術をもうみにつけているなんて。
「ＩＳを使える時は分け目を振らずにこの練習のみを、使えない時はプールでポーズをとって、平時では瞬時加速を行っている人の動画をひたすら視聴して〝脳と体〟両方に叩きつける事に成功しました」
「そうか……」
　私との講習だって物凄く体力を消費しただろうに、下手をすれば野上よりも過酷な練習をめげずにやり続けたのか。
「今日は、沢山褒めてやらなきゃな……篠ノ之、晩飯を終えたら部屋に来い。そんな大きくはやらんがお祝い会をする、お前も付き合え」
「は、はい！　ありがとうございます！」
「お礼はいい、あのバカに付き合い切ったんだ。お前も労わないとダメだろ？」
　さて、今日は久しぶりに気持ちよく酒に酔えそうだ。